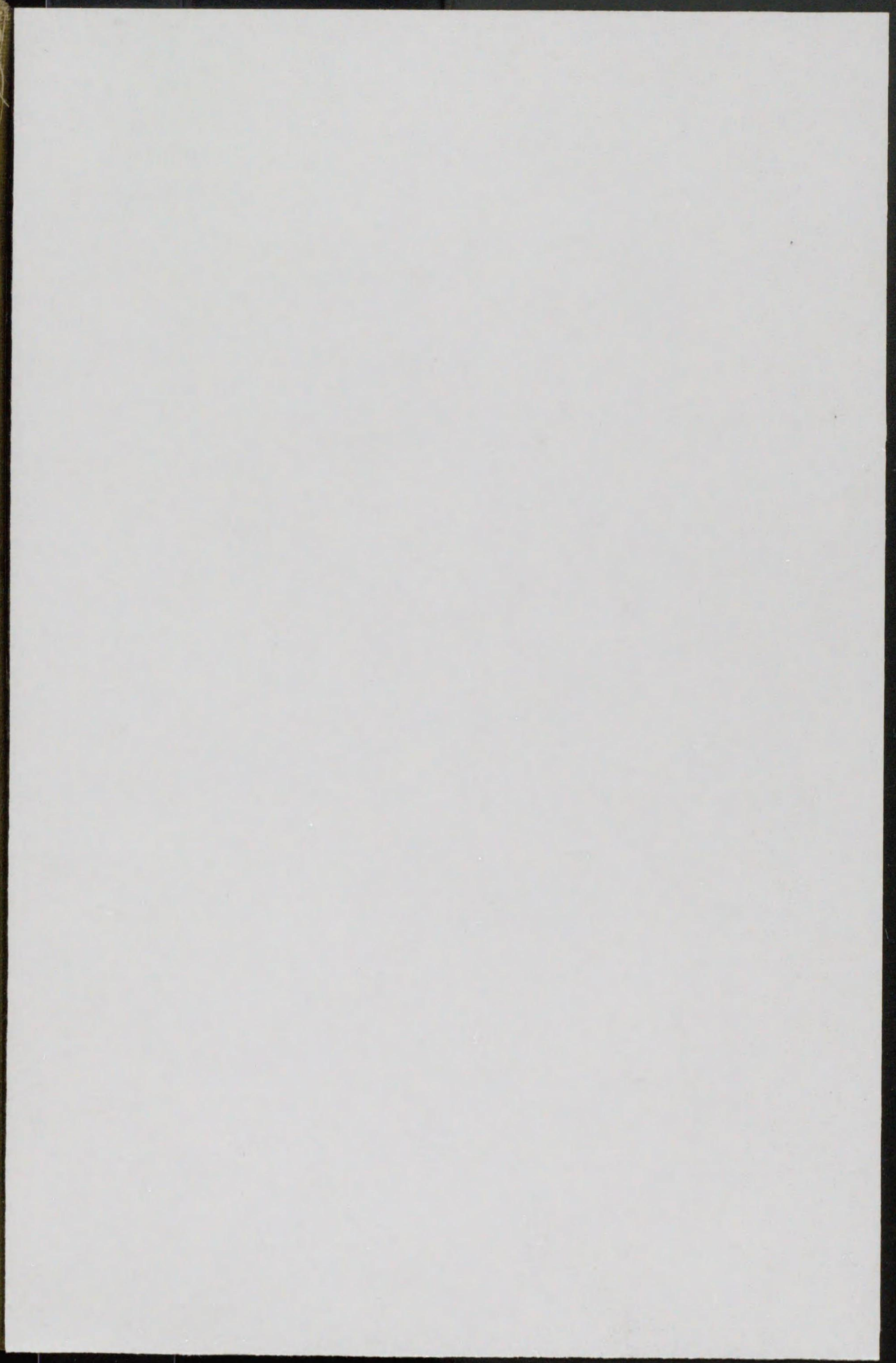


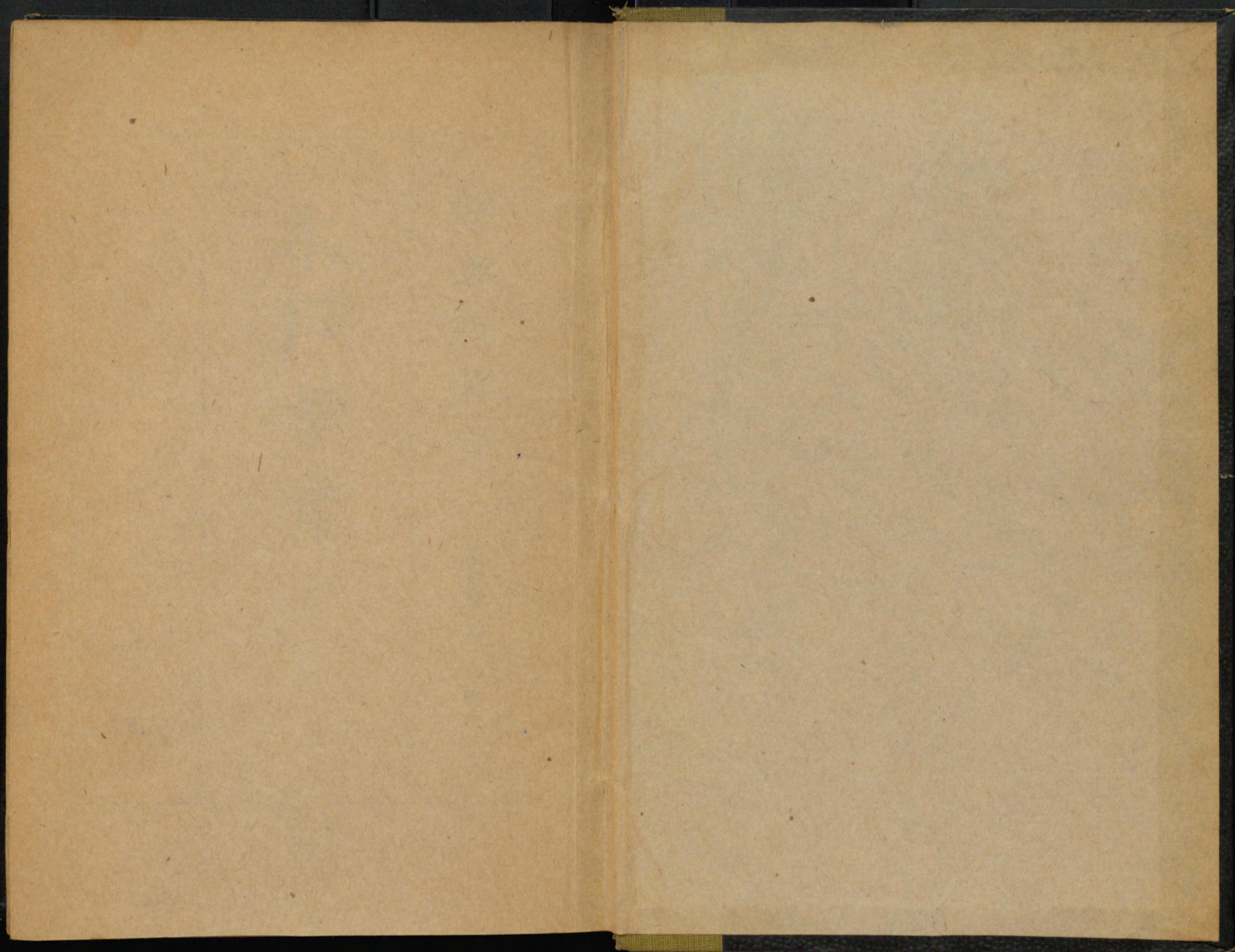
677-3



1200501576545

77  
3







木戸孝允

上

伊藤痴遊著

實錄維新十傑 第四卷

平  
凡  
社



677-3. 1

第三卷 木戸孝允 目次

序	詞(二一三)	三
櫻田事件	(二一二)	一四
少壯時代	(二一七)	五〇
齋藤熟の木戸	(二一八)	六九
坂下事件	(二一一)	八六
長井雅樂と木戸	(二一五)	一四
有備館時代	(二一七)	二九
長井雅樂と急激派	(二一五)	一四八
對州藩の懷柔	(二一三)	一六〇
島津久光の上洛	(二一三)	一六九

生麥事件(二一六)……………一七八

長州藩士の攘夷運動……………一九二

吉田松陰と門下生(二一三)……………一九五

將軍家茂の苦境(二一五)……………二〇一

攘夷祈願の行幸(二一三)……………二〇三

姉小路卿の遭難(二一三)……………二〇〇

長州藩の攘夷建策(二一五)……………二〇八

浪士の横行と會津藩(二一三)……………二四一

岩倉の失脚……………二四七

會薩二藩の握手(二一九)……………二四九

七卿落(二一五)……………二七二

新選組……………二八六

今井似幽の家……………二八九

幾松の出現(二一七)……………二九三

伊藤俊輔の取持(二一三)……………三二二

暗討の失敗(二一二)……………三三二

池田屋の亂闘(二一七)……………三三六

長州藩議の沸騰(二一七)……………三四六

長門守の入洛(二一五)……………三六八

蛤御門の戦(二一九)……………三八二

幾松の氣轉(二一五)……………四〇四

桂の出石落(二一五)……………四二一

幾松の苦心(二一九)……………四三七

長州征伐の事(二一四)……………四六五

勝安房の出身(二一七)……………四七五

長藩の謝罪(二一六)……………五〇一

長州藩の紛訌(二―二四)……………五二七

馬關開港の紛議(二―二)……………五五五

薩長聯合の筋道……………五六一

軍艦買入の事情……………五九三

坂本龍馬の斡旋……………六〇四

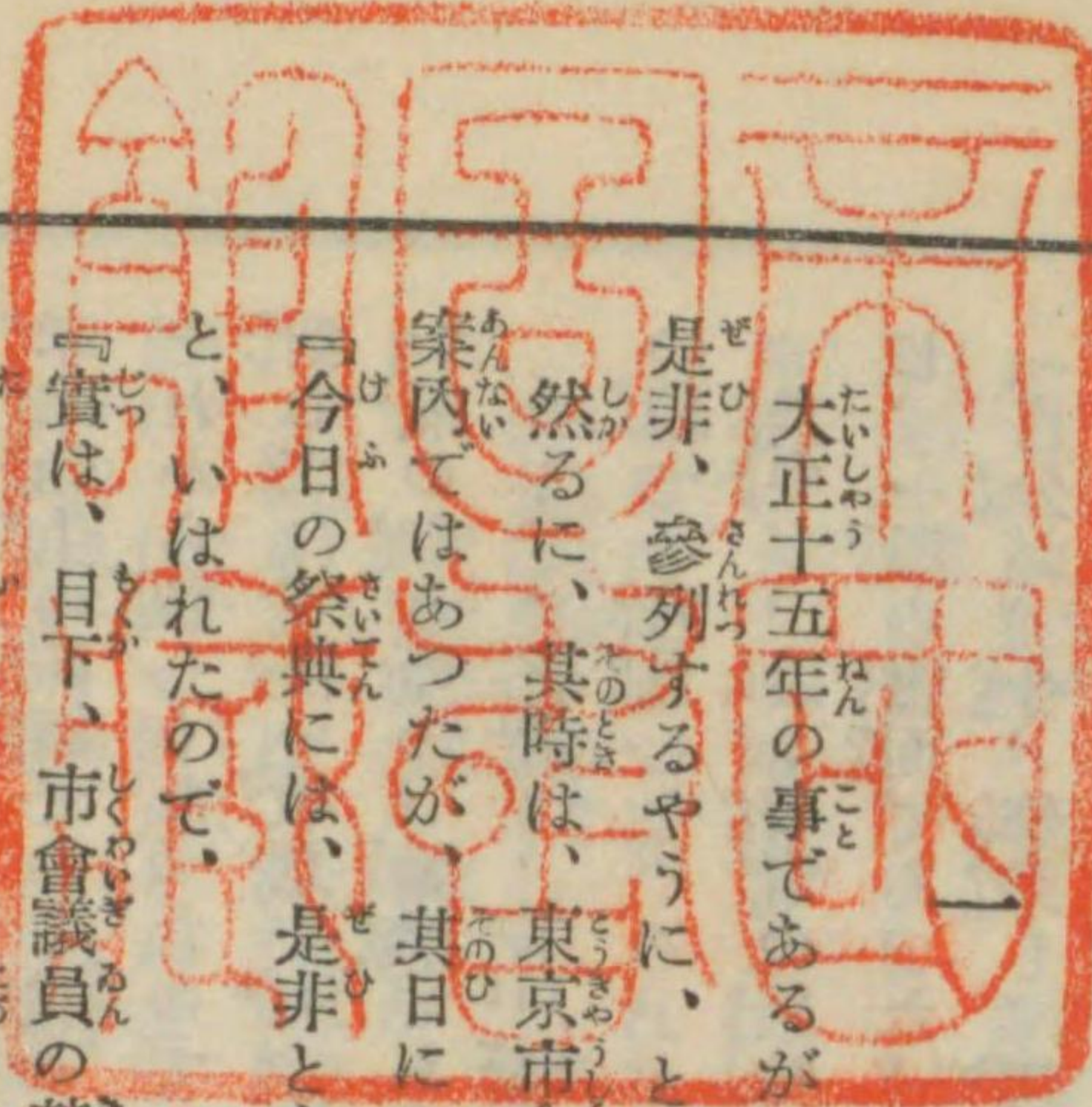
木戸の薩摩行……………六一五

大村藩の内訌……………六二二

木  
戸  
孝  
允

序

詞



大正十五年の事であるが、木戸侯爵家に於て、松菊先生の祭典を、執行するに當り、著者は、その案内を受けて、是非、参列するやうに、との招きに預つた。

然るに、其時は、東京市會議員の總選挙に際し、著者は、三たび立候補して、競争の眞最中であつた爲に、折角の案内ではあつたが、其日には、参拜を爲ぬつもりで居た所へ、來原理助といふ人が、朝早く、やつて来て、

「今日の祭典には、是非とも、御出を願ひ度いが、如何でありますか」と、いはれたので、

「實は、目下、市會議員の競争中で、殆んど寸暇が無い位であるから、今日は、不参するつもりであるが、特に、貴下が、斯うして、お訪ね下さるといふのは、何ういふ譯ですか」と、問返した時に、來原氏は、

「故人の履歴に就て、國民一般へ、最も廣く傳へて下さるのは、貴下であるから、木戸家に就ても、それを徳としてひどく喜んで居られ、今日の御案内も、さうした意味から、起つた事で、候爵も、特に、貴下の御参列下さる事を心待ちにして居るばかりでなく、木戸家に保存して在る、故人の書類を、すべて御覽に入れ度い、といふて居られ

る位であるから、何とか、御縁合せを願ひ度いが、如何でありますか」  
これを書いて、著者の心も、少し動いて来た。といふのは、木戸家の書類が、見られるといふ事は、此上も無い便宜であつて、此機会を逸しては、容易に出来る事でない。と、考へたから、何事を差措いても、行つて見たい氣になつた。

元來、來原といふ人は、其當時、鐵道省の役人であつたが、伊藤博文公の師、來原良藏の血族の一人で、良藏は、孝允先生の妹婿である、といふ關係から、著者が、木戸先生の講演をして居る時に、櫻助氏が、偶然、訪ねて来て、それから親しくなつたのである。極めて温厚な人物で、故人の事に就ては、種々、話も爲て呉れた所から、櫻助氏に對しては、深い敬意を有つて居たのである。斯うした人から、勧められてみると、只それだけの事でも、行つて見たい氣の起るのは、當然であつた。

そこで、著者は、木戸邸へ行つて、侯爵にも、御目に掛り、御焼香も済ませて、それから、陳列されて在る、書類の總てを拜見した。

其中で、最も著者の興味を唆つたものは、故人が中島三郎助の家に、修業をして居た時、元の師、松陰先生へ送りし、一通の書面であつた。尤も、それは草稿であるが、其書面の中に、斯ういふ事が、書いて在つた。

『自分が、今、修業して居る室は、頗る狭く、二疊敷の一室であるが、すぐ隣が物置であつて、干物が多く置かれて在る爲に、臭氣が甚だしいので、此一事には、頗る弱つて居る』

と、いふ意味の事が、書いてあつたのを見て、故人も、随分苦しい修業を、爲て居たのである、といふ事が、解つた。

中島は、相州浦賀の奉行手附の興力で、今の事にすれば、警部ぐらゐの資格であるが、此人は、中々の人物で、その交友としては、藤田東湖、江川太郎右衛門、武田耕雲齋等の人が、數へられた丈けでも、其爲人が思はれる。殊に

徳川の天下が、愈々覆へらうとした時、榎本釜次郎、大島圭介等と共に、函館の五稜廓に立籠り、花々しい戦ひをして、その長子と共に、枕を並べて、討死したのであるが、木戸先生は、其門生として、教を受ける爲に、浦賀に居た、其當時の手紙であつたから、少なからぬ興味を惹いたのである。

又、故人が、藩侯へ上つた、國防に關する、建白書の寫しも見た。それには、  
『大膳大夫父子が、親ら陣頭に起つて、討死する覺悟で、大に戦ふべし』

と、いふ意味の事が、非常に強い言葉を以て、書いてあつた。その當時、故人の歳は、漸く二十二で、身分も卑く藩侯に對して、斯うした上言を爲るやうな、資格は無かつたのであるが、それにも拘らず、『討死する迄戦へ』などと指圖がましい事を言ふたのは、實に驚くべき事柄で、其頃の事として、考へてみると、普通の武士として、容易に言

へる事てなかつた。それを押切つて言ふた處に、故人の偉い點は、現れて居ると思つた。

薩長聯盟の成立した、當時の事情を、巨細に書いた、草稿も見たが、それを讀むと、今迄の歴史や、著者の傳へて居た、聯盟成立の事情が、すべて覆へされて、重大な誤のあつた事を、發見し得たのである。

其點に就ては、薩長聯盟の経緯を述べる時に、詳しく語る事として、今は省略するが、是迄に傳へた、著者の物語は、改めて訂正せねばならぬ事になつた。

夫人松子へ送つた書面が、約三十通あまり在つたが、それを讀んでみると、恰で、長上の婦人へ送る、書面に等しく、藝妓上りの妻に送る、書面としては、餘りに丁寧過ぎる位であつたが、そこに、故人の人格の一端は、判然、現はれて居た。又、養子の正次郎へ、送つた手紙には、難解の文字に、すべて振假字が、附けてあつたのを見て、故人の心の優しさが、思はれた。

櫻助氏から、無理に誘はれて、木戸邸へ行つた事は、斯うした收穫に依つて、著者の爲には、非常な利益であつた事を思つて、今でも、その親切に、感じて居る次第である。



薩藩から、西郷と大久保が出て、長州藩からは、木戸が出た。而して、此三人の力で、幕末の難關を、見事に切抜

け、明治の新天地を、拓いたのであるから、その功績は、實に偉大なものであつた。

乍併、三雄は、藩の關係が異ふ丈けに、一身の立場も、全く相違して居たから、時としては、利害の一致せぬ點も

あつて、可成り、難しい關係ではあつたが、結局は、徳川幕府を倒す、といふ點に於て、一致を見たのであつた。

三雄を、一個の人として見れば、三人乍ら、其性格も異り、それ／＼に、特長が異つて居たから、其對照は、頗る

面白いものであつた。

木戸は、其時代の武士に有勝な、武張つた事や、理窟張つた事はかりでなく、粹な浮名を諷はれて、京洛の花柳界

にも出沒した。さうした苦勞人としての逸話も、相當に多く、此點では、西郷と大久保に、見られぬ妙味があり、兎

に角硬軟兩面にかけて、豊富な話の種を残して居る。

木戸は、齋藤彌九郎の門人として、劍術に於ても、一方の雄者であつたが、遂に一人の生命も殺らず、三尺の秋水

を閃めかした事は、只の一度もなかつた、といふ事であるから、此一事丈けから考へても、普通ならぬ人物であつた

事は解る。

那の殺伐な時代に、幾度か、劍戟の間を出入しながら、巧みに危きを遁れて、其腕前を、現さずに終つた、といふ

事は、實に面白い事である。

或時は、會津藩の武士に押へられて、藩邸へ伴れて行かれやう、とした事があつた。勿論、十數名の藩士に取巻か

れたのであるから、如何に、劍術の達人でも、これを切抜ける事は、容易な事ではなかつたらう。假に、切抜け得ら

れるとしても、それは、無益の殺生に過ぎないのであつて、木戸の如き、大志ある人物が、爲すべき事ではなかつ

た。

四條繩手を、やつて來ると、加茂川に臨んだ所に、少しばかりの空地があつて、磧を流れる、水の光りが、目につ

いた。

『甚だ恐縮で御座るが、一寸、用達を致し度いが、御許し下さい』

『用達なら、藩邸まで來れば、ゆつくり出来るのであるから、忍耐したら可からう』

『イヤ、それ迄に、忍耐の出來ぬ程、苦しんで居るのであるから、どうか御許し下さい』

藩士の連中も、外の事と異つて、大小便を爲したい、といふのに、『それは不可』とも言へず、澁々、用達を、させる

事になつた。

そこで、木戸は、空地の西側、加茂川に臨んだ崖端に立ち乍ら、先づ袴を脱いで、衣物の裾をまくり、悠々と、躊

躇み込んだ。

之れを見た連中は、顔を外向けて、その用事を済ますのを、待つて居たが、木戸は、其隙を見て、磧へ、ひらりと

飛び下り、小砂利を蹴立て、一目散に駈出した。

藩士達は、周章ふためいて、後から逐掛けたけれど、到頭、取逃してしまつた。

『何といふ、逃足の早い奴か』

『何しろ、我々は、駈出す支度が爲てないのだから、一足早く逃げられては、如何とも、する事が出来ない』

『その通りだ』

『それにしても、残念な次第ぢや』

各自に、愚痴を言ひ乍ら、引取つてしまつた。

大便をする振をして、尻捲りの儘で駈出した、木戸の姿は、あまり見よいものではなかつたらうが、逃足の早い事では、其後の事に徴しても、想像される位に、頗る早いものであつた。食逃といふ事は、世間に有がちの事だが、垂逃は、木戸の發明と言つて可からう。

大久保に就ても、それと、同じやうな逸話がある。

丁度、京都の薩邸に、勤めて居た時、未だ市職と言つて居た時代であるが、一日、三條通りを、ブラ／＼やつて來ると、向ふから三人伴の武士が、やつて來た。その容子から見ると、いづれも、浪人らしい風體で、各々一杯機嫌の威勢よく、何事か、高聲に語り乍ら、やつて來たのであつた。

大久保と、摺違ふ途端、どういふ機嫌であつたか、帶して居た、大刀の鐺が、浪人の腰に當つたので、何か事あれかしと、酒の勢ひで、往來を測歩して居た奴等であるから、堪らない。すぐに喧嘩を賣つて來た。

「待てッ」

と、大喝されたので、大久保は、足を停めて振返つた。

「御用で御座るか」

「お、用があるから、呼んだのだ。見受ける處、大小を帶して居る以上、武士に相違あるまいが、刀の鐺を拙者の身體に當て乍ら、挨拶もなく、行過ぎようとするのは、無禮千萬だ」

「お咎に預つて、何とも恐縮致す。意外な失禮を致して、申譯がない。改めて御詫を致すから、御許し下さい」

「イヤ、許す事は相成らぬ。御手前も、生きて居るからには、氣の付かぬ筈はないのだ。咎められてから、申譯では勘辨相成らぬ」

と言ひ乍ら、早くも、刀に反を打つて、チリ／＼と、詰寄せた。

大久保は、心の中で、奇怪千萬な、言懸りとは思つたが、斯うした奴等と、血を見る争ひは、無益の沙汰であるから、百万辯疏して、陳謝するほど、對手は、強くなるばかりであつた。

「これは又、迷惑千萬な、尊公方へ對して、反抗なぞ致す考へは、拙者に於て、毛頭御座らぬ、平に、御用捨を願ひ度い」

「イヤ、然うはならぬ。速かに立合をさつしやい。お手前も武士ならば、刀を抜く術ぐらゐ、心得て居らう。咎め立をされてから、彼是れ申譯するのは、如何にも卑怯千萬、左様な腰拔武士を相手に、立合をするのも、刀の汚れと思ふが、武士の情に、打斬つて遣はす」

此一言には、流石の大久保も、堪へ兼ねて、

「然らば、どうあつても、御用捨下さらぬか」

「ならぬ」

「止む事を得ませぬ、お對手を致さう」

「さア來い」

三人で、左右から、チリ／＼、詰寄つて來た。羽織を脱ぎ捨て、下緒を取つて、禪十字に綾どり、刀の璋をくつろげて、いざと言へば、直ちに切つて掛る、容子である。之れを見ながら、大久保は極めて沈着して居た。浪人は、益々のぼせ上つて、

「さア、早く勝負をせぬか、支度を何とする」

「まア、お待ちなさい。さう急かすとも、徐かに勝負いたす」

と、言ひ乍ら、悠々と、羽織を脱いで、やがて、それを袖疊みにして、懷中に入れたから、浪人は、之れを見て驚いた。最前から、薩摩者と見掛けたが、或る程、薩摩の武士は、吝嗇だとは、聞いて居たが、今、果合をしようといふ

場合に、羽織を、懐中へ收ふには及ばまい。如何にも、吝嗇な奴である、と思つて、蔑む心は、ますます深くなつた。

今度は、雪駄を叩いて、之れも懐中に入れた。オヤ／＼と思つて、見て居ると、大久保が、ぶツと、眞中の武士の顔に、痰を吐掛けた。額から鼻筋の處へ、痰が、ブラリと下つたから、呀と言つて、左の手で、押へる刹那、鏡ツと、氣合を掛けて、抜討に斬付けた。呀と叫んで、一人が倒れる。左の方の奴が、刀の柄に、手を掛けて、抜かうとする所を、横に拂つた一文字、腰車に、サツと切込んだから、之れも倒れた。

一人の奴は、刀を抜合す暇もなく、踵を返して、ドン／＼逃げて行く。それを見ると、大久保は、血刀を下げた儘、反對の方へ、ドン／＼逃出した。兩方逃げるのだから、是は、事もなく治つてしまつた。

此刹那の、大久保の動作は、實に素早いものであつた。今、命のやりとりをする、決闘の場合に、迎も、自分の腕前では、三人の武士を、對手にしては敵はぬ、といふので、横ツ面へ、痰を、吐き掛けるなどは、實に面白い。

どんな人間でも、愈よ息を引取る迄は、汚ない事は嫌ひなのだから、況して、達者な奴が、痰を吐掛けたら、必ず顔を押へる。そこを抜討にやれば、斬れるだらう。オヤと思ふ所を、又一人斬るなどは、全く面白い。死生の間に立つて、是れだけの頓智を有つ人は、膽ツ玉の据つたものでなければ、却々出来る事でない。

一一一

西郷は、一個の大人物として、同志の間は言ふ迄もなく、天下萬衆の輿望を、其一身に擔ふたが、之れを政治家として、見る時は、大久保と木戸に、遠く及ばなかつた。又、軍制上の事に就ては、多く津田出の説を聞いた。實戦家として、山縣、板垣に比較すれば、或は、一鑄を輸したかも知れない。然らば、どういふ點が、偉かつたのか、といふ段になると、判然、此點であると、答へる者は無からう。

たゞ、天下の輿望に關する如き、大問題が起きて、右せんか、將た左せんか、多くの人物が、其去就に迷つた場合、西郷の一言で、その決せられた事が、幾度もある。斯うした點から見ての西郷は、確かに偉大な人物であつた。又、その知ると知らざるとに拘らず、苟も、西郷の名を聞いて、畏敬の念を、起さざる者はなかつた。此一事は、大久保と木戸が、如何に倒に立つても、遠く及ばない點であつた。

大久保が、偉大な政治家であつた事は、今更言ふ迄もなく、重厚寡黙、事に當つて、果斷の力に、富んで居た事は、木戸よりも優れて居た。けれども、木戸の如く、才氣喚發、といつたやうな所は、更に無かつた。殊に、時の流を見て、それに添ふて行く適當は、大久保の長所でなく、木戸に、及ばざる點であつた。

又、人情の上に、稍や冷かなる點があつて、之れが爲に、衆心を繋ぐ事が出来ず、那の惨死を遂げた時も、一般の人からは、西郷の死ほどに重く見られなかつた。

若し夫れ、才氣の縦横なる點に至つては、兩雄の、遠く木戸に及ばざる所であつて、事毎に、その才氣は、鋒銳を現して來るのであつた。惜むらくは、好漢、狐疑心深くして、他に事を任し切れず、また動もすれば、議論倒れになる傾きがあり、之れが爲に、唯一の子分たる、伊藤博文には、洋行中に、見切りをつけられてしまつた。

その代り、時代の趨勢を察して、すべての方面に、新しい境地を、見出す點に於ては、西郷、大久保の兩雄に比べて二日の長があつた。

且、維新史を、一つの物語として、述べる場合には、最も多くの逸話を、残した者は、木戸であつた。従つて、本論は、興味本位から見ても、或は、兩雄の傳記に、優つて居るかも知れない。

昨今に至つて、木戸に關する著書が、引續き上梓されたけれど、今から二十年前には、殆んど、其資料を、得るに苦んだ程、木戸の事は、弘く傳へられて居なかつた。著者としては、誠に今昔の感に堪へぬ所であると同時に、今日

の盛観を喜ぶ次第である。  
 本編の中に於て、最も重要な事項の一つとしては、文久の政變であるが、是れは、木戸が中心になつて起つた、運動の結果が、その原因に、なつたのである丈けに、最も興味あるものとして、稍や詳しく述べる事にした。  
 明治になつてからは、新しい政治家として、國家の制度を調査し、或は、府縣會を興し、或は、大審院を設け、或は、元老院を作り、或は、地方長官會議を興し、其政治的識見は、多方面に向つて、現れて居る。  
 大久保と、衝突して、政府を退き、更にまた、大久保と妥協して、内閣に入り、之れが爲に、有名な大阪會議なるものが始まつた。それらの経緯は、本編中に於て、最も重要な點である事を、豫め斷つて置く。

但馬の出石に、潜伏して居た當時、病を得て、城崎の温泉へ、療養に出掛けた事がある。  
 女に就ては、頗る發展家であつたから、泊つて居た宿の娘に通じて、其娘は、妊娠して、木戸が、長州へ引揚げてから後に、兒を産んだが、遂に父子の名乗をせず、其子供は、不遇の裡に、十年ほど前に死んだが、木戸は、生前に、その子供の事を知らずに、來原良藏の子を養ふて、嗣子にしたのである。

初めの養子は、和田昌景の孫、勝三郎、即ち孝政であるが、元治元年に戦死したので、木戸家を繼ぐに至らなかつた。依つて、妹婿來原良藏の次男、正次郎を養子としたので、此人が家を繼ぐ事になつた。然るに、是も早世して子が無かつたので、更に其兄彦太郎が、其後を繼ぐ事になり、それが孝正である。而して、その子孝一が、今の當主、木戸侯爵である。

木戸の本傳を述べるに當つて、先づ櫻田事件から始めたのは、此事件が、當時の人心に、強い衝動を興へ、従つて大勢の上にも、重大な響きを來し、それが爲に、各藩の内情も、刻々に變つて行つたのみならず、幕府の威信も、漸く地に墮つるの傾きがあり、倒幕の志士をして、其心を強うせしめた關係は、大勢推移の上に、見通す事の出來ぬ、重要な因縁をもつ事になつたのであるから、此事件から、述べて行くのが、すべての上に、便宜である、と考へたからである。

何しろ、時の大老が、白晝に、而も、將軍居城の門外に於て、浪士の爲に、首を取られた、といふ事件であるから、幕府を侮る氣分が、各藩の有志の間に、漲つて來た事は、倒幕運動の上に、非常な刺戟を、興へたに違ひない。本傳を、大久保、西郷等の傳記と、併せ讀めば、幕末の側面史として、一貫したものにはならう、と思ふ。

櫻田事件

一

嘉永六年の六月三日、亞米利加の水師提督ペルリが、軍艦を率ゐて、相州浦賀へ、やつて来た。品川灣へ、直ぐに入る意で来たのを、浦賀奉行を、勤めて居た、戸田伊豆守氏恭が、むざ／＼と、異國の軍艦を通す事はならぬ、とあつて、配下の與力、中島三郎助に命じ、此軍艦の進行を停めて、嚴重に來意を、訊ねる事になつた。

伊豆守の末子が、明治十五年に、福島國事事件で捕はれた、河野廣中の連類の一人たる、花香恭次郎である。亦中島三郎助は、武邊の心得もあり、能く古今の書物も、讀んで居て、一廉の人物であつた。維新の騷擾の時分には、薩長の暴横を憤つて、飽迄も江戸を守る、といふ説を、唱へた一人であるが、遂に其説も行はれず、官軍の東下するに及んで、已む事を得ず、榎本釜次郎、大鳥圭介、荒井郁之助、松平太郎等の人々と共に、函館の五稜廓へ走り、徳川の爲めに、最後の氣を吐いて、親子枕をならべて、戦死して了つた。

打寄た まゝに凍ふるや 磯の浪

是れが辭世の一句である。今日では、浦賀灣頭に、その記念碑が、建つて居る。

ペルリの來意を聞くと、大統領の命に依つて、國書を齎らして来た、といふが、畢竟は、開國貿易を、迫る爲めだ

といふ事が判つた。其處で、伊豆守は、早馬の使ひを以て、徳川幕府へ、此旨を通じた。幕府の狼狽は一方ならず、閣老の會議となり、又、溜の間詰の集會となり、いくたびか、評論を重ねたが、何一つ定まらず、只だ集合ばかりに日を送つた。此時の將軍が、家慶であつて、極めて病身で、心の弱い人であつた。江戸城に、火災が起つて焼けた、といふ夢を見て、病が重くなつた位の人であるから、斯くの如き、大きな問題に就て、立派な見識を以て、適當な捌きをつける、といふやうな事は不能ぬ將軍であつた。之を頂だいて居る老中も、部下の役人や、町人百姓に對してこそ、威勢も利かし、無理も言ふたが、異人に對しては、その睨みも利かず、どうしたら可いか、といふ、見當さへ附かなかつた。

けれども、ペルリは、浦賀に待つてゐるのであるから、何とか返事をしなければならぬ。漸々相談の上で、聖堂の取締をして居た林大學頭を浦賀へ遣はし、談判を開かせる事になつた。之が世に有名な久里濱灣の會見である。

然るに、此の會見の結果は大學頭が、全然、ペルリの説に、感服して了つて、幕府への復命は、ペルリの爲めに、利益な報告であつた。他日、條約の結ばれたのも、夫等の邊の關係もあつた。併し、此際に於て、直ちに條約を結ぶ、といふ事は、無論出來ないから、一時を糊塗す爲めに、將軍の病氣を言立て、明年を以て確答する、といふて、ペルリを、歸國させる事にした。

今日の知識を以て、當時の外交を批議するのは、聊か氣の毒ではあるが、併し、何等の成算もなく、只徒らに、明年の春に來てくれ、といふて歸したのは、甚だ拙劣い返辭であつた。歲月は人を待たず、幕府が、格格の名案もなく、徒らに紛紜のみで、其の年が暮て、翌年になると、今度は、タウンセント、ハルリスが、ペルリに、代つて来た。品川へ、艦を乗付けて、陸詰の談判になつたので、幕府は、何うにも、斯うにも、切抜けやうがなかつたので、遂に、兜をぬぐ事になつて、乃て安政の條約なるものが、初めて結ばれたのである。併し、いよく條約を結ぶ迄には種々の内幕もあり、事情もあつて、調印とまで運んだのであるが、大體の略筋は、斯うした順序からであつた。

昭和の今日から考へれば、開國條約を結ぶ、といふやうな事は、固より當然の事であつて、決して不思議でもなく不都合でもない事であるが、未だ安政の頃に見ると、一般の人心が、其れまでに進んで居なかつたのみならず、殊に、其一面には、日本は神國である。清く美しい、神様の未裔たる、日本の國を、禽獸に如しき、夷狄の爲に汚されるといふ事は、如何にも忍びない事である、といふやうな、理窟を言ふて、却々攘夷の論議が盛であつた。現に、明治となつてから、内閣に、樞要の位置を占めた人達の中にも、攘夷の議論を唱へたものが多く居た位で、伊藤、井上、山縣の如きも、之が爲めに、高輪の御殿山に、英吉利公使館を、焼打したほどであつた。亦、實業界に於て、第一流の人に、數へられて居る、澁澤榮一如き人も、昔は、横濱の寄留地、焼打の發頭人に、なつた事もあるが、併し、今日になれば、那樣立派な人物であつて、日本の國は、俺が開いて、導いてやつたのだといふやうな、顔をして澄まして居るが、裏面から叩けば、斯うした埃も、出る身分である。歴史を讀んで、面白味があるのは、斯うした點である。

此の時世に、外國と條約を締んだ、といふのであるから、諸藩の有志、或は浪人といふやうな側の人達は、『實に怪しからぬ事である。苟も日本の土地へ、異人を導く、といふやうな事は、國賊に如しき所爲で、御先祖に對しても、相濟まぬ事である。斯くの如き、條約を結んだ、徳川幕府の罪は、許し難い』と、非常な意氣込を以て、攘夷論が、一時に勃興して來た。

然るに、之を斷行した者は、大老の井伊直弼であるから、直弼に對しての反感が、非常に昂くなつて來た。然し、井伊は、最初から此考へがあつたのではなく、事情の爲に壓迫られて、據なく條約に、調印したのであつた。心からの開國論者では、なかつたのであるが、兎に角、之に依つて、井伊が、一般の人から憎まれた事は、一方ではなかつた。

其れに、猶う一つ、井伊の憎まれた原因がある。夫は、當時十四代の將軍家定は、病が重くなつて嗣子がなく、夫が爲めに、誰か嗣子を定めなければならぬ、といふ事になつて、漸々、諸侯の間にも、其の噂が上り、幕府に於ても夫々に心配をした、が、併し、之に對して、相當の人物を見出す事が出来なかつた、といふものは、其當時の事として、考へて見ると、東西を辨へぬ、小兒を起て、夫を育てあげて、一廉の將軍にする、といふ事は、其の時世が許さない。即ち目の前、外國に對する用意をしなければならぬ、といふ事があり、又内には、諸侯の心が、追々に離隔て來て、其間には穩かならぬ、企てをする者もあり、夫等に對する防ぎもしなければならぬ。然うなつて來ると、嗣子を定るにしても、相當の人物をあげて、將軍に、萬一の事が、あつた場合に相續したら、直に其日から、一人前の將軍として、役に立つてなければならぬ、といふのであるが、然ういふ風に、詭へ向の人は、容易に得られないのであつた。只僅に、水戸の隠居、齊昭(烈公)の第七子にして、御三卿の一たる、一橋家へ養子になつて居た、刑部慶喜、此人の他に、何う探しても、適當なものが無いので、無論、この御方、といふ事に、一般の望みは、歸して居たのである。越前の松平春嶽、宇和島の伊達宗城、土佐の山内豊信、福山の阿部伊勢守等を初めとして、苟も一見識ある人は、孰れも慶喜を押し立て、將軍の嗣子にしよう、といふ運びになつて來た所へ、意外にも、競争者が現はれて、夫が爲めに、甚い暗闘が、幕府の内部に起つた。

慶喜を、將軍の嗣子にする、といふ事に、反對の側の人、各方面に、相當にあつたには違ひないが、第一の反對が、大奥の女中達であつた。慶喜の實父たる齊昭が、大奥の婦人達から、嫌はれて居た事は、一と通りでなかつた。齊昭が、大奥へ行つて、長廊下を、徐にやつて來ると、彼方から、お局付の女中が、文箱を持つて、進んで來た。廊

下の真中に出會たのであるから、如何ともする事が出来ない。水戸の御隠居様といふので、女中は、文箱を、高く擡げて、中腰になつた儘、廊下の端の方に、捲へて居ると、一足二足通り過ぎた齊昭が、何と思ふてか、足を停めて、其女中を、振返つて見た。

「コレ、其方の持つて居る、其れは何ぢや」

女中は、妙な顔をして、早速の答へが出なかつた。女中の持つて居るのは、文箱であつて、之を知らないといふのは如何に何でも、餘りの事と思ふから、鳥渡答へが出なかつた。齊昭は、猶も言葉を重ねて、

「其方の持つて居る、夫は何ぢや」

「はい、之は文箱でございます」

「否、文箱は判つて居る。長く垂れて居るのは、そりや、何ぢや」

女中は、益々驚ろいた。文箱の中結に、なつて居る、赤い丸打の紐が、結び切になつて、長く左右に垂れた先が、廊下を引いて居る。之を知らないとは、何事だと思つて、

「はい、之はお文箱の中結で御座います」

「其れは、能く判つて居る。中結にしては大層長い喙。短くして使へば、文箱の三個四個に、用をなすのであらう」といふて、莞爾笑つて、彼方へ行つて了つた。さう女中が堪らない。御用を済まして、お局の部屋へ歸ると、此事を話したので、之が一時に、大奥に弘まつた。

「水戸の御隠居は、何といふ吝嗇な爺だらう。あ言ふ爺様に、大奥へ、度々來られて、之も無効なものである、那れも無益なものである」

といふて、指圖をされては、妾達が堪つたものでない、といふやうな噂が、高くなつて來た。尤も、其當時の大奥の女中は、極めて虚榮心の強かつたもので、亦、夫が爲めに、大奥勤めを、好んで仕たものである。殿しい事を言はれ

るやうになつては、お勤めがならぬやうな理由であるから、水戸の隠居の評判は、非常に悪かつた。慶喜は、不幸にて、其人の子であつた、といふ爲に、彌上將軍の嗣子になりさうだ、といふ噂が出ると、大奥の反對が烈しくなつた、といふのも無理はない。昔も、今も同じ事、一家の事は、何うしても其の勢力は、婦人から起きて來る。旦那様が、何んなに威張つて居ても、妻君が、傍から智慧を付ければ、如何に偉い旦那様でも、妻君の一言には、心を傾けるものである。況してや、御城内の勤めを、仕て居るものは、猶更の事であつた。紀州家のお附家老、水野土佐守が、夙も此の機を察して、紀州家の若殿たる、慶福を繼嗣にしようとして、慶喜の反對に立つた。乃で、大奥の女中達が、夫に相加はつて來た。殊に、土佐守が、非常に辣腕の人であるから、相當に幕府の役人を手押け、大分勢力を得て來たが、併し、慶喜を、押立て居る、諸侯の勢力が強いから、容易に之に打勝つ事は難かしいのであつた。漸々相談の上、江州彦根の城主、溜の間詰の井伊掃部頭直弼を、押立て、大老にしたのである。大老になる時の條件の一つとして、必ず將軍繼嗣の事に就ては、慶福を押し立てる、といふ事に、相談が出来て居て、大老になつたのであるから、井伊は其約束を果して、慶喜を押し退け、慶福を立てる事になつた。之が即ち十四代將軍の家茂である。一説には、家定將軍の遺命と偽つて、左様にしたのだともいふし、また、密かに一服盛つたのだ、ともいふが、これは餘り保證の出來ぬ事である。

四

井伊大老の事に就ては、今日でも、是非の評が紛々として、却々決し難い傾きがある。雖然、決斷のあつた人には違ひない。此の一事だけは、如何に井伊を嫌ふ人でも、異議をいふ事は出来ない。但し其の決斷といふのが、或は時として、妄斷になつて居たかも知れないが、兎に角、一度決した事は、必ず行ふといふ風の人で、あつたに違ひない。之を要するに、開國條約を結んだのと、將軍繼嗣の一條に就て、多くの人の反感を買つた、といふ事は、其れに違ひ

ないのである。殊に、安政五年の大疑獄を起した事が、非常に一般の人の、感情を悪くして、夫が爲めに、井伊大老は、大悪人なるが如くに、いひ囃されたのであつた。其大疑獄の時分に、水戸の隠居を殿前にした、といふやうな事が、水戸派の有志浪人をして、非常に憤激せしめたが、其顛末の概略を、演べて置く必要がある。

薩摩の浪人て、有村治左衛門兼清と、いふ人があつた。此人は、海江田信義の弟であるが、兄を雄助といふて、三人兄弟であつた。薩摩の有志の中にも、攘夷討幕の意見を懐いて居る人は、却々多く居たが、有村も其一派を代表して、江戸へ出掛けて来たのである。年も若くて、腕前が、優れて居たので、自然、殺伐の風もあつた。或時、無銘の作ではあるが、如何にも立派な、一口の刀を求めたところから、其の切味を試して見たい、といふ考へがあつて、莽りに其の機會を、窺がつて居たが、何分にも、泰平の御代に、然うした場合は、あるべき筈もなく、獨り心を苦しめて居た。

今日では、然ういふ事は、夢にもない事であるが、舊幕時代には能くあつた事で、武士が、自分の腕を試すとか、良い刀を買つたから、其の切味を試すとか、いふやうな考へで、夜更くなつてから、淋しい所へ出て、人の来るのを待受け、試斬をする事が、能く行はれたものだ。有村も、試斬を、やつて見よう、といふ氣になつて、夜になると、三田の邸を出て、淋しさうな所へ出て来ては、人の来るのを、待つて居た。

名にし負ふ、將軍家のお膝許で、八百八町の賑ひは、一通りでない。夜が深くて、淋しくなつたといふても、多少の人通りはある。物蔭に躲れ、居合腰になつて、待受けて居ると、先方から、若い職人風の者が、二人連て、仕事歸りとして、高話しをしながらやつて来た。此所ぞと思ふて、有村が、刀の柄に、手を掛けたが、さて人といふものは、誠に美しい性質を、有つて居るもので、何うしても、刀が抜けない。見れば、まだ年も若く、親もあらうし、妻や同胞もあらう。後に残つた、家族の者が、何様に歎か。惜い試し者だが、許してやらうと、躊躇して居る中に、行き過ぎて了つた。雖て、老人が来たから、斬らうと思ふと、良心が頭を上げて来る。那の年になつて、定めし子もあるだらう。孫もあるだらう、誠に氣の毒である、と思ひ直す。其様ことでは、試切が出来るものでない。幾晩か、續いて出たが、同じ事を、くり返すばかりで、空しく歸つて来た。

五

幾度か、思ひ直しては、歸つて来るけれど、腰の名刀を、見る度に、何となく残念な心がついて、亦思ひ直しては、出掛けて行く。或夜の事、神田へ出て来て、例の昌平橋を渡り、左りへ切れて、聖堂坂の半途まで、やつて来た。今では、樹木も少くなつたし、左右に、往來も擴がつて、夜でも、人通りがあるやうになつたが、其頃は、未だ樹木が鬱蒼として、晝猶暗く坂の幅も狭いし、夜になると、可成り、淋しい所で、氣の弱い男は、一人て往來の出来ぬものであつた位だ。

其所へ来て、有村は、大樹の蔭に躲れ、窃に人の来るのを、待受けた。今宵こそは、必ず爲し遂げよう、といふ決心で、息を凝して、待つて居た。此様所へ、通り掛つた奴は、災難な譯で、餘程命冥利の、盡きた奴である。

坂の上から雪駄の後鐵を鳴らして、小田原提灯の灯に、道を照しながら、来る人があつた。有村は、昵と其の人影を見て居ると、漸々近付いて来た。在外に、年を老つた人で、短いのを一本、差して居る所から見ると、旗本の隠居でもあらうか。年は老つて居ても、帯刀して居る者を、斬るのは差支へはない、と思つて、居合腰になつて、待受けて居る。とは知らず、彼の老人は、急ぎ足に、其前を行過ぎやう、とした。物蔭から、跳り出た、有村が、抜討に眞二つと、切込んだ。途端に、老人の身體は、飛鳥の如く、飛退いた。有村が、勢ひ込んだ一刀は、空を切つて、思はず力が餘つて、前へ二足三足、空足を踏んだ。

『失敗つた』



と、刀を取直して、二度目に、切込んで来るのを、美事に引外して、其の老人が、ヤツと氣合がはひると共に、手許へ飛込んだ。轉す暇も與へず、有村の利腕を、確乎握つて、肩に擔いで、前へドシンと投げた。之はと思つて、起上らうとする上へ、うむと、馬乗に乗つて、

「聲をも掛けず斬掛けるとは、卑怯な奴だ。意趣遺恨があるなれば、名乗つて掛れ、夫とも人違ひか、さあ、有體に申せ」

老人ではあるが、其の力の強い事、如何に悶いても、刎返す事が出来ない。斯うなつては、既う仕方がないから、有村は、覺悟をした。

「恐れ入りました」

「恐れ入つたとは、何ぢや」

「最早抵抗仕らぬ」

「意趣か、遺恨か」

「意趣でも、遺恨でも御座らぬ。頃日求めた、名刀の切味を、試さう爲めに、眞の一時の出來心で御座る」

「何と、試斬ぢや、と」

「左様」

「ハツハ、、、。何といふ愚な奴ぢや。如何に名刀を求めたればとて、罪もなき人を、斬つて試す、といふ事が、

正しい武士の行ひと思ふか、拙者なればこそ通れもしたが、餘人なれば眞二つぢや」

と、言ひながら、徐かに立上つた老人が、袴の塵を拂ひながら、眠と、暗い中に、有村の容姿を、見て居る。面目なげに、有村は起上つて、

「何とも、恐縮の至りて御座る。斯く相成る以上は、逃げも隠れも仕らぬ。存分の御處置を、おとり下さい」

「うむ、却々良い度胸だ。己れの悪しきを知つて、存分の處置をしてくれろ、とは面白い。然し、悪いと悟つたか」

「はい」

「悪いと悟つたものを、強て處分するでもなからう。年は若いが、立派な腕前ぢや。然し、生物を斬るのは、未だし

ぢや、ハツハ、、、。」

有村は、切ての様子から考へて、此老人は、普通の武士ではない、と思つた。

「御老體の尊名は……」

「拙者か」

「はい」

「於玉ヶ池に、小さな道場を、設けて居る、千葉周作ぢや」

「えッ、原來、千葉大人で御座つたか」

「然うぢや」

有村は、心の中に呆れた。幾晩も、空しく歸つて、漸う決心して掛れば、此様に、強い人に向うとは、何といふ間拔な事だらう。

「手前、姓名の儀は……」

「否、お待なさい。夫は、聞くに及ばぬ。悪いと悟つて、將來を愼しむ、といふなれば、此以上のお訊ねはいたさぬ。

今一息の修行ぢや。然し、如何に技倆が出來ても、非義非道に、人を斬れば、其覺えた技も、却つて身に害を爲す

のぢや。之からは、自ら戒めて、斯様な事を、するてはないぞ」

有村は、三田の邸へ、歸つて来て、獨熟々考へた。成程、千葉周作といふ御方は、大したものだ。密に腕前が勝れて居るばかりでなく、武士の情を、知つて居る。姓名を名乗らう、とするを押へて、其れは聴くに及ばぬ、といふのは、如何にも、情の籠つた、一言である。あアいふ人物に就て、大いに剣法を學んだら、必ず大成するに違ひない。夫にしても、何うして行つたものかと、種々に心を碎きつゝ、其晩は、寢て了つた。翌日は、朝早く、準備を整へて、昨夜の中に、決心が定いたものか、千葉先生の道場を指して、急ぎ行く。

當時、江戸に於ての劍客としては、於玉ヶ池の千葉周作、京橋刺河津桃井俊藏、九段坂上三番町の齋藤彌九郎、之れを以て、三傑としてあつた。江戸に於ての三傑だから、亦天下の三傑ともいへやう。何人が一番に強かつた、といふやうな事は、人様々な評判もあつて、今日では、確然な批評も出来ないが、最も繁昌したのは、千葉の道場であつた。江戸の中央、神田の於玉ヶ池といへば、場所も、却々宜かつたし、道場なども、實に堂々たるものであつた。世間では、此の道場に、出入りする門弟が、四千人と、稱した位で、よし其四分の一と見ても、千人はある。町道場としては、實に大層なものであつた。毎朝、東天の白む頃から、稽古が初まつて、一町位先から、竹刀の音や氣合の聲が聞えた、といふ。

劍術も、現今では大分、勃興して来て、各學校其他でも、盛んになつて来たが、往昔のやうな譯には、逆も往くものでない。夫は、體操の道具に、使れる劍術であるから、昔のやうな氣概を以て稽古をするのではなく、打込む竹刀にも自然、魂が入つて居らぬから、いざといふ時には、何の役にも立つものではない。往昔は、之を以て、武士の表藝の一つと、してあつたので、必ず之だけは、學んで置かなければならぬ事に、なつて居たものでもあるし、又、必ず之を必要とする場合が、多くあつたのであるから、自然、必死になつて稽古もするから、敵を殲す事も出来たらうし、自分の身を護る道具にも、なつたのである。併し、同じ體操の道具に使ふとしても、鐵のオンヤブリのやうな物を振廻したり、殊投げなんぞをやるよりは、此方が遙かに宜い、と思ふ。斯うした技は、未始終廢らないやうに、流

行して置きたいものである。

今、千葉の道場、玄關先に掛つた、一人の武士は、例の有村であつた。

「頼む」

「どーれ」

「千葉先生、御在宅でござるか」

「先生は、御在宅でござるが、お手前は……」

「拙者は、有村治左衛門と申します」

「御用の次第は……」

「御目に掛つて、申述べたい儀の御座りまして、罷り出でました」

「暫時、お待ち下さい」

取次の門人が、奥に入つて、暫らくすると、出て来た。

「さア、此方へ」

といふ、案内に連れて、客間へ通つた。待間程なく、正面の襖が開くと、其れへ現はれたのは、千葉周作である。有村は、兩手を突いて、

「初めて御意得ます、自分は……」

と、言掛ける、言を押へて、千葉先生は、物徐に、

「いや、初めては御座らぬ、再度ぢや」

有村は、惘然した。

「何と、仰しやる」  
 「昨夜、聖堂坂で會ふたちやないか、若いに似合ぬ、物忘れをする御仁ぢや」  
 「はッ」  
 有村は、彌よ驚ろいた。昨夜は、暗の中の立合であつたのに、今ま自分を見て、すぐに夫れと悟つたのは、實に偉いと、益々敬服した。

「御炯眼のほど、只々恐れ入りました。先生は、覚えておいてなされましたか」  
 「昨夜の事ぢやから、忘れるには骨も折れるし、大方、今日邊りは、見えられるだらうと、實は思つて居たのぢや」  
 「其お言葉では恐れ入ります。自分は、薩藩士有村治左衛門と申します者、不束なものにござりますが、先生の門弟として、お取立て下さる譯には、なりませんまいか」

「諸、宜らう。腕前は立派なものぢやが、まだ心の鍛錬が、充分でない。夫さへ出来れば、申分なしぢやが、併し、却々宜い度胸ぢや」

有村は、何となく辱かしめられるやうな、心持がした。昨夜、那れまでの事があつて、今日、訪ねて来たものに、度胸があるなどいふて賞めるのは、お前は、鐵面皮い、と言はれるやうなもので、不快には思つたが、考へて見れば、鐵面皮と思はれても、致方のない譯だ。

七

千葉は、微笑を漏し乍ら、  
 「那れだけの膽玉があれば、少し修行すれば、隨に一家を成す事が出来やう。充分に、修行をしたら可からう」  
 「お言葉にて恐れ入ります。綠な膽玉も御座いませぬ」

「いや、さうでないよ。却々良い膽玉ぢや。昨夜、斬付けられた時、引轉して、お前を、取つて投げた。其時に、私  
 が、汝の上へ、馬乗に乗つたらう」

「はッ」  
 「其時に、拙者の手が、汝の股に入った。其れを覚えて居るか……は、ア、知らなかつたか」

「汝の陰囊を、拙者は、捉んで居たのぢや」

有村は、思はず赤面をした。自分の翠丸を、握られて居乍ら、それを知らなかつたのは、些と恥かしい。

「拙者が、握つた陰囊が、ダラリとして居たよ。那の場合に、驚いて居なかつたのは偉い。若し驚けば、陰囊が畏縮して居なければならぬ筈ぢや、アハ、ハ、ハ、」

有村は、彌よ千葉に心服して、終に千葉の門に、出入するやうになつて、劍法は、大層な腕前になつた。此人が、加勢をしたればこそ、櫻田門の井伊襲撃が成功したのであつた。

井伊大老の評判は、益々悪くなるばかりで、殊に、水戸の家來は、井伊に對し、怨みが骨髓に徹して、飽までも井伊を、倒さなければ止まぬ、といふ輩が、却々少くなかつた。殊に、藩中に於ても、佐幕と勤王の、兩派の軋轢が甚だしくなつて、一時は、佐幕が勢威を示し、攘夷黨の勢力が落ちたけれど、血の湧くやうな、元氣の有志は、多く之れが爲めに、重役と衝突して、藩命に背き、脱藩してしまつた。其の連中が、彼所、此所に集まつて、荐りに相談した結果が、井伊を襲撃する、といふ事になつたのだ。斯うした企ては、管に水府の浪士ばかりではなく、諸藩にも、夫々あつたのであるが、井伊大老は、更に行ひを慎まず、此等の人に對して、更に用意が、なかつたらしい。現に、有村の如きも、國許の同志と相計つて、何時か、井伊を除かう、といふ計畫を以て、出府したのであるにも不拘、そ

れも知らずに、看過した位である。

上州矢田藩主で、松平左兵衛督信和と、いふ人があつて、當時、お廊下附を、勤めて居た。井伊家とは、多少の縁合にも、なつて居たし、却々良い考へを、有つて居た人である。然るに、此人の耳には、種々な事が、傳はつて來るので、之を聞流しにして、置く事が出来ない。自然は、井伊の身に、關する事であるから、といふので、或日、櫻田外の、現今の參謀本部の有る所、井伊の邸へ、訪ねて來た。井伊の方でも、平生は、極めて懇親にして居るのだから、喜んで之を迎へた。寒暖の挨拶も済んで、左兵衛督は、膝を進めた。

「本日、御伺ひしたのは餘の儀でもござらぬが、御承知の通り、水府藩士が、頻りに脱藩をいたして、穩かならぬ企てをして居る、といふ評判も御座りますし、亦、長岡に屯集を、いたした者の中に、行方の知れぬものが、四十餘名もある、といふ噂、夫等の者に、不穩の企てある事も、吾等屢々耳にいたして居る。斯様な事を申しては、甚だ不祥ではござるが、以前、水府藩の計畫を、切て打破りしは、何人であるかと申せば、即ちお手前が、致した事であるに依つて、恨みは自然、お手前の一身に、掛る事と思ふ。夫に就ては、既に外國條約の調印も相済み、將軍御繼嗣の一條も、一段落付いた事でござるから、今の中に退身せられて、一身の安泰を計り、且は、皇國に事無き様に計らう、といふのが、上策であらうと、存する」と、暗に大老職を退ぞけ、といふ意味を以て、忠告をするのであつた。

八

然るに、井伊は、苦々しい顔をして、  
「今日の如く亂れたる、天下を捨て、退く、といふ事は、拙者としては、迎も出來ませぬ。御親切の忠告は辱ない

が、今に於て退職する、といふ事は出來ませぬ」と、キツパリ斷つたので、左兵衛督が、

「否、強て職を退きなされ、といふのでござらぬ。左様出來るなれば、と申したまでの事であるが、其れも御用ひがない、とあれば據所ないが、切めては供廻りの者を、更に殖して、充分に警戒いたしたら宜らう、と存するが、之だけは是非、お聞き取りを願ひたい」

「漸々の御親切は辱ないが、すべて命あるものは、必ず死する事に、定まつて居る。若し、お手前の仰せられる如く、夫等の兇徒に依つて、我命を失ふやうな事があれば、夫は、人力を以て、防ぐ事の出來ぬ事にて、供廻りは、其家相當の數もあつて、身分不相應に殖すは、己れの怯懦を、示す事にも相成る。故に舊來の格式を破る如き事は、苟も大老、自から爲す事は出來ませぬ」

話し半に、お城の太鼓が鳴つた。之は既う、登城すべき時の來た報知であるから、  
「今日は、之にて御免を被むる」

と、いつて、井伊は、急に立上らう、とした。その袖を、左兵衛督は、そつと抑へて、

「先づお待ちなされ、然までお急ぎにも及ぶまい。今暫時——」  
「否、最早時でござれば、お放し下さい」

「いや、先づ暫らく」

井伊は、元來が、疝癪の強い人であつたから、パツと右の手で、押へられた袖の先を、拂ひ退けた。左兵衛督は、手を放したが、井伊の袖は、夫が爲めに綻びた、といふ事である。その儘に立去つた、井伊の後影を見送つて、左兵衛督は、井伊家の公用人を、勤めて居る、富田源兵衛といふものを、更に招いて、今までの話しを委しくいたして、大いに將來の事に就て、充分に警戒をするやうに、といふ注意を、加へて立去つた。左兵衛督の親切は、實に感心の

至りである。夫が、安政七年の二月十二日の事であつた。即ち改元して萬延となつた、數日前の事で、翌月の三日が、櫻田門の大變となつたのである。

井伊家の歴史を述べると、餘りに長くなるから、夫等の事は略すが、兎に角、徳川家康が、天下を統一した時、創業第一の功臣としては、井伊直政を推さねばならぬ。家康は、直政の勳功を思ふて、江州佐和山の城主として、十八萬石を授けた。井伊家が、西國三十三ヶ國の旗頭と、銘をうたはれたのは、即ち此時からであつた。

直政の子に、直勝といふ者があつた。雖然、悪疾があつた爲めに、家を繼ぐ事は能なかつた。家康は、夫を憐みて、上野國安中の城主として、別に家を立てさせてやつた。其次男が、有名な直孝である。井伊の本家を繼いで、佐和山から、彦根の城に移り、從四位に叙せられて、左近衛權中將に任ぜられた。徳川家からも、重く用ひられて、大老職になつたのは、此の人である。直弼は、直政から十三代の後、掃部頭直中の子である。直中には、子供が多くあつて、男子が十五人、女子が五人といふ、多數であつた。直弼は、第十四番目に當る。文化十二年十月二十九日、彦根城二の丸で産れて、幼名を鐵之助と、いふたのであるが、其後、鐵三郎と改めた。元來、井伊の家では、相續人の他は、如何子供が産れても、之は他に家を分たり、或は他家へ、養子に出して、甚だしきは家臣に養はしめ、亦然うした手續きの出來ぬ者は、僅かに米三百俵づゝを與へて、極めて儉約の生活を、なさしめて居た。之は直孝の殘して置いた、井伊家の憲法が、然うさせるのであつた。然れば、直弼は、十四番目の子であるから、一人か二人の家來に侍かれて、誠に微の生活をして居た。從つて、自然、人とも近付き易くなつて、夫が世態人情を解する、最も便宜になつた。

十六七歳の時分に、江戸へ移つて、櫻田外の藩邸内に、小さな屋敷を貰つて、其れに住んで居た。其屋敷を、自ら稱けて「埋木舎」と、いつて居た。

世の中をよそにみつゝも埋木の

埋れてをらむ心なき身は

と云ふ、歌を詠んだ。之に基づいて、埋木舎といふ、雅號が起きたのである。歌や俳句を翫んで、心安く日を送る傍、武術にも、相當の修行をつんだのであつた。川西清八郎と、いふ者について、居合柔道などを學んで、之は餘程、深く研究して居た、といふ事である。現に「七五三柔術居合傳授」といふ書物を、編つて居る位である。亦、軍學は、山鹿素行の流を汲んだ、西村大四郎と、いふ者に就て習つたので、文武の二道は、充分に修めて居た。然るに、井伊家の主人たる、掃部頭直亮といふ人は、直弼の爲めには、兄であつたが、不幸にして子になかつた。於是、親族が、會議の上で、直弼を、直亮の願養子にした。乃て、溜の間詰を申し付けられ、更に進んで、從五位左衛門に任ぜられ、其後、階位一級を、すゝめられた、といふやうに、とん／＼拍子に進んで行つた。折柄、嘉永三年になつて、義父の直亮が、終に歿した。於是、直弼は、井伊家の當主になつた。

掩ふべき袖なほせましかにせむ

行くみちしけき民の草はに

と云ふ歌は、其際に詠んだのである。

九

直弼が、未だ相續人とならず、部屋住の時代の、苦勞は一通りてなかつた。其間に於て、文武の修行を勵み、何一つ暗からぬ、といふほどに、立派な武士になつたのであるが、然し、其儘で過ぎ行いたならば、依然、三百俵で、一生を終つたかも知れぬ。然るに、直亮が死んでくれた爲めに、末子でありながら、井伊家の主人になれた、といふ好運の人は、亦別である。之を世間では、何か井伊家に、紛糾でもあつたかの如く解釋して、面白く綴つて、鐵之助相續の真相など、言觸らして居るけれども、夫は全然、虚偽の話で、鐵之助が相續人になつたのは、直亮に、世嗣

がなかつた爲めて、殊に、鐵之助が、凡物でなかつた、といふ事を、重臣共から見抜かれ、親族に於ても、然う思つて居た爲めに、然までの苦情もなく、終に相續人になる事が出来たのである。然うなると、間もなく直亮が死んで、當主になつた。其間の運びといふものは、誠に安らかに、すら／＼と行つて了つた。直嗣相續の事情は、大約斯ういふ次第であつた。

話は、有村の身に移る。

水戸の家臣に、高橋多一郎、金子孫次郎といふものがあつた。此二人は、主として井伊大老襲撃の、企てを爲したのである。夫に相和して、佐野竹之助、齋藤監物、稻田重藏、杉山彌一郎、蓮田市五郎等の人々が同盟して、彌々機会を窺つて、襲撃の事を實行しよう、といふのであつた。然るに、只茲に一つの困難がある。井伊家に於ても、充分に警戒して、行列の供廻りなどは、武術に長けた、武士を多數に従つて、頗る嚴重にして居る様子であるし、尋常の手段を以て、成し遂げる、といふ事は難かしい。殊に、自分等の方の同勢は、僅に十六人か七人であるから、却々容易な事ではない。乃で、高橋と金子が、苦心の末、豫て交際を、厚くして居た、薩藩士有村治左衛門の力を借りよう、といふ事になつて、或日の事、有村を訪ねて、此の秘密を打明けた。

此時分に、有村は、已に千葉の門を出て、麻布の十番に、小さな道場を、構へて居た時である。兩人から、事情を聞いて、有村は、快く之を承知した。夫は、有村も、猶且、井伊大老を倒さなければならぬ、といふ考へを、有つて居たのだから、否應のあるべき筈はない。有村が、快く承知したので、高橋金子の兩人は、大きに喜んで、追々に同志の者に、之を打明けた。人物といひ、腕前といひ、有村の如き者が、加勢してくれる、といふ事に、異論のあるべき譯もなく、一同は、喜んで之を迎へる、といふやうな次第であつた。道に高橋金子の兩人は、人を見るの明があつた。此有村が、加勢をした爲めに、櫻田の快擧は、見事に行はれたのであつた。

併、其決行をなすべき日は、何時に爲すべきか、といふ事は、相談の末に三月三日の登城先を襲ふ、といふ事に

決した。同志にも夫々、手筈を定めて、其前の晩に、品川の鮫洲に川崎屋といふ料理店があつた。之へ集會して悉皆、手筈を定めた。有村の役は、櫻田門に、井伊の行列が、来るのを待受けて、先供の飾槍を、奪つて暴れると、井伊の供廻りは、之へ集まつて来て、脅脇の、幾分か手薄になるに違ひないから、其虚につけて、杉山彌一郎が、小銃を撃込む、夫を合圖に、四方から斬込て行く、といふのであつた。有村の奮闘が、功を奏して、安々と、井伊大老の首を擧げ得る事に、なるのであるが、其當日が、稀に見る大雪であつて、夫が爲めに、討つ方では、何れ程の好都合で、あつたか知れぬ。井伊の方にも、川西忠左衛門を始めとして、腕前の勝れた人は、多數あつたけれども、折柄の雪に、雨道具を着け、刀には、柄袋をはめて、切てが然ういふ調子であつたから、ソレツといふ場合に、思ふやうに行動が能なかつた。夫へ不意にかゝられたのであるから、散々に、敗北を遂げたのも、無理はない。之等の事に就ては、委しい話をすれば、随分長くなるから、之は一切略す事にするが、兎に角、此の井伊大老の襲撃といふ事が、當時の人心に、刺撃を與へた事は、一通りではなかつた。木戸の本傳も、此邊から話をして置かぬと、自然、力が入らないので、其の概略だけを述べて置いたのである。

一〇

櫻田事件の落着に就て、通し難き一つの珍談がある。之は今日のやうな、時世の人が、夢にも見る事の能ない。讀んで見れば、馬鹿々々しい、と思ふやうな事であるが、然し、其の半面には、形式に因はれた幕府時代の情實といふやうな事が、歴々と見えるやうな、事實であるに依つて、一應は、其事を述べて見よう。が、事の順序として、大老の遭難、當日の事から述べよう。

萬延元年三月三日、即ち此日は、上巳節の式日であつて、在府の諸侯は、五ツ半の御城の太鼓を合圖に、皆登城する事になる。大老井伊掃部頭も、邸を出て、今や櫻田門へ、かゝらうとした。此日の大雪は、宛然、綿を千切て投

るやうなのが、ポト／＼降て居て、一寸先は、ブーツとして判明なかつた位である。恰度、行列の供先が、櫻田御門の外に掛つて、大老の駕籠は、松平和泉守の邸の前に、かゝつて来た。折しも、傍の石垣の蔭から現はれたのが、赤合羽に饅頭笠といふ、扮装の武士一人。

「恐れながら、御願ひの者で御座る。恐れ乍ら、お願ひの者でござる」

と叫びつゝ、青竹の先に、何か書面のやうなものを挟んで、それを高く掲げながら、行列の横合より、疾風の如く、雪を蹴立て駆込んで来た。之を見ると、供頭をして居つた日下部三郎右衛門、供目附の澤村源六の兩人が、

「控へろ、願ひの趣きがあらば、願當を以て出なさい。駕訴は相ならぬ」

と言ひ乍ら、駆て来る者を、ドンと一ツ、突うとした刹那に、ヤツと言ふ氣合と共に、双が閃いたか、と思ふと、日下部は、其所へ倒れた。

「汝れ、狼藉ツ」

と、澤村が、柄袋のかゝつたまゝ、刀を抜う、とする所へ、跳りかゝつて又一太刀、其中に供先の方も、一人の武士が駆込んで、飾り槍を奪つて、暴れ廻るから、忽ちにして行列は、亂れ立ち、右往左往に混亂する。彼所からも一人此所からも一人と、いふやうな工合に、十六七人の浪士風のもの、各自赤合羽と、饅頭笠を脱捨て、拔連れ／＼斬てかゝつた。井伊の輿脇には、川西忠左衛門を初め、腕利の者が、揃つて居たけれども、不意を打たれて、力及ばず、片ツ端から斬捲られて、大老の首は、終に佐野竹之助といふ者に、揚げられる事になつた。全身血に染んだ、有村治左衛門は、駆けつけて来た。左右に引提げた刀は、恰て簾の如く、なつて居る。

「オー、佐野氏か」

「有村先生、首尾は斯の通りでござる」

佐野が、突つけた首を見ると、有村は、ニツコリ笑つて、

「首尾よく參つて、お互に恐悦で御座る」

豫ての打合せがあるので、有村は、大老の首を、佐野から受取ると、其儘に足を疾めて引返す。斯うした次第で、井伊は、遂に無慙の横死を、遂げて了つた。

有村は、固より腕前は勝れて居る上に、膽玉も据わつて居るし、此日も十數人を對手に奮闘して、其勢ひは阿修羅王の暴たる如く、實に目覚しいものであつたが、然し、生身の身體であるから、自分も又、數ヶ所の重傷を負ふて普通の者なれば、却々其の傷に堪へない位であつたが、剛毅の治左衛門は、更に屈せずして、辰之口まで、駆て来たが、既う呼吸ぎれがして苦しい。傍の雪を採つて、咽喉を濕ほし、一休みして居る所へ、井伊家の供目附助役をして居た、大河原秀之丞といふ者が、之も重傷を負ふて、其所に倒れて居た。不圖、頭を上げて見る、と、直ぐ前の所に、血だらけになつた、大きな武士が、雪を掬つて、咽喉を濕して居るから、さてこそ兇徒の一人であらう。我主人の仇は、之ぞと思ふて、スーツと立上りながら、治左衛門の肩先へ、スーツと斬付けた。如何に腕が出来て居やうとポンヤリ立て居る背後から、聲を掛けずに斬付けられては、防ぐ事も、出来るものではない。雖然、遣は治左衛門、一太刀浴せられて、アツと言ながら、前に二歩ばかり踰越したが、足を踏めて振返ると、右に持つ太刀で、横に拂つた一文字、隣れ、大河原は、此一太刀の下に、息の根を止められて了つた。傷口を押へて、治左衛門は、其儘に遠藤但馬守の邸前まで、駆けて来たが、目は昏む、出血は、益々甚だしくなつて、既う忍耐が能なくなつて、已む事を得ず、提て来た首を、其所に投出し、左の足で踏付けて、潔く立腹を切つて了つた。其他の人々も、重傷に堪へずして自殺した人もあるし、或は苦痛を忍んで、附近の諸侯の邸へ、自訴した者もあつた。井伊の家臣は、力なく／＼首のない、主人の死骸を、駕に納めて、邸へ引取つた。

然るに若年寄、遠藤但馬守の邸前に、一人の若い武士が、腹を切つて倒れて居た。それを、遠藤の家臣が見付けて其儘に捨てても置けないから、死骸を、取片付けよう、とすると、足の下から、首が出て来た。見れば擬ふ方なき、

大老の首級であるから、其儘に洗ひ淨め、布に包んで、保存して置いた。

一一

話頭一轉、井伊の方では、死骸は持て来たが、首が無いので、之では納まりが付ぬのみならず、武門の恥辱、此上もないのであるから、首の行方を詮索に及ぶと、遠藤の邸に、持込まれた首級が、夫らしいといふ事を聞いたので、三浦清と、横川又太郎の二人が、懸合にやつて来た。豈夫に、主人掃部頭の首を下さい、とも言へないから、家臣の片桐某の首といふ事にして、貰ひ受けやう、とすると、遠藤の家臣が、却々應じない。此押問答が、手間取れて、容易に渡してくれさうもなかつた。井伊が、大老の職權を笠に、我意の舉動があつた、といふ事を、常から傳へ聞いて、快よく思つて居ない連中が、仕た事であつた。散々、揉みぬいた揚句に、藩臣片桐某の首は、慥に受取つた、後日に異論はない而已ならず、保存下された御厚志は有難い」といふ意味の書付けまで取られて、漸く首を貰つた。といふやうな奇談もあつた。

井伊の邸は、上を下への混雑で、老臣共打寄つて、種々協議を凝らしたが、何分にも不意の出来事であつて、如何んとも、善後の處置をつけ難い。殊更、途中に於て、大老ともあらうものが、斯る狼藉に出會ふたのみならず、横死を遂げた、といふ事になつては、無論、家は断絶となつて、井伊家は、茲に滅びるの他はない。畢竟するに、水戸の浪士が、爲した所爲に、極つて居る。どうせ、此の儀に就て井伊家の断絶する以上は、水戸家も、其儘にして置く事は出来ぬ。之より一同、水戸家へ押かけ、どうせ潰れるものなれば、水戸家も、共に、潰してくれやう。如何に、御三家の一であらうとも、將軍お蔭許に於て、私の争鬭を以て、戦ひを開いた、となつたら、水戸の家とて、潰れる他はあるまい。破れかぶれであるから、さうする他はない、といふ事になつて、慥々、井伊の家臣は、小石川の水戸邸へ押寄せる、といふ事になつた。若し此事が、然らなつたならば、甞に水戸と彦根の争ひばかりではなく、攘夷開港、

勤王佐幕の兩派が立別れて、天下は、忽ち争鬭の巷と、なつたであらうが、茲に一人の人物が現はれて、之を未發に防いだ、といふ物語りがある。

若年寄に、安藤對馬守といふ人があつた。此人は、奏者番から寺社奉行になつた時に、其奇才を現はした人で、其時分には奉行にぬけると、直に吹上の、お調の座に列して、公事を聴く事になる。夫は、寺社、町、勘定の三奉行が列座して、老中の一人が、上席に在て、今といふ裁判長の格式で、將軍は、御簾をおろして、其中で、奉行の調べを、見て居るのである。初役の者は、此時に、其の技倆の試験をされるのであつて、之が躓て、後の出世に關係するから、大概は、公事に就ての書類で、難かしいのを下に仕て、其の上へ、段々に易しいのを、積上げて置くのだ。どうせ、將軍が終ひまで、聽いて居るのではないのだから、易しいのを上手に裁断すると、程の宜い所で、將軍が退座せられるから、無事に試験が通過する、といふ事になつて居たのである。然るは、對馬守は、寺社奉行としての初役の調べに、少しも然らぬいふ事に頓着をしないで、書類の積上げ方に依つて、試験を済ませるといふやうな、卑劣な事もせず、従つて、其前日に、今といふ書記といふやうな者にも、手當を與へずに、澄まして居たから、小生意氣な奴である、といふやうな、感じを有たれて、訴訟の中でも、極めて難件と言はれたものを、多く上積に爲れて居た。夫を、列座の中で、片端からドシ／＼裁決を、與へて行つた。其審斷が、殆んど水の流れるが如く、總て即決して了つた位であつた、之れに依つて、對馬の才能は、初めて現はれて、幾程もなく、若年寄に拔擢された。井伊は、道に其の人成を見ぬいて、此の安藤を、老中に拔擢した。恰も櫻田事件の起きた時、千代田城内の騒動は一通りてなく、各老中なども、顔の色を變へて、何んの詮術も、なかつた位である。安藤は、一人平然として、之れしきの事は何でもないから、手前にお任せなさい、といふので、其儘、直に井伊の邸へ、乗込んで来て、老臣に面會をした。『此度は、意外の凶變、然し御主人におかせられても、極めて御輕傷といふ事、折角に御養生あつて然るべし、と存ずる』



意外の挨拶をされたので、井伊の老臣も、少し驚いた。輕傷にも、重傷にも、首と胴が、離れて居るのだ。夫を何う間違へたか、安藤が、斯ういふ挨拶をしたので、實に不思議な事だ、と思つたから、何と答の仕やうもなかつた。對馬守は、尙言葉を繼いで、

「よし、負傷は輕くとも、萬一の用意といふ事もござれば、早速に相續願ひを、出して置かれては、どうであるか。都合に依つては、手前が、お取扱ひいたしても、よろしい」

此一言を聞いて、井伊の老臣は、始めて胸を撫下した。原來、對馬守殿が、當家の斷絶を憂へて、此の臨機の計らひをしてくれるのだな、といふ所へ、漸く氣が付いたから、

「御親切のお言葉を承りまして、有難く存じます。何れ御助力にも預かりたい、と考へますが、何分にも、事が急に起きて、存外、混雜いたして居りまするに依つて、何れ貴邸へ、罷り出る事に、いたしますから、よろしくお願ひ申す」

乃て挨拶がすんで、兎に角、病氣の御見舞もした。斬られた首を、胴へ接續せて、上から夜具をかけたのを、覗き込んで、對馬守が、

「さまでの重傷でもござらぬから、御心配もなからう」

と言ふ、捨臺詞を残して、歸つて行つた。安藤の機智が、遂に井伊の家が、潰れるのを救ふたのである。今日の時世から考へたら、實に莫迦々々しい事だが、舊幕の時代には、能く斯ういふ事があつた。

一一一

櫻田事件があつてから、之を諷刺した俗謡や、狂歌なぞが、盛んに世に行はれた。参考の爲に、其二三を、紹介して置かう。

大雪彌生の千代ぼくれ

やんれく、花の御江戸の霞が關なる、其又隣の櫻田門外、三月節句に花見と雪見の新板ちよぼくれ、世上の皆さん御聞なましよ。小人集り國家を治めりや、災害ならびに至るといふこと、孔子の教へに有てはないかい、彦根の主じが、大老職をば勤て以來、提はまもらず、家中はきまらず、市中はたまらず、成程さうだよ。抑彦根のいはれを申さば、三百石餘の厄介者にて、時々京都で女郎も買たり、子供が有る故、勝手が廻らぬ。やりくりさんだん、高利もかりたり、質はち置たり、夫にて暮しを付たる人故、なか／＼大事な御政事などは、知らない道理だ。娘のしうとの長濱坊主の法談聞たて、他力の本願貰ふを専一、安心決定極めた積りて、一角天狗の高慢者故、井伊家の家督に直ると、猶又、物知り顔にて、溜りの詰衆の大名の中にて、先生氣取の生聞との故、誰れが誓たか、先年流行のころりの病氣で、親玉死ぬとき、大老職とは成つたがおかしい。成るのもよいから、天下の政事に、横しまないよに、旗本御家人、ゑこひきないよに、諸家の家中に、悪くまれないよに、百姓町人そしりのないよに、先祖が御役を勤た通りに、守ればよけれど、嫌ひな人をば、残らずほり投、いかなるあほふのよんしり者でも、御加増させたり、任官させたり、親玉死ぬ時、賄賂を取りたる蘭家の醫師共、御上へ召出し、藥の功能少しもないのに、奥醫者杯とは、似合ぬ事だよ。

神君様でも、代々様でも、畜生同様の夷人の弟子なる藥を差上、生たるためしは是までないぞへ。畢竟是等も魯西亞、墨夷か、英吉す、佛良す、是等の山師の鐵砲玉にて、きん玉つっぱり、蘭家の醫者ども、近頃學て夷人を尊び、御役人をばこわがらせる故、ます／＼へこたれ、夷國の畜生師匠と頼んで、大名旗本、西洋流儀の軍學訓練、見付／＼の備の鐵砲、西洋筒にて飜る杯とは、片腹痛いぞ、日本開闢、御當家様迄、鐵砲なけれど、夷國に負たるためしはないぞへ。

御存んじなければ、教へてやらうと、おつしやる御方は、御邪魔に成るゆゑ、取上げなければ、流石の隠居が、くやし紛れに、京都へ登つて、堂上判して給旨を貰つて、忠義を盡して、勇氣を振つて、夷人を殺して、交易停止て、五穀を殖して、諸人を助けて、國家を治めて、世柄を能して、安樂させんと、計略したれば、彦根の大老びつくり仰天、夫では是から、もふけが出来ない、設けなければ、屋敷がまわらぬ、廻りがわるけりや、妾と酒盛十分出来ない、昨年焼たる御國の御城の普請も出来ない。

大事な場所だと、鯖江を談じて、上京致させ、禁裏をだまして、反逆者だと名付て召捕り、副將軍をば御國へ押込、家來は切腹獄門、死罪に成たる迷惑、御役人にも嫌ひな人を、ボカンとほり投、岡さんなどは、親玉病氣に、紛骨盡して療治をすれ共、蘭家の醫師ども讒言用ひて閉門させたり、立派な人をば切腹させたり、堂上方をば押込させたり、言語同斷あきれた物だよ。

禁裏へ對して向論なる迄、神君様なる息子の御家の、大事な御人を出したり入たり、壹文おもちやの人形同様、佛の顔でも、三度も撫れば、腹の立とは言ではないかへ。其上第一、是までゆるさぬ畜生同然、夷人の奴原御城へ入たて、眼前穢れて焼たじやないかへ。夷人に對して返答出ない腰拔者ゆる、夷人の奴原追々増長、下田の時分は壹分の通用、ドル銀なんぞは、三分に直上る、日本寶の金類交易、是では段々、此世の寶はなくなる計だ。佐渡の金山、日光の御先祖、京都の神様、泣て居る故、春中以來長降するのは涙の雨だぞ。

三月節句は、妾産だる娘の誕生祝の酒盛、十分したさに、上巳登城を早々仕舞つて、飛だりはねたり、妾と存分飲んとしたれば、天の感じる時こそ到来、昨年以來、大雪降たるためしはないのに、此日に限りて、隣も見えない大雪降るのは、大名辻番、言譯助けの天の恵みだ。夫をもさとらず、出掛る大老、天下に敵する者社あらんと、高慢登城の櫻田門外、此節水府の忠義の家來は、逆賊亡す御神の恵と、雲岩へ登つて、日光へ向つて、三拜九拜、雪見の肴に、井いかもたたと、鐵砲打懸け、忽ち首取、刀に突掛け、しづ／＼通るは、前代はない御手柄ものだよ。

ないもの盡し

凡世の中、ないもの盡し多い中にも、今年のない物程はない。上巳の大雪めつたにない、櫻田騒動とほふもない、そこでどうやら御首がない、夫にちつとも追人がない、一人り二人りじや仕方がない、引馬どこへか、うせてない、お駕籠が有ても釣人がない、上杉辻番いくじがない、御番所どこでも留てがない、浪人少しも弱氣がない、脇坂取次出てがない、櫻は咲ても見る人ない、茶屋小や芝居は行人がない、夷人の咄は丸でない、道中飛脚の絶間がない、伯耆の噂さは、うせてない、そこで板倉つゝかない、讃岐の騒ぎは知る人がない、玄村此節呼手がない、薩摩のやじ馬わからない、諸屋敷門々出入がない、夜中はさつぱり通りがない、大名さつぱり出あるかない、町人金持、氣が氣でない、老中増供みつともない、全體役人腰がない、是で世の中治らない、夫でも先づまア軍がない、どふだか私しは請合ない、無い物ないは兎に角に、京都の抜ひもつたない、めつたな事をいふものでない。

ちよぼくれ

やれ／＼、細かにちよぼくれ、おぼくれ、ちよんがれ、抑世上で魂けた騒ぎの禮記來歴を孟子上僧いが、珍事中庸論語同斷、咄しにならねへ、おとし此方、詩經な捌きを聞いてもくんねい、禪學詛りの聞取法問、曹子の所謂汝に出て汝に返るの講釋知らずに、十八史略を震つた積りて、史記評林にも少しも構はず、後漢書連ひの胸算用から、坊主にするやら、隠居にするやら、豆でも煎るよに腹を切るやら、龜山お化て天窓が飛やら、お寺の納豆で打きに成やら、屑やの荷籠で押込まれるやら、父母や妻子は離散をするやら、何やかやらの恨みが積つて、今年の

三月節句の大雪、坐附に振舞ふ海苔すし鐵砲、白刃のきりあへ、刃先の蛤、あさつき鱈に、抜身の料理、ちらばす火花の櫻田あたりは、血で血を洗ひし逃したの定紋、彦根がからんで、内股膏藥、赤い備がお家の流ても、伐倒をされては水ツ戸も内い。取込む手癖が失ない釣臺、目計働く藥罐のゆて蛸、手足も動かぬ彌次郎兵衛、人形白眼は空飛鳥さへ落したお首がないとは井伊見世物だよ。

やれ／＼先祖や掃部の瑕瑾と、些も思はぬ腰拔侍、喧嘩が過ての棒切ざん昧、龍の口から珠でも取る氣で、御開帳なんぞのお迎ひ見るよに、三百人程首請取とは、去りとは／＼、どんちゃんへどもどまご付、序に恥辱の上は塗、知らない者へも、是見て呉ると言ない許の立派な風聴、人の口には戸も建られねへ、内て意張て、ごまめの前歯で、齒齧したとて、どふなる物かよ。

やれ／＼可笑や、お菓子でちよぼくれ、其場の手疵の薄皮、勿論田舎餅から出て来た物迄、有平限りに臆病餅をば、館ころろりと丸めて仕舞て、水戸切團子を、こつちへ黄な粉と、首切山椒之取粉とやらすて、求肥一生、骸を晒しの白玉もどきと、するきて往すは、御隠居なんぞのお齒にはあふまい、よつぼどすわつた腹太餅でも、御眠氣覺しの手見世に出さずば、迎も世上で承知は煎餅、後日の笑ひに粟餅／＼

有物盡し

扱もある／＼、たんと有物盡していふならば、前代未聞の事がある、外櫻田に嫁がある、辰の口には首がある、こわいなながらも見人がある、たまげて逃出す人がある、御駕籠に刀のきづがある、片桐戸田には沙汰がある、杵築の御門は／＼である、屋敷に澤山後家がある、田安毎日登城がある、板倉再勤今にある、今年十四の嫡子がある、晝夜加役の廻りがある、追付は仕置に手當がある、其内家老の者がある、毎日見廻りの使者がある、頭巾や羽織捨てある、まだ／＼徒黨は外にある、半蔵竹橋／＼である、療治でもふけた醫者がある、溜りの登城は度々ある、會津は追

付參府がある、徒黨の在家を尋がある、そこで咄が絶えずある、咄しは半分うそがある、なんでも近々軍がある、あつてある物の中にもない物は、殿の御首と御長屋の窓

大津繪ぶし

おひ／＼隠居どの、その首こちらへ返しくれ、浪人に取て貰ふた用意の似せ首じや、掃部じやござりやせぬ、とふ／＼御先へゆきまじやう、これしにくい隠居めと、ぬき指ならん何の苦もなくゑぐられぬ、命と首とのつりかへる、恩愛別れの二つ玉

たん筒すつぽん  
井伊じや／＼  
井伊のししや

同 雨の夜のもじり

雪の日に櫻田近く登城と出かける道すがら、切込十七人、種が島小筒を打かける、  
わしやなんぼん鐵のくさりじゆばん、黒羽二重出立、大將分は御駕籠へかゝれと差圖する、中にもひげだらけな首をもつて、海を目當て船にて常陸へ急ぎける、  
手分の人數は似せ首をもつて、辰の口さしてぞいさみ行

老松

抑々家のあやふき事、萬國は捨置、四方八方の浪人、先年の恨をなして、意恨の色を見す、春の登城の深雪の時、浪人俄に立かゝり、大老ひとりをねらひしかば、味方これをふせがんと、供の騒ぎとなり、けふ此時、忽大勢と

なり、首をはね身をかため、あのものもと逃はせて、其首を戻さざりしかば、味方大老といふ職を譲りくさし給ひてより、上の騒ぎと申すとかや、かやうに重き役前を、身の成はての弱いをば、君につかへて不忠臣、家の萬劫ふる川の、けがれを上げぬ前聞至極、どうくどつと廓の内、治る井伊どのつたなけれ

大つよぶし

お井伊おやじとの、その駕籠ちよくり留てくりよ、御供の衆びつくり仰天し、イエ、油断をいたします、狼藉のあつまりて用、意の小銃砲、お先へかゝります、やれくにつくい親父めと抜つて、何の苦もなく大どくり、御首とからだの二ツにわかれた辨慶堀

花雷彌生神風

頃は彌生の初つかた、残る寒さと諸共に、積るうらみもけふ晴れて、雪より先へ消ゆる身と、兼て覺悟の拾餘人、生れし月日は替れども、さいごは友にかひてし、言の葉もつめたち、老も若やぐ櫻田に、しばし人目をしのぶみの、笠をかざして松風の、音に聞えし大頭、けふは上巳の祝言と、時刻もやがて辰の刻、天へのぼる勢ひは、六十餘州にとどろきて、廣き日本に一本道具、ためしも外になめし草、二行につづく徒侍ひ、あたりを拂ふ權柄も、運の極る白雪や、ふり出す行列先拂ふ、傍若無人の有様を、悪まぬものこそなかりけれ、所えあやしき侍、一所不定の素浪人、餘義なき願ひとひさまづく、ヤア推參なり素浪人、願があらば夫々の、奉行もあるに尾籠の振舞、下れやとねめつける、ヤア夫しきの事、知らざらんや、知て願ふは餘義なき願ひ、譯も糺さず無法の振舞、ア、いはさせて置けば無禮雜言、そこ退ぬかと突きのくる、ヤア禮儀も是まで武士の意地、覺悟せよと拔はなす、双の光に諸共に、首は前にぞ落にける。

スへ狼藉と抜つて、切てかゝれば飛しさり、みの笠とつてなげ捨れば、下は股立玉階、白あやつかんで鉢巻し、兼て用意の出立に、さてこそ曲ものあますなど、おつとり圍んで切結ぶ。こなたは覺悟の必死の太刀先、前に顯はれ後にかくれ、千變萬化の働に、雪はたちまち紅の、紅葉色増丈夫が、その名は代々に立田川、流しつ受けつ、飛鳥のごとし。

さしも大せいあしらひ兼、皆受太刀にぞ成りにける、一徹短慮の彦根少將、いかなる面色血をそよぎ、ヤアいひ甲斐なき若ものども、たかのしれたる瘦浪人、ひつさげ來れと下知の下、畏たと駕籠廻り、抜つれく取圍む。跡は雜人手廻り六尺、ものゝ心をうばはれし、油断を見すまし左右より、みの笠合羽かなぐり捨、一度にかゝる劍の稲妻、雜人ばらを追はらへば、どつさり落す駕籠の内、柄も通れと突通す、内にはあつとたまぎる聲、南無さんぼふと大勢が、とつて返すを引受て、火花をちらして戦ひける。

透を見合せ、駕籠の戸押明け、井伊甲斐なくも刀を杖、よろおひながら逃出る、ヤア、未練なり彦根少將、勅を背くは朝敵同前、上をなみし、下をかすめ、つみなきものをざんげんし、國家を傾く大悪人、おもひしれと切つくれば、あひなく首は落にけり。夫と見るより大勢が、主人の敵のがすなど、中に取込渡り合ひ、雪に交りて刀の火花、めざましかりける次第なり。

事の騒ぎに打まじり、首をひつさげ一さんに、日比谷の方へ落て行く、跡に残りし拾餘人、覺悟の働必死の切先、さしもの大勢こらへ兼、一度にどつと逃げ散たり、イザ此ひまに御用番へ訴へて、ともかくも上の御裁許に任かせんと、いさみ立たる拾餘人、揃ふて這入る櫻田の、うちやゆかしき玉だれの、光りのどけきはるの日や、頼てもへ出る草々も、忠と孝とつくくし、紫匂ふ源の、徳川深く水すみて、往來賑ふ橋の上、積れる塵を吹き拂ふ、神風清く雲はれて、遠く棚引く霞ヶ關、淺野の義士のふる事も、それにはいかでますかゞみ、くもらぬ君の代に出で、千代萬歳を祝ひけり

萬延元年申年三月

むほんにしきる間や

彦根屋死首次郎

東都本醫仕丁目

作者 近侍上裁得門  
三味線 竹本水名戸太夫  
大男心察橋通  
鶴澤 再一

櫻田の御堀のかたの土手をにらみ、我首と手は終にきれつゝ、  
その場所へ打出て見ればうろたへの、武士がきられて雪が染つゝ、  
君が爲さくら田へ出て首をとる、我が片うてにゆきは降つゝ、  
長からん命もしらず黒髪を、持たれて今朝の首をこそおもへ  
殺さるゝ身をば思はず登城せし、首の別れのおしくてあるかな  
あらざらん此世の中を思ひては、今ひといに逢事もかな  
路ともに哀れとおもえ外櫻、水戸より外にきる人もなし  
雪の原ふる先見ればあわれなる、水戸どのゆへに運の月掃部  
わすられぬ時おもひ出てくやみ出て、殿の命のおしくもあるかな

當世役人意趣

君が爲め春の日にいでて供すれば、我衣手に太刀はふりつゝ

天<sub>てん</sub>地<sub>ち</sub>轉<sub>てん</sub>倒<sub>たう</sub>  
其<sub>その</sub>邊<sub>へん</sub>赤<sub>せき</sub>人<sub>にん</sub>  
奉<sub>ほう</sub>公<sub>こう</sub>眩<sub>けん</sub>暈<sub>うん</sub>  
大<sub>たい</sub>變<sub>へん</sub>門<sub>もん</sub>院<sub>いん</sub>堀<sub>ぼり</sub>端<sub>たん</sub>  
意<sub>い</sub>和<sub>わ</sub>泉<sub>せん</sub>行<sub>ぎやう</sub>部<sub>ぶ</sub>恨<sub>こん</sub>  
大<sub>たい</sub>騷<sub>そう</sub>動<sub>どう</sub>仰<sub>やう</sub>山<sub>さん</sub>  
雪<sub>ゆき</sub>邊<sub>へん</sub>赤<sub>せき</sub>人<sub>にん</sub>恨<sub>こん</sub>  
遺<sub>い</sub>恨<sub>こん</sub>

供すれば實に供こそかなしけれ、我身獨の供にはあらねど  
神の威のたへねばいかに此上は、忍ぶる水戸のつのもぞする  
哀れともいふべき人は多からて、水戸につく世に成りぬべきかな  
なげきつゝ奥では物を思はする、かこち顔なる皆涙かな  
町中は常にも掃部ななぎさこぐ、朱の荷船のなくてかなしも  
此度は鐘も取あへずまぬけ山、申譯なき上のまに／＼  
春の日の夢許なる櫻田に、甲斐なく死なん身こそおしけれ  
しら雪に風の吹しく駕籠の戸に、つらぬき留ぬ太刀ぞ見へけり  
櫻ちる嵐の朝の雲ならて逃行物は我身なりけり

川柳

桃の日や櫻の雪が赤くふる  
橋が桃の節句に赤くなり  
上使には薬師寺やれと井伊御沙汰  
水戸もないやつめと駕籠の中で井伊  
雪の朝隠居仕事にかもをとり  
井伊はしら折れて普請が差支  
井伊掃部と雪の寒さに首をしめ  
赤鬼も今は佛となりけり

同<sub>どう</sub>衆<sub>しゆ</sub>同<sub>どう</sub>奥<sub>おく</sub>市<sub>いち</sub>馬<sub>ば</sub>打<sub>うち</sub>乗<sub>のり</sub>辻<sub>つじ</sub>  
女<sub>にょ</sub>場<sub>ば</sub>番<sub>ばん</sub>  
中<sub>ちゆう</sub>中<sub>ちゆう</sub>先<sub>せん</sub>死<sub>し</sub>物<sub>ぶつ</sub>人<sub>にん</sub>評<sub>ひやう</sub>

井伊掃部を網で取らずに駕籠でとり  
 四天王一天王は胴ばかり  
 浪人の馳走は雪にしめた掃部  
 神風はまづ櫻田より吹はじめ  
 井伊きみと御隠居かけて舌を出し

狂歌

しまつたり當主がゑらいめにあふみ、孫彦根迄恥のかきあげ  
 井伊はなのさく櫻田と思ひしに、上巳の雪にしほむはかなさ  
 春秋をひとめに見せる御代なれや、外櫻田に紅葉散けり  
 一も人も三んな四くみし五たい老、六さん七八に九びは十られる  
 三月は桃の節句に雪がふり、隠居仕事に掃部の御料理  
 幾とせも名家とかもん榮えしも、首と成ては井伊かひもなし  
 掃部雑糞身と胴からは切り割られ、すましの種にならぬ青首  
 櫻田に胴とくびとの雪血がひ、井伊馬鹿ものと人はいふなり  
 水戸もないやうにした故井伊きみと、人の噂に龍の口かな  
 千早ぶる神の御罰はしらねども、雪紅に首とらるとは  
 井伊かげんにすればいいのに役人を、おし込過て今は井伊氣味  
 九條どの御目がさめたか井伊きみだ、ちん／＼掃部の首がないぞよ

井伊事と油断したのがあやまりか、あとのしまつは水戸もなからふ  
 もろともにあはれとおもへ櫻田は、水戸より外にきる人もなし

少壯時代

一

長州萩の城下、江戸屋横町に、和田昌景といふ醫者があつた。以前は町醫であつたが、後には、御殿勤めを、爲るやうになつた。極めて飄逸洒脫の性質で、餘り小さい事に、こせ／＼仕ない人であつた。

今日と、其時代とは、醫者の風も、餘程異つて居て、其時代には、醫者は、一種の幫間の如く、世の中からも見られて、亦自らも、左様思つて居た位で、戀の周旋や、結婚の周旋でもして、若干の御祝儀に有付くのや、役得のやうに思つて居たものだ。従つて、世間から、蔑まれて、居たことは、非常であつた。雖然、元來が、書物を讀まなければ、出来ない商賣である所から、然ういふ風に、一般の醫者が、墮落して居ても、時としては、非常に偉い人物が、其中から出て来る事もある。現に其の道の達人としては、緒方洪庵の如き、慷慨なる國士としては、高野長英の如き、萬人に秀でた人物も少くなかつたが、概して、醫者といふ醫者は、賤い者としてあつた。

此の和田といふ人は、傑出て偉いと、いふ程でもないが、然し、非常に氣位の高かつた人で、却々、權門に降つて自身を利さう、といふ卑しい考へは、少しも有つて居なかつた。醫術も、さまで下手ではなかつたが、今言ふやうな氣風の人であるから、大して流行といふ程でもなく、夫に、妻に運の悪い人で、始め迎へた妻が、二人の女の子を遺して、死んで了つた。後妻を迎へて、一人の男の子が生た。夫を小五郎と名づけた。後の木戸孝允である。天保四年

六月二十六日に生れたのであるが、其時は、和田が、最も窮して居た時で、幸ひに親友の中で、青木周弼といふ人があつて、能く和田の世話をしたから、之に依つて、幾分の凌ぎは、付いて居たのである。

周弼は、後の外務大臣青木周藏の父である。

能く一口に、浮世の義理といふ事を、人が言ふけれども、夫は偉い人でも、又た凡物でも、苟くも人間として、此世に立つ以上、其浮世の義理なるものには、苦しめられる事があるものだ。和田が、人知れず心を苦しめたのは、先妻の女子二人と、後妻の腹に生た、小五郎との關係に就いてで、流石に、飄逸洒脫な和田も、常に胸を痛めて居た。

或日、例の青木が、ぶらりと遊びに來た。折柄、妻は、實家へ、行つての留守で、互ひに氣の合ふて居る、同士の事だから、何の心隔もなく、始より打解けて、種々の話から、ツイ家庭の事にまで、話は移つて來た。

『時に、青木、俺が、心を痛めて居る事があるのだが、一人の分別にも行きかねるから、汝に相談をするゆゑ、少しも遠慮のない答を、仕て貰ひ度い。』

『それりや、何んな事だ』

『他にもないが、忤小五郎の一條だ』

『うむ、那の忤は、仕立ように依ると、大した人物になるぞ』

『いや、夫に就て、俺も、然う考へては居るが、何しろ、那して先妻の子も、二人あるし、親類や世間が蒼蠅から、小五郎丈には別家させよう、といふ考へもあるし、御互に、斯うして醫者のやうな事をやつて、居た所で仕様がなからな。切めて那れだけは、武士の端に加へて、出来る事なら、天下の事にも與らせて見たい、と思ふが、夫には、斯うして家に置いては、何うにもなるまい。然ればとて、何うして宜いか、といふ、分別も仕かない。乃て、汝が來たのは幸ひだから、今日は、打明けて相談するのだが、良い考へはないかな』

沁々と、語るを聽いて、青木は、

「實は、俺も、夫を思つて居たのだが、親子の事丈けに、口出しを仕ても思ふて、捨て置いたが、汝の妻さへ苦情がなかつたら何うだ、然るべき家を見立て、養子にやることにしたら、宜からう」

「ソリや面白いが、養子といふても、却々貰人もなからう」

「さア、其事だが、今俄にどう、といつて考へもないが、心掛けたら無い事もなからう、夫に就て、何か望みでもあるかい」

「なアに、別に望みはないが、假令貧苦に暮しても、家柄だけは、選んで貰はないと、那れが人と成つた後に、出世の妨げになるからな」

「よろしい、然ういふ理由なら、俺が、之から心掛けて置いてやらう」

「何卒、何分願む」

と、其日の話しは、之れて打切として青木は、歸つて了つた。

之れが原因になつて、幾程もなく藩中の名家で、桂といふ家、知行は二百石ばかりであるが、元就侯以来の家臣で所謂、御譜代の家來であるから、其時分の習慣から言へば、相當の武家である。之へ養子に、やる事になつた。小五郎の母も、却々剛巧な夫人であつたから、夫の昌景が、先妻の子供との間を氣支うばかりでなく、小五郎の行末を思ひ、出世を心掛けての事であるから、夫や之やを思ひ合して見れば、自分に於ても、少しの不服がない而已ならず、實は喜んで、之れに同意したのであつた。

一一

昔から、英雄とか豪傑とかいはれる人が、子供の時代には、必ず腕白の悪戯者に、定つて居るやうだが、之は必ず然うでなければならぬ。詰り子供の元氣は、健康に伴ふもので、身體が健康なら、何うしても暴れるといふのは、當

然な理由だ。子供の時分から、物事を、洗み勝に考へたり、行儀正しく、剛巧氣に見えるのは、何うしても、中年に病氣を出して、両親に心配をかけるに、定つて居る。何でも、子供の時分には暴れて、親を手古摺らせる位が宜い。併し、質の悪い悪戯は困るが、只腕白といふ事は、誠に結構な事だ、と思ふ。太閤記を讀んでみても、秀吉の生立なるといふものは、實に振つたもので、奉公先の小兒を、井戸側へ結付けて、自分は勝手に遊んで居るなどといふ、キビ／＼した悪戯の所に、面白味がある。小五郎の小兒時代も、又夫と同じやうに、實に激しい悪戯であつたが、貧乏はして居ても、武家の養子であるしするから、秀吉の生立のやうに、人の家の雇ひ小僧になる、といふやうな事は無かつたから、同じ悪戯でも、悪戯の風が、全然、異つて居た。夫に、養子先の両親も、誠に良い人であつたが、不幸にして、夭折をしてしつた。實家の父母は健康だが、養家の父母を、喪ふて見れば、矢張孤兒である。さア然うなれば、親類相談の上で、誰彼が世話する、といふよりは、寧ろその事、和田の實家へ、任した方が宜い、といふ事になつて、和田夫婦は、殆ど往家の後見と、いふ事になつて、小五郎は、猶且、實父母の手に依つて育てられる、といふ様になつたのは、實に幸福な事であつた。

漸々、年月が経つて、既う十三四の時分には、讀書の達者な事は、同じに机をならべて居る、小兒の中にも、師匠の眼に付く位であつて、劍術なども、相當な力を有つて居る。大人を打込む位に、上達をする。何に付けても、大人らしく、少しも子供のやうな所がなかつたから、藩士の間にも、話題の上るやうになつたが、只一ツ、何うにも手の付けやうのないのは、悪戯をする事であつて、夫が普通の子供のやうに、自分が一人、楽しんで騒ぐ、といふのではなく、堂々たる大人に悪戯をして、背後から手を拍つて笑ふ、といふやうな、やりかたをするから、度々、其の尻を持つ込まれる事があつて、両親の迷惑は、一方でなかつた。母は道に女氣の、之を氣病みにして、明暮に叱言をいふ、雖然、父の方は、却つて夫を、喜ぶ風があつた。

萩の城下を、帯の如く繞つて、流れて居る、阿武川の水游が、夏になると、藩士の子供に依つて、盛に始められる。



小五郎も、夫が待兼ねる位で、一日水の中で暮すから、宛然、河童の子のやうに、水練は達者になつた。元々悪戯な小僧だから、只泳いで居ては面白くない。泳ぐ中にも、悪戯を考へて、仲間の子供を苛めたり、まだ碌に泳ぎの出来な大人を苦めて見たりして、手を打つて笑つて居る。小面が憎い、と思ふけれども、何分にも、泳ぎが達者で、毎も押へやう、とすると、逃げられて了ふ。モウ今は、小五郎の對手になる者は、ないやうになつて了つた。此の阿武川を往來する船の下へ、潜つて行つて、船頭の油斷を見澄まして、櫂を取つたり、櫂を押し流したりして、船頭が、騒ぐのを見て、手を拍つて、嘸し立る。果は、その悪戯が嵩じて、船端へ手をかけて、之を引繰返す、といふやうな事も時折はやつた。度重なるに従つて、船を引繰返す事が、大層上手になつて、夫に苦しめられる、船頭が、却々多い。船頭の仲間が、三人寄れば、此の噂ばかりであつたが、何にしても、桂の養子といふので、幾分の遠慮はあるが、さうさう遠慮ばかりしても居られない。或日、例の如く、小五郎が、水底を潜つて行つて、丁度、通り掛つた船を、引繰返さうといふ意で、船端へ手をかけて、グツト身體を、乗出した送端に、かねて斯うよと、待受けて居た、船頭が、返さうといふ意で、ウンといふ程、頭を叩いた。流石の小五郎も、あつといつて、船端に、かけて居た手を放して手に持つ、櫂を以て、ウンといふ程、頭を叩いた。流石の小五郎も、あつといつて、船端に、かけて居た手を放して川の中へ潜つた。之には、見て居た連中も、聊か驚いた。小五郎の悪戯も甚いが、櫂を以て、頭を打つといふのは、餘りの事と、思つて居る中に、川下の方へ、ヌツクリ浮上つた、小五郎は、額を押へて、河岸へ這上つて來た。見れば、額が打裂て、血は、滾々と流れて居る。普通の子供なら、泣くとか叫ぶとかするのだが、傷口を押へて、ニヤニヤ笑つて居る。其の強情で、忍耐の強いには、誰とても驚かぬものはなかつた。後年になつて、内閣顧問といふ、榮職に上つた當時も、額から眉毛にかけて、三日月形の疵の痕、人相に幾分の險惡を加へた、といふのは、此の疵の爲であつた。

阿武川で、傷を付けられて、歸つて來た、其晩だけは、毎例に變つて、父の昌景が、大層立腹して、小五郎を戒めた。武士に取つて、一番に大切な、面部へ、傷を付けられても、對手が、下素下郎の船頭であつて見れば、縣合ふ事もならず、只傷を付けられた、といふ丈で、忍耐をする外はないが、之といふのも、つまりは、汝が、餘りに悪戯であるから、然ういふ事になるのだ。斯うした疵を、額に残された、といふのは、汝の出世の妨げになるかも知れない」といふて、大層難かしい、叱言が出た。平生は、母の方が、叱言をいふても、父が、宥めるやうにして居たのが、今日に限つては、父が叱言を、いふのであるから、夫には、道の小五郎も閉口して、それから、幾何か悪戯も、控目になつて來た。其内に、母親が、風邪の心地で、枕に就いたのが、どツと重くなつた。醫者はお手前物なり、藥に不自由はなし、平生の悪戯に似合ず、小五郎が、能く忠實しく、看護も仕たが、遂に其の效もなく、一日と、重くなつて來て、今は、且夕をも、圓る事の出來ぬほどに、重態となつた。

其の臨終の際に、小五郎を、枕許近く呼んで、其の手を握り、母が、染々と、意見を加へて、之から先の心得なぞを話して、後の出世を望んだ。其二言には、強情の小五郎も、只涙にくれて居るばかりであつた。夫からの小五郎は、眞實生れ變つたやうになり、文武二道を勵んで、藩の青年中でも、殊に一際、目立やうになつて來た。併し、其時代の事であるから、何うしても、武術の方が、先に立つて、文事は幾らか、疎をかにされる傾きがあつて、小五郎も、内藤作兵衛の門に入つて、劍術の修行を勵んだので、實に其上達は、内藤先生も、驚く位であつた。

毛利の藩校として、世に聞えたのが、明倫館である。之は詰り、藩立の學校で、規則立つて、教授をする代りに、此學校から出た人で、傑出て偉い、といふやうなものは、割合に少かつた。雖然、其の後に出來た、吉田松陰の松下塾から、變則の教授ではあつたが、却つて偉い物が輩出した、といふのは、頗る面白い對照である、と思ふ。小五郎は、立派な藩士であるから、明倫館へ、入る資格もあつて、終日、此の學校に、時を送るのが常であつた。今日も、明倫館の道場へ出て、同じやうな青年が打寄り、盛んに劍術を、勵んで居た。

「頼む、頼まう」

折柄、内藤先生は、江戸へ出て居つて、其の代範を仕て居る。藩士の一人が、萬事に配采を、振つて居たのだ。

「玄關に取次があるやうだ。誰か、早く出て見なさい」

青年の一人が、ハツと答へて、玄關へ出た。見れば、身の丈、抜群にすぐれ、筋骨逞しい、年はまだ若いやうであるが、物々しい扮装の、武者修行であつた。

「何誰で御座りますか」

「拙者は、江戸より参りたる、劍術修行者で御座るが、當國第一の道場は、御當所と承はつて罷越しました。願はくは他流試合として、一本御指南に、預り度い」

「暫時お待ち下さい」

取次は、入つて来て、斯様々と告げる。之れを聴くと、各々一人立ち、二人立ちして、玄關の次の間へ来て、透見をし乍ら、少し不安を感じたが、それでも負惜みは強い。

「さア、何うしたものだらう。江戸から遙々と、諸國を修行して歩く者で、殊に、此の明倫館の道場へ、一人て押掛けて来る、といふのは、尋常大體の技倆ではなからうが、さればとて、氏も素性も判らぬ。旅武士を歓迎する、といふのも、小癪に障る」

と、妙な所に、瘦我慢を、張つて居る。代範は、僅かばかりの金を、紙に包んで、

「之れを以て、然るべく追拂つたら、よからう」

又取次が出て来た。

「お待遠で御座つた。當道場の主人内藤先生が、江戸出府中てござるに依つて、試合の儀は、お断り申します」

「先生が御不在とあれば、御代範の方でも差支へござりませぬ。御門人衆の中にも、相當の腕前の方もあらう、と存ずる。試合の儀を願ひたい」

「御道理で御座るが、先生が御不在とあつては、夫も叶ひませぬ。甚だ失禮では御座るが、之は眞の草鞋錢で御座る」

と、いつて、例の金包を出した。修行者は、之を見ると、顔の色を變へて、

「之は怪しからぬ。拙者は、物乞では御座らぬぞ。武術修行の爲めに、諸國を遍歴して歩く武士、中國探題として、

天下に名を成したる、毛利家の事ゆゑ、其の藩士を養うべき、明倫館の道場には、人らしき人もござらう、と思ふて態とお訪ねをいたした。然るに、試合を断り、金を持つて参れとは、甚だ以て怪しからぬ、左様な物は望みでござらぬ。毛利三十六萬石の基礎ともなるべき、此明倫館に、拙者と試合し得るものがないとは、残念千萬で御座る」

と、捨言葉を残して、忽ち出て行つた、後影を見送つて、

「甚い太平樂を吐く奴だ」

と、口叱言を言ひながら、執次は、此事を、代範に告げて、捨言葉が怪しからぬから、何とかしなければなるまい、といつて、相談をすると、代範は、苦笑ひをして、

「捨て置かつしやい」

といつた儘、更に取合ふ様子もなく、稽古は激しくなつて来て、打合ふ竹刀の音と、氣合の聲で、騒がしい位であつた。

「頼む、頼む、頼む」

又、やつて来た。

『ドーレ』  
出て見ると、今度は、先の修行者よりも、一層骨格の良い、如何にも逞しい人物で、頻りに試合をしたい、といふて頑張る。執次は、代範に向つて、

『何うしたものでせうか』

先に草鞋錢を出して、悪體を吐かれて、幾分か小癩に障つて居たから、今度は引張り込んで、ウンといふほど、打のめしてくれよう、といふ考へになつた。

『道場へ通さつしやい。お望みに依つて對手をするから、といふて、案内したら宜らう』

『ハツ』

執次は、すぐ玄關へ出て、道場の風雲は、少し険しくなつて来た。

四

幕末の頃には、武道も衰へて来たが、其れでも未だ、全く廢つた、といふ程では、なかつた。孰れの藩へ、行つて見ても、道場は、相應に榮えて居たもので、修行者が、入替り、立替り、他流試合と稱して、道場荒しにも、やつてきた。武術に長じて居るとか、居らぬといふのは、他流試合に、掛つて見なければ、本當に判るものではなく、毎度も同じ顔を見ながら、試合をして居たのでは、技倆の上る筈はない。流儀の異つた、顔も知らぬ者と、立合から、互ひの修行になるのだ。修行者としては、多數の道場を荒して、多くの人を打込んで、それが、修行帳に記載されるといふ事が、非常な譽でもあり、且は眞の修行にも、なつたのである。道場を荒しに来る、修行者なるものが、必ず強い人とは限り限らないが、然し、他の道場へ来て、試合を求めものに、腕前の鈍かなものではなく、相當心得がなければ、来るものではないから、之を迎へて、勝負の求めに應ずる道場の主人は、可成り苦心をしたものだ。

今、明倫館へ、乗込んで来た、修行者といふのは、筑後久留米の浪人で、宮部藤十郎といふものであるが、九州各地を遍歴して、之から中國筋を、京阪の地へ渡らう、といふのだ。先第一は、此明倫館の道場を踏破つたならば、中國筋に、恐れるものはない、といふ見込を以て、訪ねて来たのである。彌々、道場へ現れて、代範と稱する人と、挨拶も一通り済んで、夫から支度をして、試合にかゝつた。何様偉い人が、訪ねて来て、最初から代範、或は道場の主人が、自から手を下すものではない。先門人の中で、他流試合に馴れて居る、二三の者を向はして見て、大概、對手の技倆のほどを計つてから、道場の主人なり、代範なりが試合をするといふのが、一般の習慣になつ居るのだ。然るに、四五人の者が、入替り、立替り、對手になつて見ると、夫を一々扱らうて、藤十郎が、苦もなく打負す様子が、普通の腕前ではない。餘程、修行の積んで居る、立派な腕前だ、といふ事は、誰にも判つて来た。殊に、桂小五郎は、宮部の試合ぶりを見て居て、心の中に驚いた。

『之は一大事だ。代範とは、よほど歩が異ふ。折も折、時も時として、内藤先生の御不在は、如何にも残念な譯である、といふて、試合を始めて、今更になつて、辭柄を構へて、逃る譯にも往くまい、さればとて、代範に勝つべき見込なく、萬一、敗を取るやうな事があれば、明倫館の名折れになるが、困つた事が出来た』

と、獨心を苦しめて居たが、不圖、思ひ付いたのは、宮部の来る前に、訪ねて来た、例の修行者、姓名も尋ねず失禮な、仕向をして、追返して了ふたが、次の間から隙見をしたのに、どうも、尋常一様の修業者とは違ふやうな所がある。殊に、江戸表から、出て来た修行者であれば、必ず相當の身分の人に違ひない。切めて、那の人でも頼んで此の宮部と試合をさせて、それでも可かぬ時には、又其考へをしようと、心密かに決して、人知れず、窃と立上つて小五郎は、道場の裏門から飛出した。

さて、出るには出たが、何所を訪ねる、といふ目的もない。那所で聞き、此所で探ねて、漸々探ねながら、やつて来ると、城下外れの、粕末な宿屋に泊つた、といふ事が判つたので、早速に、其の宿へ訪ねて来た。宿の取次に、來

意を告げて、其の修行者に、面會を求めると、直ぐに此方へ、といふて、座敷へ通された。狭苦しい、汚い座敷の内  
に膝を正しく、控へて居た、例の修行者は、桂を見ると、ニコ／＼しながら、  
「何御用あつて、お訪ねになつたか」

桂は、兩手を仕いて、

「私は、明倫館に、修行中の青年、桂小五郎と申します。先生には、初めて御意を得ますが、最前は、道場の青  
年共が、誠に御無禮を働きました、定めて先生には、御立腹の事と考へますが、血氣壯にして、思慮分別の浅い、  
我々の致しました事ゆゑ、何卒お許しを願ひたい。就まは誠に失禮にござりまするが、先生の御姓名は、何と仰  
せられまするか」

年齒は、まだ十五か六位に、しか見えないが、如何にも、其の態度、言語に沈着があつて、普通の青年ではない、  
と見たので、例の修行者も、言葉正しく、

「之は御叮嚀なる、御挨拶で痛み入る。拙者は、齋藤新太郎と申して、江戸表は、九段坂上に住居をいたすものでご  
ざる」

小五郎は、暫らく首を傾けて考へて居たが、

「九段坂上に、お住居遊ばして、齋藤先生と仰しやるからは、彌九郎大先生の御一門では、ござりませぬか」

「應、夫を何うして、御承知か」

「原來、彌九郎先生御縁者のお方に、ござりまするか」

「うむ、彌九郎伴新太郎で御座るよ」

「えッ、彌九郎先生御令息と、仰せられまするか」

「左様」

五

齋藤、千葉、桃井は、江戸に於ての三傑であるが、假令、武門に人と爲つたにもせよ、長州萩の城下に居る、斯様  
な青年までが、只齋藤といふ事を聴いて、直ぐに彌九郎の縁者ではないか、と言ふ考へを有つ、此青年は慥に普通の  
者でない、と、新太郎も、快よく感じた。

「お見受け申せば、未だお若いやうぢやが、彌九郎を、御承知で御座るか」

「ハイ、彌九郎先生の御雷名は、六十餘州の果までも、響いて居りますが、吾等とても、甚だ不肖では御座りまする  
が、武門に人と爲つたる以上、彌九郎先生のお名前は、豫て承知をいたして居ります。其の令息たる、貴所に對  
して、最前の御無禮は、何ともお詫の致しやうも御座りませぬが、御卒御容赦を願ひたい」

新太郎は笑ひながら、

「否、然ういふ事には、よく出會ふて居るから、存外に、馴れて居るよ、ハツハツ、、、」

恚う言はれると、猶更痛み入つて、小五郎は、顔を蔽めて、下を向いた。新太郎は、膝を進めて、

「而て、御用は、何事で御座るな」

「ちと折入つて、お願ひいたしたい事が御座りまするが、是非お聞き届けを願ひます」

「そりや、如何なる事でござるか」

「實は、明倫館道場の主人たる、内藤作兵衛先生は、只今、江戸表へ、出府中で御座りまして、跡には、内藤先生  
に代つて、道場の取締りをすべき、然るべき門人もなく、謂は寄合身上に如しき、道場の事で御座りますゆゑ、最  
前の如き、失禮も致しました次第、然るに、只今、久留米の浪士、宮部某なる者が参りまして、試合の眞最中に  
御座ります」

新太郎は、思はず前へ、乗出した。  
『うむ、久留米の宮部……いや、何れ程の腕前か知らぬが、名前は、満更聽かぬでもない。して勝負の模様は、何とてあるか』

桂は、顔を赧めて、

『何とも、お羞かしい次第では御座りますが、今も、四五人の者が立合ひましたなれど、迎も及びも付かず、片端から打込まれました。私は、其の傍から、試合の様子を見て居りまするに、却々、宮部といふ方の技倆、一通りならず、すぐれて居りまして、代範が打向ひますれば敗を取るに定つて居ります。左様相成ります時は、毛利藩の名折れ、明倫館に、璣の付く事にも相成りますが、我等の力には及びませぬゆゑ、先生の御跡を慕ふて、お訪ねをいたした次第で御座ります。苦心のほどを御推察下されて、明倫館まで、お立歸り下され。宮部氏と、お立合下さる譯には、参りますまいか』

齋藤は、暫時、考へて居たが、

『夫は、御相談の上で、おいてになつたのか、夫とも、お手前一存にての事か』

『誰にも、相談は仕りませぬ、私の一存にて、罷り出ました』

『はア、お手前が一存で、然し、明倫館の門生ならぬ拙者が、之より立歸つて、宮部とやらいふ人と立合ふには、何と名乗るべきか、夫等の邊に就て、お考へもあるか』

『はい、飽までも、毛利藩士として、お立合を願ひたい』

『毛利の家來になつて立合へ、といはれるのか』

『左様』

青年に似合はぬ、大膽な事を言ふものだ、と思ふて、齋藤は、睨と、小五郎の顔を、見詰て居たが、膝を打つて、

『よし、承知いたしました。只今の一言、如何にも面白い。明倫館の門生として、其の宮部なるものと立合をいたさう。さあ、時が後れては大事ぢや。御案内下さい、早速に罷り出る』  
快く承知して立上つた齋藤新太郎、桂も、自分の頼みが容れられたのであるから、何程の喜びか知れない。相携へて、明倫館へ、歸つて来た。

新太郎は、二代目彌九郎となる人で、有業は、父彌九郎の仕込だけあつて、年こそ若い、評判の腕利であつた。父の允許を得て、諸國を遍歴して、既に一年餘り、日本の半は、廻つて来たが、未だ曾て見苦しき、敗を取つた事がない、といふほどの達人であつた。桂に頼まれて、宮部と試合をするに就ても、宮部は、相當に聞えた劍客であるが、然し、新太郎の胸中では、充分に勝算を、有つて居たのである。道場では、今七八人の者が打込まれて、愈々代範に、なつて居る人が、立合はなければならぬ、といふ破目になつた。假令、腕は左まで、なくとも、代範にでもならう、といふだけあつて、今までの試合の、模様から見て、迎も、宮部には及ばぬ、といふ考へはあるが、今更逃げる譯にも往かず、濫い顔をしながら、支度に取り掛らう、とする處へ、小五郎が、見馴れぬ修行者を連れて、裏門から入つて来た。席に連なる一同は、不思議な顔をして、只其の様子を見て居ると、小五郎は、代範の前へ来て、膝をひそめて、何か囁く様子である。

六

深い仔細は判らないが、亦聞くの暇もないが、道場破りの宮部藤十郎と、試合をさせる爲めに、此の修行者を、連れて来たのだ、といふ私語には、代範も、一方ならず喜んで、  
『彼の宮部といふのは、却々の腕前だが、お手前が、伴れて来た。修行者は、充分勝つべき見込があるのか』  
『貴下は、夫だ御承知はなからうが、最前、草鞋錢を出してお断りをしようとした、修行者は那れでござるよ』

「えッ、原來、最前の修行者といふのは」  
「左様、那のお方で御座ります」

「夫が何ういふ譯で、歸つて来たか」

「漸々と、事情をお話し申して、彼の人の義侠に惚たへ、漸う説き付けて、お連れ申した」

「夫は宜いが、無論、道場の人として、立合はせるのぢやらうな」

「夫は、無論の事です」

「併し、氏も素性も判らぬ、修行者を、左様な取扱ひを仕て、後日の災禍に、なりはすまいか」

代範は、如何にも心配だ、といふ様子で、斯う訊ねた。桂は手を振つて、

「いや、決して其御心配には及びませぬ。那のお方こそ、江方で有名な、齋藤彌九郎先生の令息、新太郎と仰せられる、お方でござる」

「えッ、音に聞く、彌九郎先生の令息、何うして、夫を知つて居つたのか」

「私も、更に知りませぬが、此事に就て、御相談に罷り出て、名乗り合ふて見て、始て判つたのでござる」

「其れは、宜い人に出會ふた。疎勿のないやうにして、兎に角、立合を願ふ事に、いたしたら宜らう」

茲に於て、彌九郎先生は、明倫館の門生に化て、支度を整へ、道場の中央へ進み出る。宮部藤十郎も、了得に聞えた劍客だけあつて、徐に進み出る。新太郎の様子を見て、はッア、こりや容易ならぬ奴だ。今まで對手にした、有象無象とは、大分異ふと思つて、猶ほ其舉動を見て居ると、新太郎は、叮嚀に會釋して、

「甚だ不束な者に御座ります。未だ修行中の若者、然るべく一本の、御指南を願ひます」  
藤十郎も、恭しく禮を仕て、

「御挨拶で歸み入る。手前こそ、未だ修行中の身の上、お手柔かに……」

と、互ひに挨拶が終り、竹刀に手をかけて、凜乎と見合つた。詰居る人々は、皆拳を握り、固唾を呑んで、二人の様子を見て居る。聽て、呼吸が合たものか、ヤツといふ聲と共に、左右へ別れた。互ひに青眼に構へて、鋭ッ、ヤツ、といふ氣合を入れながら、ジリ／＼と詰めよる。實に其間の立派な事、觀て居る者が、息を吐くの間もない。

劍術ばかりではなく、將棋にしても、碁にしても、切て勝負を争ふものは、多く然うであるが、上手になるほど、争ひがをつとりして、上品なものだ、何でも恚ういふ物は、ヘボの中が、一番喧がしくて、觀る目には面白いものである。一勝負に十日も、廿日も費る、といふやうな、碁などは、然るべき者が見なければ、面白くない、誰が見ても面白いの、井分間に十番も、落着が付いたといふやうな、碁碁に限る。將棋にしても、然うだ。劍術でも、打つたか、打たれたか、本人にも判らず、息の續く限り、手足の動く限り、愚痴が、薪を割るやうに争ふ、夫が見て居る眼には、面白く見えるのだ。既う齋藤や、宮部位ゐの腕前になると、ポンポン打合はないから、誠に見て居ても淋しいが、然し多少、技の出来るものが、見て居れば、此方が却つて興味は深いのである。二人は、互ひに氣合を入れて、ジリ、ジリ、と、詰寄つて居たが、如何なる隙があつたか、鋭ッと聲をかけて、宮部が、打込んで来た。咄嗟と思ふ刹那、齋藤の身體は、飛鳥の如く、入變つたかと思ふと、藤十郎の籠手へ一本、見事に入つた。

「參つた」

齋藤は、徐に身を退いて、

「過失の功名、お怪我負て御座りませう」

右の小手を撫りながら、藤十郎は、

「いや、實に恐れ入りました。甚だ失禮で、御座りますが、當道場の御方とも心得ませぬ。而て、先生の御姓名の儀は……」

了得に、藤十郎も、聞ゆる劍客だけあつて、偉い者だ。齋藤は、思はず頭を押へて、

「何とも、御鑑識のほど恐れ入る。自分は、江戸表より参りたるものにて、齋藤新太郎と、申す者で御座る」  
 「應、原來、彌九郎先生御令息、新太郎先生で御座りましたか」  
 道場に並んで、之を見て居た、若い連中も驚いた。之が評判の齋藤彌九郎の件か、夫にしても、桂が何うして仲れて来たのだらう。桂といふ奴は、實に不思議な術を、心得て居ると、最前から、此の様子を見て代範も、感服した。實に美しい、此二人の立合といひ、應接といひ、立派な所を見るにつけても、自分が不明にして、齋藤を逐返した振舞が、如何にも羞かしい事と思ふて、更に禮を厚くして、此二人を、奥の客間に入れ、酒肴の用意を調べて、改めて挨拶をした。夫に就けても、桂の働きは頗るものである、といふので、早くも此事が評判になり、宮部は、一晚泊つて、何れへか立去つたが、齋藤は、一同からの頼みに依つて、當分は、足を留める事になつた。  
 斯うした關係から、小五郎は、齋藤の爲めに、非常な鼻負を受けて、稽古の上に、誰彼の區別は無いが、然し、小五郎に對しては、特に齋藤が、心を入れて、稽古をする。小五郎も、天稟の才能がある上に、先生の仕込が仕込であるから、其腕前は、日増に上達して、終には小五郎が、上段に振被つて、打下して来る時は、大概なものは、之を避ける事が出来なかつたほどで、之を萩の城下では、小五郎の上段といふて、人が評判するほどになつた。

七

宮部の爲に、明倫館の道場を破られやう、としたのを、不取扱ひをして逐返した、齋藤を説き付けて、之を道場の一人、といふ事に裝ふて、宮部と試合をさせて、道場の面目を保つた、といふ、其奇才は、城下に於ての評判になつた。而已ならず、齋藤が、小五郎の言ふ所に背いて、宮部と、試合をしてくれた、といふ事は、達引の強い、江戸武士は流石であると、その評判は、日に高くなつて来て、何日か、重役の耳にも入つて、漸々、其仔細を調べた後、遂に齋藤を以て、一時に、明倫館の師範と、いふ事に仰いで、藩士へ、劍術の指南を、して貰ふ事になつた。關係が、斯ういふ譯であるから、齋藤も又、一段と奮發して、教授を勵んだ。従つて、教へられる藩士も、稽古を勵む、といふやうな次第で、何日しか之が、毛利侯のお耳に入つて、齋藤も、幾度か御前試合に、腕前を現はすこともあつて、一年餘りを過す中に、江戸の實父、彌九郎から使が来て、是非立歸らなければならぬ、といふ事になつた。乃て漸々手續に及ぶと、重役の人々を初め、明倫館の門弟達は、  
 「猶う半年ほど、留まつて貰ひたい」  
 といふて、種々言葉を盡して頼んだが、齋藤は、事情が許さないから、強て辭退をして、彌々暇を貰つて、江戸へ歸る事になつた。齋藤の腕前は確實だ、といふ事にも、信用は置いたが、其父の彌九郎は、又天下に、名の轟いた劍客であるから、齋藤の歸るのを幸ひとして、藩士の中で幾人かを選抜して、齋藤の塾へ送る、といふ事になつた。漸々熟議の上で選まれたのが、井上壯太郎、河野衛門、永田健吉、財田新三郎、林乙熊、佐久間宇吉等の人達であつた。然るに、何ういふ都合であつたか、桂が、其の選抜に、洩れて居た。さア然うなると、桂も、黙つては居られない。夫々に、重役の家を歴訪して、

「全體、齋藤の足留をして、明倫館に、半年置いたのは、原因を糾せば、自分の働であつて、齋藤に、無禮を加へて、那の儘にして置けば、明倫館と、齋藤の關係は付くまい。従つて、齋藤の教授も、受ける事は出来なかつたのだ、夫を自分が、一存を以て、齋藤の居所を訪ねて、之を説き付けて、連れて歸つた、といふ爲に、今日の關係が付いたのである。然るを、齋藤が、江戸へ歸るといふに就て、藩士の中から、青年を付けて、修行に出す、といふ場合に自分を除いて、他の青年を選む、といふ事は、甚だ其意を得ない事である」  
 と言つて、是非とも、自分を、其列に加へてくれ、といふ事を迫つたが、藩の方では、既に夫と決定して了つたので今は奈何ともする事が出来ないから、様々に、桂を慰めて、思ひ止まらせよう、とするが、桂は、一旦夫と思ひ立つたのであるから、却々其慰めを、背く理由もなく、遂に自ら進んで出府する、といふ事になつた。然し、第一に困る

のは旅費であつて、之には一方ならず苦んだが、併し、夫には亦、助ける人も出て来る。殊には、父の昌景が、交際の廣かつた人であるがために、其關係から、陰に小五郎を、助ける者も出て来た。齋藤の一行が出發して、幾日かの後に、小五郎も、單身、江戸表へ、乗出して来た。之が桂の、天下國家の事に關係する、抑々の原因になるのである。昔から、能く言傳へてあることだが、後年に偉くなるものは、青年時から、何となく異ふ所があるもので、桂の奇才と、この奮發は、普通の青年には、鳥渡見ることが出来ない。今日のやうに、ピーガラ／＼と、百里の道も、朝出て夕方に着く、といふ便利な機關もなく、それについて、一般の事が不自由であるのは、いふ迄もない。その時代に未だ前髪の有る身で、三百里の長旅を物ともせず、況して藩の重役と争ふて、乗出して来る、といふ、その意氣は、實に素晴らしいものだ。親の脛を噛つて、月末の送金を目的に、怪しい女の尻を逐廻したり、或は何の役にも立たない死學問に、満足して居る連中は、桂といふ字を煎じて、少し飲んだら可からう。

### 齋藤塾の木戸

小五郎が、江戸へ出府来たのは、嘉永三年であつて、恰度、十七歳の時であつた。此年に、亞米利加のペルリが、やつて来て、江戸は、今にも修羅の巷に、なるかの如き、騒擾の最中、二百餘年、太平の夢も、彌々覺めかゝつて、三百諸侯の中でも、稍見識を備へたものは、幕政の改革とか、或は攘夷とか、或は開國とか、いふやうな事を、唱へる時節になつて、来た。小五郎は、未だ年齒は壯し、熱く天下の大問題を咀嚼て、直ちに夫に向つて、意見を決める、といふやうな、立派な者では、なかつた。雖然、元來が、普通の青年でないから、然うした騒擾の場合に、江戸へ乗込んで来た、といふ事は、他日、天下の事に、指を染める場合に、深い研究には、なつたに違ひない。櫻田の毛利邸に居つて、毎日のやうに、九段坂上の齋藤塾へ通つて、修業をして居た。

齋藤新太郎が、父の命に依つて、江戸へ歸つて来たのは、怎ういふ次第か、といふに、父の彌九郎が、既う相當の年輩でもあり、旁、新太郎に、家督を譲つて、自分は、隱居をする意で、呼寄せたのであつた。於是、新太郎は二代目、齋藤彌九郎として、大きな道場の主人と、なつたのである。父は、全く隱居して、名を、篤信齋と改めた。此人は、劍術の名人であつたばかりでなく、非常な慷慨家で、常に國事に就て、少からぬ心配を、して居たものである。先には、渡邊華山とか、後には、藤田東湖とかいふやうな、人と、深く交際を結んで居た、と云ふ一事に徴して



も、普通の剣術屋とは、異つた思想を、有つて居た、といふ事が判る。然れば、齋藤塾の繁昌も、非常なものであつた。天下に志のあるものは、多く齋藤の塾へ、入る傾きがあつて、現に、渡邊昇、山尾庸三、井上勝、楠本正隆、關口隆吉等の連中も、此の塾生であつた。齋藤塾を、一面から見ると、有志家の俱樂部の如く、思はれたほどである。小五郎は、漸々、通つて居る中に、斯ういふ事情も、判つて来たから、自分の勵みにもなり、進んで修行も、爲て居た。篤信齋の次男で、勸之助と、いふ人があつた。之は新太郎から見れば、年齒も三歳四歳下で、未だ壯かつたが腕前の優れて居た事は非常なもので、實力は、却て新太郎以上であり、齋藤塾の鬼勸と、稱して居た位であつた。其代り、氣も荒々しく、どういふ人にも、巧手をいふとか、下から出る、とか、いふやうな事はなかつたので、一部の人には、大層憎まれたものであつた。

或日、小五郎は、例の通り、道場へ入つて、着りに大勢の試合を、見て居る中に、乃て、例の鬼勸が、支度を調へて、道場の真中へ、現はれた。

『さア。誰でも來さつしやい。稽古を付けよう』  
四五十人集まつて居た、門人が、互ひに尻込をした。若先生が、稽古を付けてくれる、といふので、喜んで出さうなものだが、鬼勸に、斯う聲を掛けられたら、進んで出るものがない。と言ふのは、稽古が荒くて、意地の悪い事を爲る爲めに、自然、夫を嫌ふて、稽古を付けて貰はう、といふ者が、ないのであつた。此有様を見ると、負る事の嫌ひな、小五郎は、  
『若先生、拙者が一本、御指南を願ひたい』  
『快哉、誰彼の用捨はない。早く支度をして、出さつしやい』  
夫から、小五郎は、支度をして、鬼勸の彼方へ進つた。勿論、腕前を較べれば、天地雲壤の差ひだ。進も比較物に

はならぬ。然し、一生懸命に、小五郎は、鬼勸へ打つてかゝる、夫を然るべく、扱らつて居ては、打込む。技の出来る上、力のある人に、うんと打込まれるから、道具は着けて居るが、痛い事は、非常だ。最初の二本三本は、堪へても居るが、夫が續いて來ると、息もきれる。痛さもまして來て、眼は眩む。逆も堪つたものではない。小五郎は、少しも屈せず、打たれれば、打たれるほど、進んで來るから、鬼勸の方でも、はづみが付いて來たか、或は突倒したり打倒したり、散々に苛責だ。夫れでも小五郎は、更に屈せず、倒れては起き、起きては向ひ、少しも屈する處がなかつた。其根氣の良い事と、強情なのには、了得の鬼勸も、呆れるほどであつた。遂に、小五郎は、呼吸が續かず、道場の真中に、倒れてしまつた。さア周圍に見て居る者も、今は打捨てても置けないから、寄つて集つて、道具を外し、氣付などを服せたり、水を吞ませたりして、介抱すると、漸う我に返つた、小五郎が、  
『若先生、今日は、お稽古らしい、お稽古を頂いて、誠に有難う存じました。小三郎は、まだ命は、御座りまする、今一本……』

と、言ひながら、立向はうとした。之には、鬼勸の方が、恐れ入つて、成程、兄の新太郎が言ふたが、此の小五郎といふ奴は、普通の者ではない、と、夫からの小五郎は、ひどく、齋藤兄弟に可愛がられ、みつしり仕込まれたから、その上達は著るしく、今は動もすると、若先生も、三本に一本は取られるまでに、上達をして來た。隠居の篤信齋も小五郎の人爲を愛して、遂に塾の一室を貸與へて、門人頭として、時折は、篤信齋が、自から劍術の奥義を、教へるやうに、なつて來た。

一一

武家時代にあつては、劍術が、武士の表藝に、なつて居た。然れば、如何なるもので、武門の人と爲つたもので、多少とも、此修行を爲ぬものは無かつた。江戸市中に、數多く道場があつても、皆相當に門人があつて、殊に、千葉、

桃井、齋藤の三塾の如きは、千人以上の門人が、常に出入して居た、と傳へられてある。當時の全盛が思ひやられるではないか。

小五郎は、僅に二年か三年の間で、他の者の十年以上も、修行するだけの事を、會得して了つた。殊に、上春丈はあるし、筋骨は逞しく、膂力は、勝れて居た。年には過ぎた、随分分別もあつて、其れで、劍術が強い、といふのだから、鬼に金棒、といふべき譯で、遂には、齋藤塾の塾頭と、いふ事にまでなつて、今は先生、不在の折は、多く小五郎が、代範になつて、多くの門人に、接して居た位である。従つて、小五郎の名聲は、漸々と響いて、苟も竹刀を持つ者で、小五郎の名を、知らぬ者はない、といふ程に、なつて来た。

當時、將軍の指南役を、勤めて居た、男谷下總守の門人に、柿本清吉と、いふ人があつた。之は、下總守より強いといふ位に、評判の高かつた人であるが、齋藤塾の小五郎と、下總守の柿本と、何方が強いか、といふ事を、人が寄ると、すぐ評判を爲るやうになつた。その噂が、小五郎の耳に入つたから、さア堪まらない。血の沸くやうな、若い時分の事として、耐忍が出来ぬ。荐りに篤信齋に迫つて、「柿本と一本の試合をいたし、雌雄を決しさせて貰ひたい」といふて、頼み込んだ。

篤信齋は、大人であるから、毎も快諾々々と、いふて、受込んで呉れるが、一向に取合ふ、氣色がなかつた。小五郎は、篤信齋の顔を見ると、其事を迫る。遂には篤信齋も、小五郎の根氣に降参して、何とか手續きをしてやらう、といふ事になつた。幸ひ、下總守と篤信齋は、深い交際があつたから、或時、此事を、打明けて話すと、下總守は、將軍の指南役を、爲て居るだけあつて、

「其れは面白からう、拙者も、其の試合の光景を見たい。豫て評判に聞いて居る、桂小五郎に、何れ程の腕前があるか、参考に置いて置きたい」といふやうな、先方から、進んで話しに、なつて来たから、於是、柿本と試合を、爲る事になつて、場所は、齋藤

の道場を以てする、といふ事に、定つた。彌々其の當日になると、小五郎は、今日こそは、晴の試合である、といふので、充分に支度をして、待構へた。柿本も、總て支度が出来て彌々試合になつた。然るに、此の勝負は、三本の中二本は、小五郎が取つて、名譽の勝利を、博する事になつた。

其事が、評判になる中に、何う誤つたか、小五郎が、男谷下總守を打込んだ、といふて、將軍の師範役でさへ及ばぬのだから、何れ程の腕前か判らぬ、といふやうな、評判が立つた。然し、其の實は、柿本清吉で、下總守が立合つたのではない。假に、下總守が試合をしたとしても、これは物にならない。劍聖と迄、一般からいはれて、島田虎之助の如き名劍士が、この門から出て居る位であるから、小五郎なぞの及ぶ所でないのは、固より知れた事である。

其内に、松平河内守から、篤信齋が招かれて、伊勢の津から、吉見道造といふて、海道一の劍客が、来て居るから、桂と、試合をさせて貰ひたい、といふ事を頼まれて、篤信齋も、快よく承知して、河内守の邸に於て、吉見と立合をする事になつたが、夫も見事に、小五郎が、二本取つて、勝利を得た。之には、河内守も、舌を巻いて驚いた。年齒も若く、實に立派な腕前を、有つて居る。さては、毛利侯は、良い家臣を有つて、御徳俸とまで、激賞した。其頃に於て、天下の珍ともいふべく、和蘭渡りの羅紗一卷を、其の褒美として、小五郎に與れた。慙ういふ合で、各所に於て、先方から望まれて、試合をする。此方も又、望んで試合をする、それが毎も、小五郎の勝利となつて、漸々と、其の評判が高くなつて来た。今は、齋藤塾に、桂はなければならぬものゝ如く、言はれるやうになつた。斯うなると、先生の喜びも、尋常でない。自慢の門人として、那處へでも連れてゆくから、自然と、桂の交際は廣くなる。之れも、後日に桂が飛躍する上に、非常の好都合と、なつたのである。

(桂といひ、小五郎といひ、話の運びの都合で、どちらも使ふ事にしてあるから、念の爲、斷つて置く)

或日の事であつたが、塾生三四人に誘はれて、桂は、散歩がてらの東照宮詣で、上野をさして、やつて来た。幕府が盛んの頃、上野は、大したものであつた。桂も、東照宮の祠前に詣で、参拜も終つて、山内を、其處此處となく、散歩をして居る間に、如何にも、其の規模の、宏大なるを見て、坐に思ひ出したのは、國許を立つて、江戸へ来る途中、京都の邸に、五六日滞在した。其際に、御所の大破して居る、光景を見て、御痛はしい次第である、といふ感じを有つた。其の念の、未だ消えぬ中に、徳川の御廟所の、盛んなる光景を見ては、何とも言へぬ、感慨に打たれて、王室の衰微を、憂ふるの念が、頻りに深くなつて来た。

上野も、現時は公園となつて、動物園や博物館に依つて、漸やく人に知られて居る、といふやうなものだが、曠昔の規模を述べたらば、實に大層なものであつた。今、其の大略を演べて置きたい、と思ふ。抑も、寛永四年の事である。山城國なる、比叡山延曆寺に擬らへて、智僧天海が、開基に係る、東叡山寛永寺、家康以來の廟墓を設け、江戸城の鎮護と、いふ事を名義にして、京都より宮様を迎へ奉り、之れを法親王と稱し、御廟を輪王寺と稱して、其住職に押立て、關東唯一の靈場として、諸人の崇敬を受け、三百諸侯が、参觀交代の砌には、必ず先づ、寛永寺に來つて、武運長久を祈り、東照宮の靈前に、叩頭百拜をする、といふやうな、習慣になつて居た。然れば、上野の繁昌は、一通りのものでは、なかつた。

江戸城を、北に離るゝ事、殆んど一里、始めは忍ヶ岡と、いふて、俗に之を上野といふた。山内の廣さは、三十萬坪に餘り、今は無くなつたが、當時は未だ、文殊樓、吉祥閣など、いふのがあつて、朱塗の高樓が高く、半天の雲を凌ぐ、といふ有様で、實に堂々たるものであつた。今、山王臺と、稱へて居る所には、山王の祠があつて、其の後の所が、今も遺つて居る、清水觀音堂である。井の端の櫻あやなし酒の醉、才女秋色が詠んだ、秋色櫻なるものは、今も猶遺つて居る。文珠樓の西北に、當つて在るのが、例の大佛殿鐘撞堂である。之より北に行くと、一丁餘りにして右は法蓋堂、左に、常行堂があつて、更に北へ偏して、根本中堂がある。廻廊門、橋、總べて輪奐の美を盡し、右

にあるのを多寶塔とし、左りにあるのは、轉輪藏と稱へ、中堂に祀つたのは、藥師佛である。中堂の後に、設けたる殿堂は、法親王の在せられる、御本坊であつて、四軒寺町と、下寺町と、鶯溪に散在するのが十八院、錦小路と谷中道、梶谷から清水谷へかけて十八院、之を併せて、三十六坊と稱した。御本坊の東屏風坂の上に、法親王の陵墓がある。之れを慈眼堂と、稱して居た。又、徳川家の廟墓は、御本坊の北、樹木鬱蒼として、畫尙暗き邊に、設けられてある。山内は、大概平垣にして、北は根岸から、三河島に續き、西に沿ふて、根津谷中村に連なる。南方に在る池が、不忍の池で池中に祀つたのは、辨財天である。此池から、流れ出る水が、三橋の下を潜つて、有名な忍川である。俗に言ふ、上野八門といつたのは、南に面して居るのが、黒門で、之を正門と稱し、稍右に離れて、新黒門がある。東にあるのを車坂門、屏風坂門、と言ひ、更に北に通じて、新門といふのがあつて、西の方には穴稱荷門、清水門の二ツがある。遙かに離れて、谷中門がある。之を總稱して、八門と稱した。現時では、其の條も止めないで、極めて壯嚴の趣きは、缺いて了ふたが、其の從前は、實に堂々たるものであつた。徳川の御威光、盛んの時代には、此の廟所の、規模の宏大なる、光景を見せる、といふ事が、人の心を押へる、一つの方法には、なつたのだが、さて、將軍の御威光が衰へて、徳川の礎が、施んで來た時には、却つて之が、災禍を爲す事になつたのである。即ち桂が、京都の御所の衰へてる、光景を見、更に御廟所の、壯嚴な光景を見て、感慨を深うした、といふが如きは、其一例である。苟も、勤王の志深きものが、之を對照するならば、必ず徳川の王室に對する、不臣の感を、深くするもの無理ではなかつた。

四

幕末の勤王家で、有名な人達の履歴を、だん／＼調べると、大概は、江戸へ出て來て、上野や芝の、徳川家の靈廟を見て、之を京都の、御所に比較べ、皇室の衰微の、甚だしきに憤慨して、夫から劫然として、勤王の志が、起き



て来た、といふやうな事が、多くある事を、發見した。之に依つて見ると、折角に、徳川が苦心して、其威光を、示す爲めに設けた、増上寺や、寛永寺も、却て徳川に、反抗の氣勢を、熾んならしむる原因と、なつたのは、思へば不思議な次第である。

抑も政權が、武門に歸して六百年、皇室の御威光は、殆んど地に委して、見る影もない、状態であつた。徳川時代に、朝廷の御收權は、僅に十萬石餘であつた。苟も日本六十餘州の主たるべき御方が、十萬石内外で、消光のつくべき筈はない。殊に可笑のは、徳川が、關八州を領して、四百萬石以上の收權がある。世に傳ふる所では、八百萬石とも言ふ位で、主人と家臣が、之ほど迄に、收權に異ひがあるといふのは、實に不權衡も、甚だしい事だ。朝廷の收權は公卿共に、夫々知行を分與へて其残つたものが、眞の收權になるのであるから、實際に於ては、三萬石以内で、一年の皇室費と、いふものを、賄はれて居たのである。如何に御儉約の當時と言ひながら、夫で満足の御生活が、出来る道理が無い。従つて、公卿の手當も、勿論、多いものではなかつた。關白といへば、日本第一の大官であるが、夫でも、二千石か、三千石の端知行で、パイ／＼して居た。現今の西園寺公望の如きは、家柄は、實に立派なものであるが、仍且、其の知行に至つては、僅に五百九十七石といふ、心細いものであつたから、頗る苦しかった。切てが斯うした調子であるから、幕政時代の、朝廷の御状態と、いふものは、實に形容も出来ないほどに、悲惨なものであつた。

幕府が、朝廷へ對して、不臣の行ひがあつた、といふ事は、一切の政治を、獨斷專行して居たばかりでなく、朝廷のお手當も、右の如くであるから、苟も心あるものが、江戸と京都を對照して、考へて見ると、自然、徳川を憎むの情が、起つて来て、朝廷の御爲に盡さう、といふやうな考へが、起るのも無理のない事であつた。桂は、上野から、歸つて来て、其夜は、齋藤塾の一室に、晝間の感想を、繰返して居たのであるが、心窩かに思ふやう、

「思へば思ふほど、幕府が、皇室へ對する、不忠不義は甚だしい。今までは、日本政記や、外史を讀んで、只机の上の議論として見たが、熟々考へれば、那れは机の上の議論ではなかつた。山陽も、亦自分の如く、上野や京都の狀態を見て、感慨を深くした餘り、那の著述が、あつたに違ひない。如何にしても、御痛はしいのは、朝廷である。何とかして、王政の昔に、引戻さなければならぬ。が然し、其れも、現在の狀態では、奈何とも爲る事が出来ない。よし、徳川の威光は、昔のやうでない、とするも、猶六十餘州を押へて、三百諸侯を、脚下に見て居るのであるから、之を倒す、といふ事は、容易な譯ではない。我が毛利藩の如きも、關ヶ原の一戦に敗れて、徳川の爲めに領地を削られ、僅かに餘す所は、長防の二州、三十六萬石では、何とも致し様がない……」

と、千々に心を碎き、思ひを惱まして、何時しか疲れたものか、机に凭れた儘、眠て了つた。  
頼三樹三郎や、平野次郎が、矢張り、上野へ来て、憤慨の餘り、東照宮祠前の石燈籠を、足蹴にして、それが、至難しい問題になつた事がある。勤王の志は、其前から有つて居たらうが、この事に刺激されて、一層、その志の堅くなつた、といふのは、事實である。桂と、同じ道を、辿つてゆく人は、前後に澤山在つたのだ。それが、何時か倒幕の機運を、造つたのであらう。

五

翌日の朝、稽古を終つて、一汗かいたから、湯に行く意で、桂は、戶外へ出ると、ワーワツといふ、人騒ぎだ。見れば、廣い往來の半は、人を以て、埋られて居る。何事か、と立寄つて、人立の後から、伸上つて見ると、俗に陸尺と稱する、大名の部屋に、養なはれて居る人足が、二人で喧嘩を、して居るのであつた。一人は、六尺ゆたかの大男で、威猛高になつて、對手の奴を、罵つて居る。罵しられて居る方は、極めて小男で、同じ部屋者ではあるが、身分は幾らか異ふと見えて、大男の方が、頻りに威張つて居る。

「さア、此所で見付けたら、百年目だ。どうしても勘辨ならねえから、部屋へ来い。白い黒いは夫から付ける。さア、一緒に来い」

「まあ、兄い、そんなに怒らねえで、俺が悪い、と思ふから、先刻から、此んなに手を突いて、謝まつてるぢやアねえか、其内に、何とか身の振方も付くだらうから、さうしたら土産物の一つも持つて、詫に行かう、と思つて居たのだ、どうか、済まねえが今日一日の所だ、見通してくんねえな」

「イヤ、勘辨ならねえ。手前のやうな、人非人のやうな奴は、部屋へシヨ引て行つて、大勢居る中で、面の皮を引剥かなければ、却々、自分の悪い事が判るもんぢやねえ。さア来しやアがれ」

「まあ、其様事を言はずに……」

詫るのも肯かず、大男が、猿臂を伸して、小男の襟髪を、ムツと引掴んだ。

「さア、来い」

引摺るやうにする。其手に縋つて、猶も頻りに詫て居た。周圍に寄つて、見て居た見物は、例の通り、尻尾のない野次馬が多いのだから、勝手な批評を、して居る。其内に、何と思つたか、頻りに詫て居た、小男が、押へられて居た手を、パツと拂つた。

「オヤツ、汝、おつな事をしやアがるな」

と言ひながら、拳を固めて、打つて来た。其手を押へて、前に引くと、はずみを食つて、大男は、トン／＼と、二足三足泳いで来た。所を、足をすくつたから、筋斗打つて倒れた、其上へ馬乗に跨がつて、小男が、左の手で、咽喉を締ると、右に拳を揮つて、二ツ三ツ、續け打ちに、打ちのめした。

「今までは、俺が悪いと、思つて居たから、詫まるだけは詫まつて、詫も言つたが、何うしても勘辨ならねえ、とあつて、人立のする往來中で、恥をかゝされちやア、モウ男が廢つた。此上は、俺の方でも、力づくだから、さア、

起きるなら起きてしろ」

と、押へ付けた力は、不思議に強く、悶けどあせれど、別返す事が出来ない。見物は、之を見ると、ワーワツといふ騒ぎで、今度は、大男を、嘲けり罵る。其内に、見物の者が、二人の中へ入つて、両方へ引分けると、大男は、體裁悪げに、何かブツ／＼言ひながら、逃ぐるが如く、立去つて了つた。對手が失なつて、一人になれば瀧らないから、見物は、夫々に散じて了つた。小男は、坂の方を差して、ブラリ／＼と行く。後から躡いて来た、桂が、

「これ／＼」

「へえ」

「鳥渡、待て」

「へえ／＼、何か旦那、御用で御座いますか」

「うむ、汝の喧嘩する所を、今見て居たのだが、却々軀に似合ぬ、力があるのう」

彼の男は、頭を押へながら、

「へい／＼、御座談仰しやちや可けません。お羞かしい事で、御座えやす」

「いや、然うでない、汝は、最初から事情を盡して、詫て居たのだ。其の詫言を肯かずに、理不盡にも、那アいふ亂暴を働いて、汝を、酷い目に合はせたのだ。夫でも、汝が詫て居て、其内に、汝も味えかねたと見えて、反抗をする手もなく、對手の奴が、那あいふ目にあつた。汝に捻ぢふせられたら、モウ勿ね起きる事が、出来なかつた。イヤ、どうも、實に立派な喧嘩ぶりぢやつた」

「御元談仰しやちや可けません。苦し紛れの糞力と、いふやつてすから」

「併し、如何に苦し紛れでも、無い力を出ないものぢやからな」

「なに、私は、劍術や柔術が、好きて御座いますして、下素下郎では御座いますが、少しは稽古をして居るもんです

から、且仍夫が役に立つたので御座えやすよ。アハ、、、」  
 「然うか、夫では、多少の嗜みがあるのぢやな」  
 「へい、嗜みといふ程ぢや、御座いませんけれど」  
 「うむ、然うか、何しろ男といふものは、其の心得が、なければ可かね」  
 と言ひながら、懐を探つて、若干の金を包んで、  
 「之を汝に遣はす」  
 「何で、其様ものを」  
 「喧嘩の見物料ぢや」  
 「眞實で御座えやすか」  
 「うむ、汝の喧嘩ぶりを見て、俺は、實に快く思つた。之は些の褒美の印ぢや」  
 「然うて御座えやすか、夫ぢや遠慮なしに、頂戴して置きます。有難う御座えやす」  
 と、禮を言ひながら、喜んで彼方へ行く、小男の後影を見送つて、桂は、心の中に、  
 「嗚呼之だ、大きいから大丈夫だとは限らぬ、小さいから及ばぬといふやうな事は、夫は只外から見ただけの事で、  
 實力さへあれば、小さい者が、大きい物を、倒すのは、何でもない事である。天下の事は只實力にある」  
 と、飄然として、悟る所があつた。之が抑も、桂の幕府を倒さうといふ、考への臍の緒が、固まつた、動機である。

六

ペルリが來てから、露西亞、英吉利、普魯西、其の他の國は、追々と、使節を遣して、開國貿易を、迫つて來る。  
 一方には、攘夷鎖港の議論が、却々盛んな勢ひで、幕府の開港方針に就て、様々なる非難が、起きて來た。又幕府に

於ても、眞に開國貿易を、良い事と信じて、やるのではなく、外から迫られて據所なく、條約に調印するといふやうな傾きに、なつたのであるから、腹の中では、仍且、幾分か攘夷の考へが、無いのでもなかつた。若し萬一の場合、外國と戦端を啓くやうな事があつては、一大事であるから、夫に對する、相當の準備も立てなければならぬ、といふ事になつて、品川灣に、相當の防禦準備を、爲る事になつた。夫が總て、今日に残つて居る、砲臺を築く、といふ事になつたのである。品川灣の砲臺築造に就ては、江川太郎左衛門と、齋藤篤信齋の二人が、工事の監督を、幕府から命じられた。尤も、江川は、熱心なる砲臺築造論者であつて、夫れに就ては、勘定奉行との間に、随分甚い論争もあつて、平生は、餘り多く事を論じたり、騒いだりするやうな事を好まぬ江川も、此砲臺の件に就ては、勘定奉行と、猛烈な争ひをした、といふやうな、事實がある位で、江川の熱心は、一通りでなかつた。

江川は、何ういふ身分の人か、といふと、伊豆國韮山の代官で、其家は、殆んど七百年の昔から續いて、先祖以來引續いての代官であつた。一口に代官とはいふけれど、其實は、一萬石の諸侯の、格式を與へられて、伊豆の國に於ける勢力は、實にえらいものであつた。殊に、太郎左衛門は、極めて清廉の武士であつた而已ならず、我國の兵學の上には、恩人ともいふて然るべきほどの、關係を有て居た人である。大砲鑄造に關する、機械の一部は、今も猶其の地方に、残つて居て、國家の記念品として、陸軍省が、保護を加へて、保存を計つて居る位だ。此の人の一代の中に、盡された事はなかく、數へ難い位であるが、殊に、有名な高島秋帆を救ふた、といふ事は、後世に傳ふべき美談であらう、と思ふ。秋帆は、長崎の人で、日本の砲術に於ては、尤も貢獻する所のあつた人であるが、才を歎み、能を惡むと、いふ風の多かつた、幕吏の爲めに、陥れられて、已に命の危かつたのを、江川から、幕府へ歎願をして、自分の手許へ引取つて、長く高島を師として、學んだのが、江川である。其前後の事情を述べれば、随分長くもなるから、只簡略に、之だけを述べて置くが、江川といふ人は兎に角、普通の武士では、なかつた。殊更に、其最後の一節の如きは、實に立派なものであつた。病氣に罹つて、韮山に歸省して居た時に、幕府から、御用を以て、

出府を命じた。醫者は、病の爲めに良しくない、といふて、其の出府すべき事を、差留めた。けれども、江川は、苟も幕府に、仕へて居る以上、幕府の命に依つて、出府を命ぜられる限り、出なければならぬ。我が生命の夫が爲めに短くなる、といふ事は、之は天命で致方がない。只我は、幕命に従ふの一事を、知るのみである、といふて、醫者や家人の留めるのも肯かずして、出發したが、途中に於て、遂に死んで了つた。凜とした、氣節を有つて居た、江川太郎左衛門と、殆んど兄弟の如く、深い親交のあつた人が、即ち齋藤であつて、此二人が、揃ひも揃つて、砲臺築造の監督を申付かつたといふのは、實に面白い事である。

今日の如く工事について、一般の知識が、進んで居れば格別だが、未だ其當時は、却々左様いふ次第には、ならなかつたのだ。尤も、神社佛閣のやうな、大きい殿堂を造る事に於ては、今より昔の方が、善かつたやうであるが、その他の工事は、今の方が優つて居るやうに、思はれる。殊に、軍備についての工事は、到底比べものにはならぬ。品川の砲臺が、實用になるかならぬかは、暫らく措いて、兎に角、彼れ丈けの物を造り上げた苦心は、充分に察す可きである。

七

桂は相變らず道場にあつて、入替り、立替り、向つて来る、門人に對して、稽古を付けて居たが、一日と、國事に對する念は、熱くなつて来て、殊に勤王の志ざし、抑へんとして押へる能はず、悶々の情を押へて、日を送つて居た。然るに、此頃は、篤信齋が、幕府の命を受けて、品川砲臺築造の、監督をする爲めに、毎日出張せられる、といふ事を聞いて、之れは、實に好い機會である。我が毛利藩も、下の關の海峡を、控へて居る以上は、何れ一度は、異國と、開戦の場合もあらう、又、時宜に依つては、幕府と對戦するやうな事がない、とも言へない、其の場合に、那の海峡を、巧みに守つて、敵の襲來を防ぐ、といふ事も、大切である。夫に就て、第一の必要は、砲臺である。何ういふ風にして造るべきものであるか、只書物の上ばかりでは心許ないから、此際に、實地の工事を、見聞して置きたい、といふ考へを起した。

『先生に、お願ひが御座りますが、是非、御承知を願ひたい』

『そりや、何ういふ事か』

『他の儀でも御座りませぬが、此頃、先生は、品川の砲臺築造に就て、監督の役を、お引受けになり、日々出張の事で御座るが、私も、一通り築造の模様を、實見いたしたく考へます。お供の儀を許しを願ひたい』

之を聞いて、暫時考へて居た、篤信齋は、

『いや、折角の頼みぢやが、其れは、拙者一人の考へを以て許す、といふ譯に可かぬ』

『そりや、何ういふ理由で御座りますか』

『實は、葦山の代官江川太郎左衛門殿が、監督のお役を受けて、拙者は、只介添として、御付き申すだけの事であるから、汝を、伴れて行く、といふ事は、拙者が許す、といふ理由には可かん』

『其れでは、江川様に、先生から、お願ひをして頂きたいものです』

如何にも、桂の調子が熱心で、さまざまにして、頼み込んだから、篤信齋も、

『然ういふ次第ならば、一應は、江川殿に、話しをして見よう』

と、いふ事になつて、其の日は済んだ。幾日かの後に、恰度、太郎左衛門が、來たのを幸ひと、篤信齋の口添で、桂を紹介した。豫て聞き及ぶ、桂小五郎は、之かと思ふて、江川は、身分の異ひを打捨て、懇篤に種々な話しをして聞かせた。桂は、頻りに品川出張の隨行を、頼み込んだ。篤信齋も、傍から口を添へて、之を取成す、といふやうな次第で、江川も、遂に之を承知する事になつた。然し、只伴れて行く、といふ事は出來ないから、桂を一時、江

川の僕に仕立て、伴れて行く、といふ事になつた。

彌々約束の日が来たので、桂は、髪結を頼んで、鬘を、野郎頭に直して、江川の定紋の付いた、法被を被て、辨當を腰に提げ、篤信齋と共に、江川の邸へ来て、夫から、羽田へ、やつて来た。斯て桂は、毎日のやうに通つて来て、其の工事の状態を、見て居た、或日の事であつたが、午飯休の時に、ブラ／＼海岸を、散歩して来ると、一軒の水茶屋があつたから、其所へ休んで、菓子などを食ひながら、茶店の婆さんと、春りに話し込んだ。之が縁になつて、其の後、ちよい／＼此茶屋に、休むやうな事になると、頻りに其婆さんが、桂の容姿を見て、

「ねえ、汝さん、妾は、物も判らねえだが、汝さんは、尋常の人間ぢやねえネ」

「えッ、只の人間ぢやないとは、何だな」

「なににさ、見りやア、草履持のやうな、風はして居るが、何だか、汝さんは、お武士のやうだね」

桂は、思はず愕然とした。幾ら化けて居ても、舉動、容姿、言語つき、何所となく、其れと見えたものか、と、自分でも考へた。

「そりや、婆さん、汝の鑑識違ひ、といふものだ。俺は、決して其様ものではない。江川様の草履取をして居るのだ」

「うむ、然うかね。まア、眞實に然うかも知れねえが、萬一然うなら、現在は、其様事をして居ても、汝さんは、立派な人間になるよ」

「うむ、然う見えるかな」

「妾は、既う客扱ひとして居るんだから、大概な事は判るんだが、汝さんは、出世をする質だよ」

桂も、颯に乗つて、膝をすゝめた。

「何ういふ所て、然う見えるかい」

「何ういふ所つて、別に怎うといつて、話しも能ねえが、妾の目には、然う見えるのだ」

「アツハ、、、」  
其日は、夫で歸つたが、何となく此婆さんが、氣味が悪いので、夫から後は、餘り其の茶屋へ、寄付かぬやうにしたが、此婆さんの言ふた事に、實際間違ひはなかつた。後に出世をする、といふたが、内閣顧問にまでなれば、出世をしたに違ひない。多寡が、羽田あたりの水茶屋の婆さんでも、人を見るのに、怎ういふ巧手ながあつた。後になつても、桂は、時としては此話しをして、其昔を偲んだ、といふ事である。

八

昨今になつて見ると、品川の砲臺が、何ういふ考へから造られたのか、殆んど無意味のものに、なつて居るが、當時の事情から、考へて見れば、那樣ものを造つて、其れで萬一の場合に、充分の防戦が能る、として、満足して居たのだから、面白い。那れだけの物を造るのでも、非常な金を使つたが、管に金ばかりではなく、之が爲めには、多く人足の命も、縮めて居るのであつた。現今では、此の砲臺が、陸軍省の所轄に、なつて居て、却て陸軍省では、之を持餘して、その處分に就ては、數年來の懸案に、なつて居る位である。造る時は、外國の軍艦を對手に、軍をする意であつたのだが、今日になると、之が何の用も爲さずに、處分方に苦しんで居るなどは、考へて見れば、随分滑稽な事である。

桂は、毎日のやうに、齋藤江川の從者となつて、羽田へ来ては、工事の實況を、視察して居た。此の前後に於て、漸々、人に知られて来て、桂は、管に竹刀を持つて、人の頭を叩く技師ではなく、堂々たる天下の有志として、人に知られるやうになつた。殊に、深く交はつて居たのが、勝麟太郎、中島三郎助、武田耕雲齋などいふ、連中であつた。然るに、毛利家に於ても、漸々、時世の必要に迫られ、藩士の中の青年を、養成ふ場所を造らなければならぬ、といふ事になつて、櫻田の藩邸内に、有備館といふものを造つた。文武の二道を、修行させる所て、専ら藩士の青年を



育て、立派な人物を養成らう、といふ仕組で、寄宿舎なども、出来て居た。彌々其計畫も成つて、茲に開館式を擧げ、といふ事になつた。所が、其の館長を置かなければならぬ。夫に就ては、只藩に於て、食祿を多く取つて居る、といふばかりの者では可けない。假令、身分は軽くとも、相當の實力を、有つたものを欲しい。それでなければ、到底取締りが付かぬ、といふ見込みで、夫々に、人選をした結果、桂小五郎が宜からう、といふ事になつた。其處で、藩命を以て、有備館へ来るやうに、といふ沙汰があつた。桂も、他の事とは違つて、藩の青年を養ふ、道場の取締り、とあつては、自ら進んでも行き度い。殊には、藩の方から、望まれて見れば、勿論、之を辭すべきではないが、茲に一つ困つた事は、現今、自分は、齋藤塾に於ての塾頭で、一切の取締りを、先生から任されてある。既う自分は、相當に位置も出来たから、後は何うでも宜い、といふて、其の始末を付けずに立去る、といふ事は、忍びないのである。誰にもせよ、其の後任者を選んで、差支へのないやうにして行かなければならぬ。乃て、心竊に、誰にしたものであらうか、と、門人の中を注意して、見渡す所が、先づ大村藩の渡邊昇に、之を相談すると、

「折角の御推舉ではあるが、實は、息軒先生の門に入つて、今、經書の講義を、聞いて居る最中であるから、塾頭になつて、忙しい身になれば、讀書を廢さなければならぬ。自分としては、甚だ迷惑であるに依つて、此の役は、他の人の方へ、振割つて貰ひたい」と、いふて、荐りに辭退をした。雖然、技倆から言ふても、人物から云ふても、昇の他にはない、と、桂が、見込んだのであるから、何うしても昇に、塾頭を、讓る考へがある。けれども、本人が嫌だ、といへば、何うにもならぬから、桂は、大村藩の邸へ、やつて来て、重役の莊勇雄と、いふ人を説いた。莊は、之を聞いて、藩の譽にもなる事だから、といふので、渡邊を招んで諭して、茲に藩命として、渡邊は、小五郎の後役に入る、といふ事になつたので、桂から齋藤に、此の旨を話した。齋藤親子に於ても、然ういふ理由であるならば、といふ所から、渡邊は塾頭となつて、小五郎は、長州藩へ、歸つたのである。

この渡邊が、後年には、子爵になつて居る。昔を忘れずに、邸内に道場を造つて、竹刀の音を爲せて居た。曾て大阪府知事を勤めて居つたから、大阪には、此人の事を知つて居るものが、老人のうちには、大部ある筈だ。

坂下事件

一

桂は、有備館の取締となつて、藩の青年を、仕立る間に、漸々評判が、良くなつて来る。性來の才氣は、溢れるが如く、物事に就て、臨機の頓智はあるし、技倆は立派なものであるから、有備館の取締としては、實に立派なものであつた。殊に青年を、扱ふ上に於て、極めて氣の利いた、致方をして居た。

其一例は、誰か金を貸してくれ、といふやうな事を、申出た時分に、桂は、二つ返事で、都合をして與へたが、決して其場合に、何ういふ事に、費消か、といふやうな、細かい事は訊ねなかつた。雖然、其借りた人が、約束の日になつて、彌々返金をする、といふ場合には、何ういふ方法で、何うして拵へて来たか、といふやうな事を、根掘り、葉掘り、厳しく訊ねて、苟も其の調金の方法にして、宜しきを得なければ、最初に、金を貸した時の心に背くから、といふので、決して金を受取らなかつた。何でもない事のやうだが、金錢の上に於て、人に對する、仕向が好かつたので、日一日と、桂の評判は、高くなつて来た。従つて、藩の青年が、桂に、服して居た事も、一通りでなかつた。宦に之が、藩士に對するばかりではなく、他藩の若侍とか、或は有志、浪人とか、いふやうなものに對しても、同様の取扱ひをして居たから、毛利の桂、毛利の桂と、いふて、大層な評判であつた。有備館は、天保の初年に、村田清風が献策して、江戸在府の藩士の爲に、新に建設したもので、それから、引續き

藩士の訓育に、努めさせて居たが、實は、その取締も緩んで、内部は、可成り混亂しても居たし、墮弱にも流れて居たので、これが改革をするには、新しい人物を、擧げるに限る、となつて、桂が見出されたのであるが、初めは、桂も、頗る苦んで、改革の緒につく迄は、種々の迫害にも會つたが、漸く其苦境を凌いで、桂の自由になつたのは、半歳の後であつた。

井伊大老が倒された、櫻田の事件があるまでは、未だ幕府の威光は、却々強かつたが、那の事があつてから幕府の威光も衰へて、浪人や有志の鼻息は、日に荒くなるばかりであつた。のみならず、彌々、攘夷、開國、勤王、佐幕の議論は、日を追ふて、盛んになつて来て、何れの藩に於ても、皆派を立て、黨を結んで、互に軋轢するやうになつた。或は、江戸へ出る者もあれば、或は、京都へ上る者もあり、脱藩越國して、浪士の群に飛込んで、詭激な論を吐いて、騒ぎ廻るものが、非常に多くなつて来た。雖然、幕府に於ては、之を鎮壓する事が、出来なかつた。

然うした連中が、江戸へ出掛けて来ると、評判を聞いて、桂を便つて来る。桂は、その連中を、巧に扱らつて、金の仕送りなどを、してやつたから、自分は、毛利の藩士でありながら、隱然、幕府に反對して居る、浪士の首領なるが如く、幕府の方でも、桂に對しては、常に注意を怠らなかつた。井伊大老が倒された結果、幕政の上にも、一大改革が行はれるだらう、といふ事は、一般に豫期して居たのであるが、事件が濟むと、更にそんな様子もなかつた。苟も大老として、幕政を預つて居るほどのものが、白晝往來で、其首を斬られた、といふ事が、有耶無耶の中に濟まされて、彦根家には、何の障りもなかつた、といふやうな状態であるから、何か變化があるだらう、といふ望みを有つて居た、連中としては、頗る不平に堪へない。と同時に、幕府に對しての反感は、日一日と、昂まるばかりであつた。恰度、櫻田事件があつてから、三月経つて、六月下旬となつた。毛利家の丙辰丸といふ船が、品川へ入つて来た。小さい帆船前船ではあるが、其時分の軍艦である。其の艦長をして居たのが、松島剛造といふ人で、毛利藩に於ても、却々家柄も良し、人物も、立派な人であつたし、現今の言葉でいへば、長州藩の海軍總督とも、言ふべき位置に、居

つた人であるが、桂は、松島と親密に、交際して居た所から、互に心の秘密も打明けて、何事に不拘、相談の上で、決するやうに、して居た。

松島は、桂に比べると、知行も多かつたし、役も上であつたから、藩に於ても、勢力の在つた方で、殊には、天下に事を起して見たい、といふ野心があつたので、類に人の心を収める事に、務めて居た。桂の爲人には、松島も、深く打込んで居たから、格別に深く交つて居たのである。

一一

松島と桂が、會見を重ねて居る中に、漸々、相談の進んだのは、何うしても、此の場合に於て、幕府に、一大改革を行はなければならぬ、といふ事になつて、其れを行ふには、表面から、理窟ばかり言つて居たのでは、駄目だ。内部分から、非常手段を、行つて行く必要がある。夫に就ては、水戸の藩士と、連絡を付けて、進んで行くのが、第一である、といふ事になつた。

其時分の儒者で、草場佩川といふ人の養子に、又三といふのがあつて、それが、却々のやりで、幸ひに松島は、又三とは、深い交際があつたから、桂へ、一通の添書を、松島が渡した。桂は、添書を携へて、草場又三を訊ねて、此に又三と、桂の關係が付いた。又三は、却々の過激派であつて、幕府の改革に就ては、頗る進んだ、意見を有て居たのであるから、勿論、桂の相談を、快く承諾して、水戸藩士の、連絡を付ける、といふ事を、引受けた。

文久元年の七月八日、上野廣小路の鳥八十といふ、料理店で、双方會見をする、といふ事になつた。桂は、松島を誘ふて、早くから鳥八十へ来て、對手の来るのを、待受けて居た。今の萬盛庵といふ、蕎麥屋の在る所が、昔の鳥八十の在つた所で、舊幕時代には、却々評判の家であつた。鳥八十といつても鳥鍋なんぞを食はせたのではない。能く浪花節なんぞを、語る人が、上野の戦争などを話すと、鳥八十へ来て、軍鶏鍋を食つて居たなど、莫迦な事を、言

ふものもあるが、家の名前は、鳥八十でも、會席料理であつた。斯うした名物の料理屋が、追々失なるのは、惜い事で、其他にも、松源といふのがあつた。之も現在は、丸萬といふ大阪から出張の、すき焼料理に、なつてしまつた。上野の戦争には、必ず引合に出る、雁鍋も、現今では、世界といふ不味牛肉を賣る、小料理屋になつた。江戸の歴史に關係ある、古い料理屋が、震災後は、殆ど、無くなつたが、何となく心細い氣がする。

此會合に、水戸の方から来たのは、西丸帶刀、岩間金平、園部建吉、越惣太郎といふ、四人であつた。相談の第一が、水戸の隠居烈公と、越前の松平春岳が、井伊大老の爲に幽閉されて、其儘になつて居るから、先づ幕府へ迫つて、兩侯の幽閉を解せ、再び幕政に、參與せしめる、といふ事。第二が、幕府に於て、一番の勢力を有つて居る、大きな役人を倒せば、それが原因となつて、幕府の改革が行はれるだらうから、此二つを實行しよう、といふ事に決して、さて、其大きな幕吏は、誰にするかといふやうな事は、後日の問題として、兎も角、其の一つを實行するといふ事になつて、第一の會見は、終つた。之が桂と、水戸藩の有志との關係が、結合された徑路である。

此會合は、或記録に據ると、廣小路の水茶屋としてあるが、著者は、鳥八十と聞いて居る。併し、鳥八十は、その後の家で、未だ文久の頃には、無かつたといふ説もある、いづれにしても、物語の本筋には大した關係もないが、爲念、斷つて置く。

其時分に、桂の腰巾着のやうになつて、従いて歩いたのが、伊藤俊輔であつた。即ち明治になつてからの公爵博文、此人は、周防國熊毛郡東荷村の出生で、父は林信吉といふ、百姓であつた。桂の周旋で、伊藤直右衛門といふ、足輕の家へ、夫妻養子になつた。其時の連子が、此の俊輔であつて、桂との關係は、夫から付いたのである。然れば、鳥八十の密會の時も、其席に列る事は能なかつたが、隣の座敷に居て、其相談の顛末は、始終聴いて居た。又桂の信用が深かつたから、斯うした大事に就ての秘密も、伊藤には、決して隠さなかつた。といふものは、當時の桂は、自分で奔走する、といふ事は、人の注意を惹いて、却々面倒であるから、多くの場合、伊藤を、秘密の使者として、自

分の代理にして居た。然ういふ事情で、伊藤に對しては、決して物事を隠さず、切て其秘密に、干渉させて居た。鳥八十の會合に依つて、決した約束が、後に歴史の上では、成破同盟といふのだ。一方では、幕府の改革を成遂げ、一方では、暗殺といふ破壊の仕事をするので、之を成破同盟と稱けたものであつた。有名な坂下事件は、是れから起るのである。

二二

伊藤の事蹟に就て、少しく演べて置きたい。桂と伊藤の關係は、却々に深かつた。結局、互ひに仲違ひは、して了つたが、伊藤は、桂を以て、最初の恩人として、永く其の遺族などに對しても、厚意を有て居たのであるから、後に双方共に、明治政府の大官となつてからの關係を、演べる上にも、最初の關係を、演べて置かない、と、其事情が、明らかにならぬから、此場合に於て、伊藤の事を、演べて置きたい、と思ふ。

相模國の海岸に、宮田といふ所があつて、此處は、幕府の所領であるが、當時、外夷が盛んに、入込んで來るので、江戸灣を、圍ふて居る、要所々々には、夫々警備隊を置いて、萬一の場合の、防備があつた。長州藩は、幕府の命に依つて、宮田を、警備する事になつて、藩士を交代させて、詰て居たのだ。

俊輔は、父母に伴はれて、足輕、伊藤の孫にはなつたが、併し足輕を以て、一生を終るのは、残念な次第で、切めては、一人前の武士になりたい、といふ考へがあつた。子供心にも、然うなるには、故國に引込んで居ては無効だといふ事を考へて、折柄、宮田へ、警備に行く者の、年番交代の時が來た、然るに、藩士は、宮田へ年番に行く事を嫌つて居たので、種々な口實や、事情を拵へては、皆逃げにかゝる。自から進んで行く、といふやうなものは少なかつた。之を見て俊輔は、無理矢理に父にせがんで、宮田詰の願ひを出した。藩の役人も、此願書を見て、如何にも殊

勝な至りではあるが、未だ十五に、なつたばかりの子供を、之へ加へる事は出来ないで、大分難かしかつた。そこで俊輔は、無理に十七歳として、元服を済ませ、警備隊の中に、加はる事になつた。幸ひな事には、宮田の警備隊を、取締つて居た人が、桂の妹婿の來原良藏と、いふ人であつた。之が、却々の人物で、安政年間に、英吉利式の訓練を爲た、といふ廉を以て、幕府から、咎めを蒙つたほどの、人であつた。後に、自分の意見が、行はれない事があつて、不平の餘り、遂に自殺をして、實に立派な武士であつた。

俊輔は、國を出る時、桂から、書面を貰つて、宮田へ、乗込んで來た。此人に從いて一年鍛へられた俊輔は、生れ變つたやうに、立派なものになつた、來原は、極めて嚴格な人であるから、俊輔を、一廉の武士にしよう、といふので、嚴重な教育をした。或日、雪の降る晩に、深更なつてから、二里ばかり離れた所へ、買物に行け、といふ事を申付けた。隊長なり、先生なりの、申付であるから、俊輔も、嫌とは言へない。支度をして出掛よう、とすると、

「これ、何をして居る」

「只今、仕度を致して居ります」

「仕度なんぞは、餘計な事だ。一里や二里の所を、仕度なぞ要るものではない。跳足で、行けば可い。笠なぞを被つて行くにも及ばぬ。雪は雨と異つて、拂へば落るものだ」

一事が萬事で、斯うした教へ法をした。白いとも、黒いとも、未だ定らない一青年を、艱難に堪る習慣をつけて、仕立上げたものが、即ち來原であつた。警備の年期が満ちて、引揚げる時に、來原が、手紙を添けてくれた。其の手紙の宛名が、吉田松陰であつた。松陰の門人としては、最も縁遠いものであつたが、存外に、松陰の愛が深かつた。といふものは、來原の引立ての力であつた。後年の伊藤公は、青年の時代に、來原と、吉田に、充分の黨陶を受け、稍長じて、桂の手に從いて働いた。夫が爲めに、那れだけの人物が、大成したのであつた。

人間といふものは、斯うした調子に、進んで行かねば、駄目だ。尤も、斯ういふ事は、心掛けたからといふて、思

ふやうに行くものではなく、それが、人間の運と、いふのであつて、俊輔は、全く運の神に、上げられたのである。來原と松陰は、師父としては、此上もない人物であるが、桂は、先輩として仰ぐに、最も適當な人であつた。足輕の子作が、稻荷さんの隣まで、昇進し得たのは、本人の力量ばかりでなく、運の神の手傳も、あつたのだ。

四

向島の小梅村に、大橋順藏といふ、人があつた。此人は、號を訥庵といふて、其頃、有名な儒者であつたが、抑、大橋家は、宇都宮藩の、儒者の家筋で、順藏は、江戸の人であるが、其處へ、養子に行つたのである。然るに、大橋家には多少の資産があつた、といふ爲めに、順藏が、養子に行つたのを、さも卑しい心からのやうに思はれて、ひどく非難された。殊に、窮屈な頭腦を、持つて居た、儒者の仲間では、殆んど大橋を、人らしく言ふ者がない位に、蔑んで居た。雖然、大橋といふ人は、然ういふ賤しい考へを、持た人でもなく、又、元來が、負ぬ氣の江戸ツ子であるから、様々な蔭口を、されるに憤慨して、却つて自分の方から、其連中とは、往來をしないやうにして、其代り、浪人とか有志とか、いふやうな側の人には、努めて交り結んで居た。非常に、辯舌のよい人で、經書の講義をする場合などは、必ず其の時事の問題を、引例に出して、荐りに幕府を痛罵するのであつた。夫が爲めに、訥庵の講義は、浪士や有志から、頻りに賞美されて、其塾には、浪人や有志の出入りが、日に激しくなつて來た。曾て關邪小言と、元寇紀略といふ、二つの書物を著はしたが、山陽の日本外史ほど、弘く世に行はれず、從つて、人を激勵する力は少かつたが、親しく訥庵について、其講義を聴いた連中や、此書物を見たものは、之が爲めに發憤して、天下の事に當らう、といふ覺悟をした者も、少くなかつた。

殊に、時事問題を捉へて、暗に之を諷して、人心を煽動する、といふ事が、最も巧であつた。現に、萬延元年十一月五日、堀織部正が、安藤對馬守と、殿中で衝突して、後に自殺をした、といふ事件があると、何程もなく、堀の遺書なるものが、世間に傳へられた。之が又、非常な名文で、何んなものでも、之を讀めば、必ず發憤して起つ、といふほどに、立派な文章であつた。元來、堀が自殺に就ては、種々の噂もあるが、實際は、自分が外國奉行として、普魯西國と、條約を結んだ際は、普魯西は、聯邦制度であるから、其の聯邦の名が、並べあつた。之には、堀も氣が付いて、詳しい説明を、求めた後、普魯西の聯邦制度が判つたので、其儘にして、歸つて來ると、安藤對馬守が、之を聞いて、

『普魯西と、條約を結ぶ事は承知したが、其の他の國は、之を認め難い』

といふので、聯邦制度に就て堀は、聞いた通りの説明をしたが、安藤は、之を用ひず、却て、普魯西の使節に殺された、といふので、堀を、非常に叱咤した。其の衝突の結果、堀は憤慨して、遂に腹を切つたが、遺書は、無論なかつたのだ。夫を、訥庵が、巧に筆を舞して、堀の遺書なるものを作つて、世間に流布させた。或は、近世史略であるとか、或は、近世紀聞に、出て居る、堀の遺書なるものはあるが、其實は、訥庵の書いたものだ。其他にも、横濱の岩龜樓といふ、娼妓屋の遊女で、喜遊といふ者が、何か原因は判らないが、自殺をした。之を聞くと、直に其の死因を憶測して、其頃盛んに、横濱へ入り込んだ、亞米利加人が、喜遊を、金の力で、自由にしよう、としたのを、喜遊が、憤慨して死んだ、といふやうに、話の徑路を拵へて、

露をたにいと大和の女郎花

ふるアメリカに袖は濡さし

といふ、歌までも代作して、之を世間に觸らせて、醜業をして居る遊女ですら、日本の人間である以上は、此通り敵愾心がある、といふ事を告げて、有志や浪人を、激勵したものである。何れの時代にも、斯ういふ風に、煽動の名人は、あるものだが、大橋の如く、一本の筆で、巧に人を動かしたものは、澤山なかつた。

この人は、後日に、牢死して了つたが、『刑死累々鬼火青、枕頭時覺北風腥、婆心憂世夜難睡、起自窓端一見大

星」といふ詩は、入牢中の作であつた。

五

安藤對馬守は、磐城平で、五萬石内外の領地を、有つて居た、小さい大名であつたが、人物としては、實にすぐれて居た。世間では、大老の井伊掃部頭を、開國主義の御先祖の如く崇拜して、甚く有難がつて居るが、前回にも演べた通り、井伊は、其様に、立派な見識を、有つて居た人ではない。實は餘儀なくせられて、條約に調印した迄の事だが、幸ひに、夫が、天下の問題となつて、ひどい争ひが起きたから、騎虎の勢ひ、何うしても、調印をした面目を、完うしなければならぬ、といふ爲めに、開國論といふ事に、傾いて來たのであるが、最初から、開國を以て、我國是の如く考へて、其議論の下に、所信を斷行した、といふが如き事は、なかつたのである。人物としては、却て對馬守の方が、一枚上であつたかも知れない。其れは、井伊が、横死を遂げた、後仕末を附けた、一條と言ひ、又、井伊無き後は、自から幕府の内閣に立つて、老中の一人として、外交上に盡した、実績を調べて見ると、對馬守は、偉かつたやうに、思はれる。

殊に、其の時代が、最も攘夷の盛んな時であつた、殆んど攘夷は、國の輿論の如くになつて、攘夷を唱へぬものは、人間でないやうにまで言はれた、時代であつた。其際に、對馬守が、外國公使を御馳走して、往來を頻繁にした、といふ事が、攘夷黨の御機嫌を損じて、對馬守に對する非難は、一日と、昂まつて來た。折も折とて、英國公使のオールコックを、自分の役宅へ招いて、馳走した事がある。之が問題になつて、様々な風説が、其間に行はれた。殊に甚だしいのは、オールコックの歡心を、求める爲めに、美人をして、其の枕席に侍せしめた、といふやうな、噂が立てられ、對馬守を國賊の如く、思ふ者が、多くなつて來た。訥庵は、其際にも又、門下生を集め、交際をして居る、有志や浪人を集めては、經書の講義に事寄せて、悲憤の涙を拂ひつゝ、攘夷の精神を吹込み、對馬守に向つて、痛罵

を加へた。夫が漸々、右から左に傳へられて、攘夷黨の間に、殺氣が、充滿て來た。

斯くて、文久元年の夏も過ぎて、秋風の吹く頃になつてから、既う議論の季節は、通り越して、實行の時季に入つて來た。昔から、十人十種といふ、諺にある通り、如何なる事に就ても、各自に、其の意見が、多少は異ふものであるが、併し、既う議論をして居る時ではなく、實行に入る可き時である、といふ事だけは、皆同じであつた。大橋塾に、出入をする者の計畫は、第一の策が、上野の宮様を擁して、攘夷の旗上げをする、といふのであつた。其の味方には、上州、野州の博徒を符集め、浪人をして、之を指揮させる、といふのであつた。第二の策は、一橋慶喜を擁して、攘夷の旗上げをする、といふので、博徒などの力を借りず、假令、小人數でも宜いから、浪人の力に倚る、といふのであつた。第三の策は、單に安藤對馬守を殺して、幕府の改革を計るのが、上策である、といふのであつた。此三策に對して、人各々、見解が異ふから、其の活動に就ては、各自に、勝手な事を、やつて居たが、併し、夫は悉く、秘密を守つて、企てた事であつたが、其仲間の中に、宇野東櫻と、いふものがあつて、之が實は、幕府の密偵であつた爲めに、東櫻の口から、筒抜けに計畫が、奉行の耳に入つて居た。之が聽て、訥庵が捕へられて、牢死するといふ原因に、なるのである。

此の計畫に對しては、桂小五郎の關係は、なかつた。第三策の對馬守を暗殺して、幕府の改革を計るといふ一事は、夫等の連中に關係なく、桂の方では、獨立して、豫て計畫をして居たのであつた。然るに、大橋塾の計畫と言ひ、其他、同じやうな事が、ちよいと耳に入るから、乃て、桂は、窃に考へて、これは、永く實行せずに、思案をして居ると、遂には事を行ふ事が、出来なくなる而已ならず、甚い破綻を來すであらうから、一刻も早く、實行するに限る、といふ、考へを起して、その手順を付るに就て、幕府の内情を、漸々、探る事になつて、手を盡して見ると、迎も可けない。桂の耳に、種々の風説が、入る如く、幕府の耳には、もつと大きくなつて、聞えて居るから、其警戒は一通りでなかつた。怒しい手を出すと、却て失敗をする基である、といふ事に、氣が注いたので、甚だ遺憾ではあるが、

此際の實行は、一時、見合せる方が宜い、といふ考へに、なつた。

「俊輔、居るか」

次の間から、伊藤俊輔が、出て来た。

「何ぞ御用で、御座りますか」

「應、御苦勞ぢやが、使に行つて貰ひたい」

「何ういふ御用で、御座りますか」

「例の岩間の所へ、行つて貰ひたいのぢや」

「はア、岩間へ、何と傳へますか」

桂は、膝を進めて、聲をひそめた。

「そりや、他でもないが、例の一條ぢや」

「對馬守の一條で、御座いますか」

「然うぢや」

「夫を何となさらう、と、いふのですか」

「實は、近く實行をしよう、と思ふたが、汝も、知つて居る通り、各所で種々な計畫があるが爲めに、自然と、夫が耳に入つて、幕府でも、今では大分、厳しく警戒して居るやうぢやから、此の場合に、事を起す、といふのは、却つて面白くあるまい、と思ふ。依つて、岩間に會ふて、餘り事を急がぬやうに、殊に、此際は中止をするやうに、といふ事を、傳へて貰ひたいのぢや」

「承知いたしました」

「夫ぢや、之から直ぐ、行つて貰ひたい」

「はい」

俊輔は、桂の命を受けて、有備館を出た。

此岩間といふのは、名を金平といふて、仍且、水戸浪士の一人であつた。當時、其一系列の首領株たる、西丸帯刀といふ人が、水戸へ歸つて居た。其留守中は、岩間が、萬事を引受けて居るのだから、この人に、其通知をすれば宜い、といふので、桂は、俊輔に申付けたのであつた。俊輔は、岩間に會ふて、桂から、申付けられた事を傳へた。於是、岩間も、其儘に捨て置く事が出来ない。といふのは、對馬守を討つのは、來年の正月十五日に、略定まつて居たのであるから、早く其事を、西丸に通知しないと、事が齟齬するから、岩間は、直に其日の内に、江戸を出發して、水戸へ、急いで行く事になつた。

六

西丸帯刀は、水戸から、少し離れて、海岸に近い、大津といふ所に、小さい家を借りて、身體の調子が悪いので、養生勞々、夫に住んで居た。其所へ、同志の一人たる、岩間が突然、訪ねて來たので、西丸は、意外の思ひをして、突然の來來、驚ろき入つた。何か變つた事でもあつたか

「いや、別に變つた、といふ程の事でもないが、些と取急いで、話をしよう、と思ふて參つた」

「うむ、何ういふ事か」

岩間は、聲をひそめて、

「實は桂先生からの使ひぢや」

「何ういふ事か」

「幕府の用心が、餘りに嚴重であるから、例の一條は、一時延すやうに致したい、といふ事で御座つた。拙者の計らひにも參らぬで、一應貴下にも、御相談をする事に致さう、と、桂先生には、答へて置いたが、何としたものであらうか」

西丸は、苦い顔をして、

「之は、驚ろき入つた。桂先生ともあらうお方が、何といふ弱い音を、吐いたものぢや、幕府の用心が嚴重といふが、そりや、最初から覺悟の上で、嚴重の用心を破つて、事を成し遂げる。其所に、武士の價值が、あるのぢやないか」

「夫ては、飽までも事を遂げよう、と、いはつしやるのか」

「言ふまでもない、一旦幾日と、定た事を、武士たる者が、今更に止るる、といふ、譯には可かぬ。殊に、斯ういふ事は、その定た時を早める、といふ事は差支へないが、却て延すといふのは、折角の覺悟を、緩める事にもなるので、害こそあれ利は無い、まア兎に角、拙者が、出府する事にするから、お手前は、一足先に參つて、桂先生へ、程の宜い挨拶をして、置いて貰ひたい」

岩間も、同じやうな考へを、有つて居たのであるから、西丸に、斯ういはれて見れば、無論、夫に違ひない、といふ心になつて、直に江戸へ、歸つて来て、有備館に、桂を訪ねた。桂は岩間から、西丸の意見を、聞いて見れば、如何にも男らしい。又武士らしい、良い覺悟であつて、遠く離れて居て、之を押へる事は、難かしいのであるから、兎に角、西丸が、出て来るのを、待つての上でなければ、いづれとも、事を決める譯にはゆかぬと考へて爰暫時は、成行に任せる事にした。

所が、茲に意外の事件が、持上つた。例の大橋訥庵が、明けて、文久二年正月十二日、何とも判らず、奉行所へ引立てられた事である。大橋と往來して居た、浪人有志の間には、之が非常な問題となつた。今も、昔も、夫に變り

はないが、凡そ斯ういふ風の人が、拘引される時は、何の事か、殆んど其の真相が、判らないものだ。亦引いて行く方でも、極めて秘密にして、連れて行つて、其真相の判るまでには、種々様々の風説が起つて、夫が爲めに、過激な意見を、有て居たものが、却て其れに刺撃されて、不穩の所爲を探る、といふ事は、何うも免がれぬものだ。

西丸は、其前に、江戸へ、出て來たが、頻りに桂と往復して、意見を鬨はした。西丸は、飽返も實行説であつたが、桂は、其の反對に、中止説を、唱へて居た。其の押合をして居る中に、大橋の事件が起きたので、夫に刺撃をされて

西丸は、事茲に及んでは、一刻も猶豫はならぬ。心變りのして居る桂に、相談をして居るまでもないから、自分共は豫て打合せをしてある、同志と共に、事を行ふの他はない、といふ決心になつて、竊に對馬守を、途上に要撃するといふ事が、茲に決したのである。切べて、暗殺や謀叛といふものは、斯ういふ動機から、急がれるもので、又斯うした、動機に依つて、計畫を早めたものが、巧く事を仕遂げた、例は少い。つまり、行き掛りといふやうな事は、斯うした場合に、言ふ言葉であつて、男らしい、決心を有つて居るものは、此場合になれば、成否といふ事を、考へて居る暇も、ないものだ。其所に亦、男の價值があるので、何うも、致し方がない。

安藤老中の生命は、まさに風前の殘燈にも均しい。斯くて、實行の期は、刻々に迫つて來た。さア雨が降るか、風が吹くか。

七

暗殺が、良くない事は、今更言ふまでもなく、如何なる場合でも、人を暗殺にして良い、といふ譯はない。雖然、政治の意味を有て、暗殺にするのは、一種の革命であつて、其事が、假し、一人と一人の、人の上に、行はれる事にもせよ、其目的が、政治の改革にある、といふ以上は、暗殺も又、革命の一部である、といふ事を、認めなければならぬ。先年、櫻田義學録の事に就て、嚴しい議論が起つて、教育家の間にも、可なり激論があつたけれど、櫻田事件



の頼末は、既に知れ渡つて居る通りで、井伊大老を倒した、水戸浪士の所業を以て、單に罪惡とのみ、觀る事は出来ない。其の爲した行ひが、或は過激に失したかも知れないが、其の心事は、皎々として、雪の如きものがある。當時の世相と、事件の内容から、考へて見て、無上の權利を有て居る、政治家に對しては那の手段に訴へる外に、其の覺醒を求めずは能なかつたから、於て、是、櫻田門外の雪を、赤く染たのである。其の事績を、書いた書物を、學校の生徒に讀ませる、といふ事は、暗に暗殺を獎勵するのである、といふやうな、狭い見解を有て、夫を非難する事は、甚だ面白くない、と思つた。然ういふ議論をせんで、讀まして置いたならば、暗殺の獎勵にならずして、自然派の文學を弄んで、淫靡な風俗に、囚はれやう、とする青年の心を武士らしく、又雄々しいものに仕立直す、といふ事は出来たかも知れぬが、變な理窟を、いつた爲めに、却て暗殺を、思ひ起させる、といふ結果になつた、かも知れない。安藤對馬守を、邀撃する事件も、それと同じで決して暗殺を、獎勵するの意味ではない。又今の時代に於ては、政治とか、外交とか、いふやうな事で、國の前途を憂ひて、萬民の爲めに計る、といふものは、敢て然うした、非常手段に訴へずとも、他に穩かな手段を以て、爲す事が出来るのであるから、敢て非常手段を執るにも、及ばぬ。只過去た歴史の物語といふものは、其時代の社會状態を、知るといふ事だけのもので、夫を知るといふ事が、現代の人の一つの知識になるのである、といふ位に考へて、解釋を止めて置けば、差支へない、と思ふ。

文久二年正月十五日の事であつた。當時の老中として、飛鳥を落す勢ひのある、安藤對馬守が、今や、行列を揃へて、坂下見附の前まで、やつて來た。今日の大巨と、同じ格式のものであるが、其時代には、出入に綺羅を飾り、行列の物々しい點に於ては、今の大巨などの、進も及ぶ所ではない。對馬守は、殊に老中上席で、其の權威は、素晴らしいものであつたから、従つて、行列の如きも、堂々たるものであつた。

『エイホー、寄れツ、エイホー、寄れツ』

と、制止の聲も勇ましく、今、見附へ入らうとした。刹那に、石垣の蔭から、一人の武士が、飛出した。オヤツと、思つて居ると、續いて四五人、バラ／＼と、駕を目蒐けて、駈寄つた。之を見るより、安藤の家來は、擬こそ狼藉者と、立騒ぐ中に、彼の武士は、各自、身輕の支度で、拔連れ、駕を目蒐て、切つて掛る。安藤の家來も、茲ぞ主人の一大事と、必死に防戦したが、不意を打たれたので、一時は、斬立てられて、駕脇は、人少になつた。其の透に、付け入つた、一人の浪士は、血刀を振つて、駕に迫つた。了得に、安藤は不意の襲撃を受け乍ら、然までに慌てた態度もなく、徐に駕を出た所を、駈付けた、武士が、鋭ツと喚いて、切付ける。安藤は引外したが、切先で、二の腕を傷けられた。猶ほ踏込んで、斬かけて來た時に、安藤は、腰に差して居た、殿中扇を以て、斬下して來る刀を、横に拂つた。

『無禮者ツ』

と、一喝加へたが、猶も必死に、斯込んで來る。安藤の一身は、危き事、風前の燈火に似たり、遙かに之を見て、安藤の家臣は、疾風の如く、駈付けて來て、彼の武士を、後袈裟に一刀、斬付けた。双物の切味か、亦は手練の早技か、憐れ、浪士は二つになつて、倒れた。

今は、双方、入亂れての斬合になつた。けれども、何分にも、浪士の方は、小人數であつたし、其れに櫻田の時と異つて、雪も降らず、安藤の方に、充分の用意はあつたし、旁、浪士は、力盡きて、遂に其場に、悉く斬死して死つた。

其の浪士といふのは、水府藩の平山兵助(細谷忠齋)、常陸國那珂郡の人で黒澤五郎、同じく久慈郡の高島宗次(會田仙之丞)越後の人で河本宗太郎(豊原邦之助)、野州の産、河野顯藏(三島三平)の五人であつた。

坂下事件は、伊藤博文傳にも、詳述して置いたが、茲に再説する事にした。同じ事を、くり返すやうにはなるが、少しづつ、異つた點はある。本筋には、更に變りはないが、叙述の方法に、多少の變りはある。

双方を、對照し乍ら、讀んで下されば、一層明かになる、と思ふ。

八

櫻田事件は、幕末史の上でも、有名な事件として、世に傳へられて居るし、研究もされて居るやうであるが、坂下事件の方は、餘り廣く傳はつて居らぬ。櫻田事件の方では、兎に角、井伊大老の首が、飛んで居るし、襲撃の當日が、那の大雪であつた、といふやうな事が、甚く世人の注意を、惹く狀況に、なつて居たのだ。坂下事件の方は、安藤も死んで居らぬし、斬つて掛つた方が、却て其場で、皆死んだのであるから、自然、世間への響きも、弱かつた。夫等の關係から、餘り人の注意が、此の事件には、深くなかつたのであらう。

井伊は、條約に調印をした、といふ事と、安政の疑獄を起した、といふだけの事であるが、安藤には、井伊の調印した、後を引受けて、條約の實行を、着々運んだ、といふ、立派な実績がある。従つて、攘夷黨の方から見れば、井伊よりは、安藤に對する、反感の方が、深くなければならなかつた。安藤は、夫と知りながら、開國條約の實施に就て、手順を運んで行つた、といふ點から考へても、立派な人である。襲撃された當日、身に數ヶ所の傷を受けながら、敢て狼狽した、といふ風もなく、見附の見張所へ行つて、自から傷の手當を了り、幕府への届書を認めて、徐に邸へ引揚げた。其前後の行動などは、實に堂々たるものであつた。其他、皇妹和宮様を、將軍の御臺所に、お迎へをする事に就ても、主として關東では、安藤が盡力したのであつた。之などにも随分、甚い反對があつたが、夫を排斥して、兎に角、朝廷を動かして、遂に其の考へ通りに、事を運んだ安藤は當時に於て、有數の政治家であつた、といふ事は確にいひ得る。

話頭一轉、窪小五郎は、坂下凶變の日は、早朝から、有備館の道場に出て、門人を對手に、稽古を勵み、一汗か

て、休息して居た。所へ、後れて來た、門人が、頻りに坂下見附の凶變を、語つて居るので、桂は、之を小耳に披んで、胸に思ひ當る事もあるから、其門人を招んだ。

「只今、聞いて居つたが、坂下見附で、何かあつたといふが、そりや、何ういふ事だ」

「いや、先生、實にえらい事でございます。恰度坂下見附へ掛りますと、斬合の濟んだ後で御座いまして、御老中の安藤對馬守殿へ、浪士の一群が、斬掛けたのださうで、精しい事は判らないですが、斬掛けた浪人は、水戸の藩士ださうで御座います。先年の櫻田事件と言ひ、又今日の事と言ひ、世の中は、騒がしくなつて、参りました」

「フ、ム、其様事があつたのか」

「はい」

「而て對馬守殿は何うなつたか、聞かなかつたかな」

「了得に御老中だけあつて、偉いもんです。幾ヶ所の傷は負ふたやうですが、悠々として、更に迫らず、見張所へ入つて、自から傷の手當をして、引揚げたといふ事でございますが、平生の心掛けも思はれて、實に恐れ入つた次第でございます」

「成程、夫は然うとして、狼藉を働いた浪士は、大約何人ばかりであつたか」

「聞く所に依ると、五人とか六人とかいふ事で御座いますが、其の場を去つたものは一人もなく、悉く斬死をしたさうで、御座います」

「泰平の世の中に、要らざる腕立をしたものであるが、併し、然ういふ事が、折節あるといふのも、未だ全然、武士道は、地に墮て居らないのだな」

「大いに御道理で御座います」

門人を對手に、坂下の凶變を聞いたが、詰りは、以上の事は判らなかつた。桂の胸には、例の西丸一派が行つたものだ、といふ事は、早くも覺つたが、孰れにしても、打捨置く事は出来ない。兎に角、其善後の策も講じなければならぬ、といふ考へて、晝食を早めて、支度を調べ、之から邸を出ようとした所へ、館の世話役の奥平數馬といふ人が見えて、

「先生、只今、内田萬之助と、仰せられる御方が、おいでになりました、是非に御面會を申したい、といふて居ります、如何致しませう」

「何ッ、内田萬之助……」

「はい」

「ふーむ」  
思はず桂は、腕を拱み、小首を傾けて考へた。其筈である。内田は、本名を河邊治左衛門といふて、水戸浪士の一人で、豫て安藤襲撃の徒黨の一人である、といふ事は、桂も、豫て心得て居たから、時も時とて、内田の來訪には、鳥渡驚いたのである。

九

有備館は、武術の稽古を專一として、建られた道場であるから、普通の邸の如く、客を接待すべき、座敷は無かつた。殊に、内田の來訪に就ては、無論、秘密を要する事は、判つて居るので、幸ひ正午限りで、稽古も終つて、門人は、邸へ歸るもあれば、寄宿部屋へ入るものもあつて、道場は綺麗に、掃除が出来た所であつた。桂は、先づ道場へ入つて、内田の來るのを、待受けて居ると、奥平の案内に依つて、内田は、入つて來た。双方ともに、寒暖の挨拶も一通り済んだ。平生の痛快な、氣性に似ず、今日の内田は、最と濕り勝に、何となく意氣も、銷沈んで見える。桂は

膝を進めて、

「さて、内田氏、今朝、坂下見附の凶變は、かね／＼のお覺悟とは言ひながら、誠に残念な事で、今更、云ふて返らぬ事では御座るが、自分より、西丸氏を通じて、お止め致した節に、自分の意見を、御用ひ下されば、宜かつたのぢやが、夫も今は後の祭で、止むを得ぬ。而て、お手前は、如何して此所へ、見えられたのか」

「桂先生、手前は武士として、人に面を合せる事の能ぬ、甚し失策を致しました」

「うむ、そりや、何ういふ次第か」  
「實は、今朝の事變に、手前も走せ參すべき、豫ての約束で御座りました。然るに、時を取違へて、一足後れたばかりに、既に事の果た後に、駆けつたので御座る。今更に、先立し同志の人に對して、面目次第もなく、人に訊かれても、申譯の御座らぬ、卑怯の沙汰、萬之助、一生の不覺で、御座つたよ」

如何にも、大切の場合に後れて、現場に間に合はなかつた、といふ事を、心から恥入るが如く、萬之助の容姿は、悄然として、顔の色さへ、變つて居るのを、見ると、桂は、却て同情せずには、居られなかつた。

「夫で、様子は判つたが、時が後れて、其場に間に合はぬ、といふ事は、必ずしも、足下が、卑怯であるからとも、言へまい。又、先立し同志の人々も、平生の足下を知る以上、豈夫に、草葉の蔭で、笑ひもすまい。殊に、時こそ後れたれ、現場へ駆付けた事は、約束を疎かに爲ぬといふ、證據にもなる。足下の潔白は、誰も知つて居るから、左様な心配なさるにも、及ぶまい」

桂は、言葉盡して、慰めたが、内田は只考へに沈むばかりであつた。折柄、其處へ、足音烈しく、入つて來たものがある。夫は、伊藤俊輔であつた。

伊藤は、昨夜から出かけて、今、歸つて來たばかりであるから、事情は、少しも知らなかつた。水府藩士の内田が、柱に會つて居ると、いふから、豫て自分も、知り合の間ではあるし、秘密といふても、其の秘密には、自分も十涉つ

て居るのであるから、遠慮もなく、道場へ入らうとしたら、仔細あり氣に、桂が立つて来る様子であるから、廊下へ退いて、待つて居る所へ、桂が出て来て、無言に魔くので、其爲すに任せて、別室に躡いて来た。

「先生、内田が、来て居るやうですな」

「うむ、今、來居つたのぢや」

「何ういふ事ですか」

「いや、今日の坂下見附の一條ぢや」

「えつ、坂下見附の一條とは、何事で御座りますか」

「おう、汝は、まだ知らぬのか」

「一向に存せぬが、何で御座りますか」

其の頃には、新聞もなく、電話もなく、不意の出來事を、一般に知らせる、といふ、機關は備はつて居なかつたら、伊藤は、未だ其事變を、少しも知らなかつたのである。桂は、一通り事變の顛末を、物語つて聞かせた。

「夫に就て、内田が參つて、今云々の話ぢや。那の儘に捨て置いては、内田が、自殺でもするやうな事が、あつてはならぬ。物の役に立つべき、人物でもある。大切の場所へ、時が後れて、間に合はなかつた、といふ事を、那れ

までに恥かしかる、といふ、其心根が、如何にも殊勝らしい。何とかして一時、彼を救ふ事を考へなければならぬが、汝は、殊に内田とは、馴染でもあるし、旁、内田も又、拙者に言へぬ事も、汝には話しも爲宜いであらうから、拙者が、外出をした後で、緩くり對座で、内田の心底をも聞き、短氣を出さぬやう、意見を加へて貰ひたい、と思ふが、何うちやうか」

「そりや、何よりの事で、自分も、勤められるだけ勤めますから、御安心下さい」と、話をして居る折柄、さつといふ、水を打つたやうな、音が聞える、と同時に、ウームといふ、呻きの聲、之はと

膝を打ちながら、立上つた桂、續いて伊藤も、冠音荒く、以前の處へ、來て見ると、隣れ、萬之助は、腹一文字に掻切り、返す刀で、首筋を、右から左へ貫ぬき、前に倒れて、虫の息になつて居た。思はず桂は、太息を吐いて、其處へ坐つたぎり、何の辭も出なかつた。伊藤は、早くも引起して見たが、既う呼吸は切れて居た。血汐に染んだ、一通の書面があるから、取上げて見ると、桂への遺書である。其文面に依れば、「御意見に基かずして、此場に於て、切腹を致したのは相濟まぬが、之も武士の意氣地、地下に先立つ同志に、申譯の一分を立てるまでの事、夫に就て、只一つの心残り、當年三歳になる、幼兒を、家に残してあるから、自分の死後、此幼兒の身を、偏にお願ひ申す」といふ意味の事を認めて、十五兩の金が添へてあつた。了得の二人は之を見て、思はず涙に暮れた。

一〇

桂は、危険分子として、幕府が、最も注意して居たのであるから、苟も安藤老中を襲撃した、仲間の一人たる、内田が、斯うした最期を、遂げて居るばかりでなく、其の場所が、毛利藩邸の中の、桂が預つて居る、有備館の道場である、といふに至つては、如何に秘密にしたればとて、早晚、公儀の耳へ、入るに違ひない。秘すれば秘するほど、其の嫌疑が、深くなる、といふて、之を公表にすれば、直ちに嫌疑が、掛つて来る。之には了得の才物、桂も、頗ぶる困つたが、若し無届けにして、疑ひを受ければ、毛利の御家にも、障る事になるから、寧ろ男らしく、届け出て、検視を受ける事にしよう、となつた。

桂からの、届書を見て、藩の重役の驚きは、一通りでなかつた。幸ひにして、周布政之助が、江戸詰になつて居たのが、桂の爲めには、極めて都合であつた。政之助は、後に京都九門の戦争に就て、責を引て切腹したが、頗ぶる人物であつた。重役に於ても、今は如何とも、致し様がないので、早速、幕府へ、届け出した。翌十六日には、検視の役目として、御徒士目付の田中幸太郎、梁瀬大一郎の二人が、出張する事になつた。然るに、萬之助の、自殺の

状況が美事であつたので、流石の、検視の役人も、感服をした、といふ事である。

「恐れながら、お役方へ、願ひまする」

役人は、振返つて見ると、夫は桂であつた。

「何事御座るか」

「御検視滞りなく、相済みました上からは、屍骸取片付けの儀は、特別のお慈悲を以て、御許しのほどを、願ひ上げまする」

「いや、そりや、成らぬ」

「何故、相成りませぬか」

「公儀に於ても、大切の罪人と見る。其屍骸は、此儘に渡す事は、相成らぬ」

「御道理には御座りまするが、切めて、死骸取片付けの儀は、自分共に於て、致し度く存じまする故、強て御願ひを致す次第に御座りまする」

「黙らつしやい。此儀に就ては、足下も、取調べを受ける、身分で御座るぞ。夫に何ぞや、死骸取片付けを願ふなぞとは、以ての外である。些と憤んだが、宜からう」

役目を笠に、叱り付けた。桂も、多少の理窟はあるが、夫を言ふては、事が治まらぬ。止むを得ず、其儘に黙つて了つた。検視の済んだ後は、有備館の一室に、同志の者が、追々と走せ集まり、門人も来て、之から何うしたものであらう、と、漸々、相談に及んだが、何とも致し様がない。兎に角、桂は、奉行所に呼上られるに違ひないから、奉行所へ出てから、充分に申開きを立つて、罪を遁がれる他はないのである。夫に就て、何としたら宜からう、といふのが、相談の眼目であつた。時に、伊藤が、席を進んで、  
「甚だ差出がましい儀で御座りまするが、萬一、奉行所より、呼出しの御座つた場合には、拙者を、御同道下さるや

うに願ひたい」

桂は、莞爾笑ひながら、

「汝が同道して、何としよう、といふのか」

「別に之といふ、仔細も御座りませぬが、自分が、心得ました丈の事を申述べて、先生の爲めに、飽くまでも申開きを致します所存、若し萬一に、其の申開きの立ちませぬ場合には、私の一身に代へても、必ず先生だけは、お救ひ申しまする」

最前から、二人の間答を、聽いて居た人々の中には、伊藤の出身が賤しいから、といふので、何となく輕蔑の心をもつて、見て居たものもあるのだ。雖然、男らしい立派な、其一言を聽いては、今まで蔑んで居た心が、羞かしく、假し、事の成行は何うならうとも、健氣なる俊輔の一言には、感心する外はない。桂が、心嬉しく思つたのは、固より言ふまでも、ない事だ。

後日に思合されるのが、此の事件は、桂の爲めには大難であつたが、伊藤の身には、此の上もない、幸福な事件であつた。伊藤の名は、此事件から、他に知られて來たのである。

一一

當時の伊藤は、實に果敢ない身分の者で、一人前の武士としては、通用しなかつたのである。未だ其頃は、人間の階級が、厳しく立てられて居た時代であるから、同じ大小を帯して居る者の内にも、御目見得以上と、御目見得以下の區別は、甚だしかつたものだ。俊輔の先祖は、假し相當の武家であつたにもせよ、生れた家は百姓であるから、何所までも百姓の子として、他から見られて居た。夫が偶々、足輕の養子になつて、其親の庇蔭で、武家奉公はするやうに、なつたものゝ、夫にしても、多寡が足輕だから、甚だ心細い身分でつた。然るに、俊輔は、子供乍らも、其の

位置に、甘んずる事が能なかつた。却て身分の低い、といふ事が、本人の刺激にもなり、旁、非常に憤憤した爲めに、自から進んで、國事の爲めに奔走したので、夫が爲めに、士分に取立てられた。然し、士分になつたから、と言ふても勿論、御目見得以上では無いのだから、唯足輕の部を脱して、士の部に入つた、といふだけの事で、未だ却々人中へ出て、巾が利く、といふやうな譯では、なかつた。今の世に育つた人は、餘り然ういふ事は知るまいが、武家時代の御目見得以上とか、以下とかいふ間の隔たりは、非常なものであつた。何程に隔つて居たか、といふ事を、醫て見れば、御目見得以下の者が、城下の町などを、ブラ／＼歩いて居る時分に、殿様が、お忍びでおいでに、なるやうな事がある。然ういふ時には路次なり、横丁なりへ入つて、御目に止まる事を、避けなければならぬ事に、なつて居たのだ。雖然、其逃場が、なかつた時には、何うするかといふに、其時には、已むを得ないから、何所の軒先へても入つて、往來の方へ、尻を向け、頭を軒下に入れて、平伏をして居る、と、殿様は、其前をサツサと、通つて了ふ。今の人に言はせると、如何にも變な譯で、殿様に尻を向ける、といふのは、失禮のやうであるが、此の場合には、頭がないのであるから、殿様の方から見れば、之は只、肉の塊がある、と見る他はないのだ。人間の一番に大切なものが、此の頭腦であつて、好い男だとか、醜い女だとか、いふ事も、事柄の善悪を判断するのも、頭腦から出るのであつて、即ち人間の賢愚不肖は、其の頭腦が基で、區別をされるのだ。是程大切なものは、人間の身體のうち、無いのである。其の頭が無い、尻ばかりだから、人間としては、三文の價もない。只一塊の肉の凝固と見るのが、當然である。御目見得以下の武士は、大小こそ帯して居ても、斯様に果敢ないものであつた。

俊輔は、未だ其時代には、此の境遇を、脱する事が能なかつた。夫が、明治になると、或は總理大臣にもなつたり貴族院議長にもなつたり、或は樞密院議長になるとか、朝鮮の統監になるとか、實に大層な出世で、肩書には、公爵従一位と書かれた。遂に哈爾濱の露と、消えて了つたのであるが、人間の出世といふものほど、測り難いものはない。然し、之れは本人の運不運でもあつたらうが、第一が努力である。努力奮闘の結果は、實に恐ろしいもので、俊輔の

一例に見ても、能く判る。

桂は、奉行所の召喚に應じて、伊藤と共に、出頭した。事件の係りは、北町奉行黒川備中守であつた。此の人は、其時代でいふと、多く國事に關する方を、手掛けて居た人で、一般の裁判もするが、國事の方は大概、此の黒川の手に依つて、裁判して居たものである。却々人物も好かつたし、裁判も巧手だ、といふ、評判の高かつた人である。桂は其人の取調べを、受ける事になつたのであるが、桂の身に取つては、實に浮沈の瀬戸際で、今日の辯疏が拙ければ自分の一生を、犠牲にしてはななければならぬのであるから、桂の一生懸命は言ふまでもなく、従いて來た、伊藤の覺悟は、非常なものであつた。

# 長井雅樂と木戸

一

裁判の問答は、一切省く事にするが、兎に角、最初の裁判に對して、桂の管辯も巧であつたが、また、伊藤の證言が、如何にも上手に出來て、伊藤の位置は、今日の事にして、いふて見ると、辯護人と證人を、兼帯にしたやうなもので、年齒こそ、未だ廿歳を出たばかりであつたが、兎に角、町奉行を、先方へ廻して、桂の爲めに、有利な辯疏を爲し得たのは、慥に其の才智も、尋常でなかつた、といふ事は、其頃からであつた。

事件が普通の事件とは異ふし、桂は、兎に角として、其の主人の、毛利家へ對する、幾分の遠慮もあつた。其上、本人等の辯疏が巧であつたから、勢ひ之を留置めると、いふ事は出來なかつた。其の日は一時、藩邸へ、歸る事を許された。然し、藩邸へ對しては、事件の落着まで、桂を預け置く、といふ事になつて、藩邸の重役からは、奉行所へ對して、本人預りの受書を出した。之は今日ていふ、責付といふが如きものであつた。斯ういふ次第で、二度三度と漸々訊問が重なつて行くうちに、元來、桂が煽動して、やらした事に違ひないので、奉行の方には、夫に就て、種々の證據も、押へて居るので、却々、事件は手輕に濟みさうもない。桂は、一日と、危くなるばかりであつた。桂の平生が好かつたので、同志や門人の間にも、評判が良く、又、藩士の間にも、極く受の好かつた人であるから、其事件に就ても、却々同情は深かつた。伊藤は、奉行所へ同道して、漸々、狀況を見るのに、どうも危ないやうな氣がして、ならなかつた。恰度、其時分に、故國から、やつて來たのが、志路開多であつた。伊藤とは、殊に親密に、交はつて居たから、志路に相談して見ようといふ氣になつて、先づ志路を、訪ねたのである。

「やア、伊藤か、何うした」

「何うも、弱つたよ」

「うむ、坂下事件か」

「然うだ、桂先生は、少し難かしさうぢや」

「志路は思はず膝をすゝめた。」

「何ッ、桂が難かしい、といふのか」

「うむ、奉行の態度を見るのに、無事では濟みさうもない」

「そりや、困つたな」

「乃て、汝を、訪ねて來たのぢやが、何とか工夫はなからうか」

「然うだな、こりや却々難かしいぞ。然し、桂の身の上に、萬一の事でもあると、一大事ぢやから、何とかせずばなるまい」

頻りに二人で、相談して居る所へ、訪ねて來たのが、野村和作であつた。

「やア野村か」

「伊藤も、來て居つたか」

「まア、宜い所ぢや。此所へ入れ」

「何事か、秘密の相談か」

「いや、秘密には違ひないが、汝には、秘密にする必要はないのぢや。宜い所へ來た。まア、汝も、相談に乗つてく

れ』  
と言はれて、野村は、席に着いた。

『時に、何事が起きたのか』

『他の事でもないが、今、伊藤が、來ての話には、桂が、危ないといふのぢや。夫に就て、何とか方法を立てなければならぬ、といふので、相談の最中であつたが、汝の來たのは何よりぢやから、相談對手になつてくれ』

『うむ、そりや、俺も、出來るだけは盡すが、對手が幕府では、何うにも、斯うにも、手の出し様がないではないか。夫に就て、志路は、何か考へてもあるか』

『別に、之といふ考へはないが、然し思ひ浮んだ事がある。それは、外の事でもないが、長井雅樂の力を借りる事にしたら、どうぢや』

伊藤は、思はず、膝を乗出して、

『何と、長井に、此事を話すのか』

『然うさ』

『長井に話さずとも、他に人もあらうに、そりや、餘り宜い分別とは、言へぬな』

志路は、莞爾笑つて、  
『汝は、甚く長井を嫌ふやうぢやが、そりや、誰にしても、餘り好かぬ男ぢやが、今は只、桂を救はう、といふ場合ぢやから、大概な事は、忍ばねばなるまい』

之には、野村も同意した。  
『長井の平生は、餘り好かぬが、此事を扱はせるには、こりや、長井に限るぢやらう』

と、話が進んで、終に志路から、長井に、一應、談じて見る、といふ事になつて、其日は、夫で済んだ。

野村といふ人は、明治になつてから、靖と名を改めて、或は驛邊總監となつたり、或は神奈川縣令を勤めたり、遂に樞密顧問官に迄なつて、此の世を逝つた人である。今は故人になつたが、一時は、外相の椅子に着いた、本野一郎の夫人は、野村の娘である。元來が、吉田松陰の門人で、却々、當時の野村は、立派な人物であつた。兄は、入江九市といつて、之も松陰の門に入つた人で、兄弟揃ふて、評判の親孝行であつた。親に至孝である位だから、主人にも、師匠にも、能く盡した。松陰が、萩の城下に、幽囚されて居た時分、毛利敬親侯の上洛を幸ひ、一策を施さう、として、自分は幽囚の身であるから、動く事が出来ない。乃で、入江を招んで、自分の代理として、敬親侯の御後を慕ふて、御意見を申上げる、といふ事を、松陰が申付けた。然るに、入江は、病床に在る、老母を控へて、殊に、家は極めて貧しいのであつたから、此事を行へば、必ず後患のあるもの、として、覺悟しなければならぬので、病臥して居る、老母を、捨て行くに忍びなかつた。獨り胸を痛めて居る所へ、弟の野村が、訪ねて來て、仔細を訊くから、斯うく言ふ理由と、其次第を話した。野村は、兄の心を察して、

『宜しい。夫では、俺が、代つて行かう。俺は、何うせ次男に生れて、野村の姓を、冒して居るものぢやから、死んだとて差支へない、身分である。兄さん、汝は、後に残つて、母親に孝養を、盡して下さい』

と、健氣の一言に、入江は、野村の手を取つて、涙を流した。  
『夫では、然ういふ事にして、貰ひたい』

といふので、彌々野村が、君公の御後を、慕ふて行く事になり、松陰に面會して、此の事情を話した。松陰も泣いて兄弟の眞心を喜んだ。

松陰から、野村に與へた、詩は、斯うである。  
夜來凶夢暗愁多、果是同人叢棘沈、酬國精忠十八歳、毀家貧士二十金、



淺謀爲レ捕世皆笑、正義不レ磨吾則欽、二百年間旺ニ霸氣、勤王好死丈夫志  
(伊藤博文傳に、永井とあるのは、長井の誤りである。また、志路は、井上の事で、井上は、後の侯爵である)

一一

志路が、桂の事を、長井に頼む、といふた。其長井とは、如何なる人であるか、といふに、之は、毛利家の御側用人をして居た人である。桂の妹婿になつた、來原良藏とは、伯父甥の關係があつて、桂とは縁戚であるから、之を以て、志路は長井を説かう、といふのであつた。

併し、毛利家の、御側用人の身を以て、幕府を動かさう、といふのは、些訝しいやうであるが、當時の長井は、實に偉いもので、毛利の家臣の中で、老中と隣組で、話しの出たものは、此人の他には、なかつたのである。聞く所に依れば、眇であつたさうだが、非常に強健な人で、幕府に、深く取入つた、といふことも、世辭や追従で、取入つたのではなく、一見識を以て、常に幕府の爲めに、獻策をして、其の關係から、取入つたのであつた。殊に、水野越前守とは、最も關係が深く、水野は、常に相談相手として、長井を厚遇して居た位であつた。水野が無き後は、安藤對馬守と、最も深く交はつて居た。當時の幕府は、安藤さへ承知すれば、事の大小を問はず、何うにてもなるのだ。其の關係を、志路は、熱く知つて居るから、長井の力によつて、幕府を説き、而して、桂を助けよう、といふ、考へを起したのであつた。

老中の水野越前守は、何ういふ人であつたか、之も序に、其の爲人を、説いて置く必要がある。最初は肥前唐津の城主であつたが、唐津は、九州沿海の、要害の地に當り、海上防備の役を、課せられて居るから、夫が爲めに、老中になる事は、出来ないものであつた。越前守は、頗る才識の、優れた人で、又、志は、天下の事に、あつたのだから、従りに唐津の海岸に、大砲を据ゑて、力んで居る、といふやうな事は、心に喜んで居なかつた。何時か、中央に出で、政權に關係つて見たい、といふ考へが、始終あつたので、そこで、少からぬ賄賂も使ひ、今ていふ、運動の如き事として、遠州濱松へ、國更される事になつた。唐津は二十五萬石で、濱松は十五萬石だ。結局、十萬石の損をして、國替運動を、した事になる。恐らく、徳川の天下になつてから、斯ういふ馬鹿氣な運動をしたものは、越前守の他にはなからう。結局、老中になりたい、といふ爲めに、其資格を造る必要からである。

當時の將軍、家齊公に拜謁した時分に、菊の苗を拜領した。尤も、家齊に拜謁したのは、其他にも多數あつて、孰れも菊の苗を拜領したのであるが、さて、翌年になると、其諸侯を招いて、苗の菊が、何れほどに育つたか、といふ事を、御下問になつたので、諸侯は、夫々に菊の鉢を携へて、登城をする。見れば、如何にも美事に育つて、一年の丹精も、然こそ思はれるほどであつた。然るに、只一鉢だけは、見る影もなく、萎れた菊があつた。それに、家齊は、目を付けて、左右の者に、

「是れは、何者の鉢であるか」

といふ、お訊ねがあつた。御側のものが、附けた札を見ると、水野越前守の差出したものであるから、其の通りに申上げると、家齊は、非常に感服して、夫から、水野に對する、眞實は特別になつて來た。夫は、何ういふ理由か、といふと、美事に作られた菊は、結局、植木屋の手に掛つて、養はれたものであつて、大名自身が、手入れをしたものではない。水野は、自から手を入れて居たから、思ふやうに、菊が育たなかつたのである。將軍拜領の菊苗といふので、人の手に掛けずに、水野が、自から手を下して、之を育てた、といふ事は、甚く家齊公の感服を、能くしたのであつた。斯ういふやりかたは、鳥渡、人の氣の付かぬ事で、流石に水野なれば、こそである。

然るに、天保五年三月朔日、老中に拔擢されて、本丸へ、詰る事になつた。水野が、在職中に、關係した事件で、尤も有名なものが、仙石家の騒動であつた。之を調べたのは、脇坂中務丞安童ではあるが、裁決の決断は、水野がつけたのであつた。仙石左京を斬つたのも、水野の指圖であつた。當時、西丸が、火を失して焼けた、其善後の處分

などに就ても、實に申分のない、始末をつけた。又、高島四郎太夫(秋帆)を、幕府へ採用したのも、水野であつた。其代り、仕事を爲る方であつたから、失敗も又多かつた。有名な儉約の布告を、出した事や、印旛沼の堀割工事を、起した事や、然ういふ點に就て、非常な失敗はあつた。亦、儉約の布告に就ては、一般の人に憎れて、之が爲に、四面楚歌の裡に陥り、遂に弘化七年二月、職を罷められて、同時に、閉門を申付けられた儘、星霜を経て、嘉永四年二月十六日、三田の邸で死んだ。此水野と、長井は、深い關係のあつた爲めに、引續いて、其後の幕府とも、關係を有つて來たので、從つて、安藤とも、深く交はつて居たのである。

二二

長井が、何ういふ事情から、安藤と、深い交はりを、結んで居たか、といふ事も、一應は説いて置かなければならぬ。夫は管に、水野越前守と、深交があつた、といふ關係のみから來た、實際ではなかつた。當時に於て、殆んど幕府の運命を、制するほどの問題、公武合體論といふものがあつた。即ち幕府の側から言へば、朝廷の御威光をかりて、幕府に對する、不平の徒を鎮壓しよう、としたのであるが、夫に對して、長井は、非常に力を添へて居た。幕府に對する、不平派の最も勢力のあるものは、毛利家であつた。其毛利の家來たる、長井雅樂が、幕府を助ける、といふ事に就て、力を盡して居たのであるから、幕府に於て、長井に對する、信用の厚かつた、といふのは、決して無理もない事であつた。

十三代の將軍家定と、十四代の家茂と、引續いて、身體が虚弱であつた。殊に、此の二代は、内外多端の時、殆んど擾亂の間に、過て了つた位である。然うした場合に、將軍たりし人が、身體の虚弱であつた、といふ事は、誠に徳川の爲めに、不幸の至りであつた。家定は、夫人に縁のなかつた方で、既に迎へた夫人に二度も先立たれて益々世の中を、悲觀して來るから、身體が弱るばかりでなく、心までが僻むのであつた。

其時の事情から見ると、未だ此時に、幕府の改革をすれば、充分に天下を治めて行く見込は、立つて居たのであるから、諸侯の中でも、只徒らに、野心を、挟んで、徳川に取つて掛らう、といふやうな、考へを有て居た人は、格別として、其他、徳川に、親切の考へを、有て居た人は、家定を助けて、成可く、幕政の改革に着手しよう、といふ考へは、有て居たのである。現に、島津の名主たる、齊彬の如きも、其意見を、有て居た一人であるが、幕府へ取入る、といふ事に就ては、餘程苦心をして、遂には婚姻政略でなければならぬ、といふ事に、氣が注いで、島津の一門の中から、養女を買つて、之を更に、京都の近衛家へ、養女に入れて、家定へ、與入れをさせた事もある。これが有名な、篤子姫で、後に天璋院と申上げたのは、此お方であつた。

是れは、徳川幕府を、改革するに就て、諸侯の方から考へた、婚姻政略であるが、今度は、夫と全く反對で、徳川幕府の方から、婚姻政略を以て、天下を治めに掛つた。それが即ち、公武合體論である。何ういふ経緯の事か、といふのに、夫は斯うである。當時の皇妹、和宮様が、未だ何所へも、與入れをなされずに、居られたのを、幸として、將軍の御臺所に、御降嫁を願ふ、といふ事に、相談を定めて、此の運動を始めた。然るに、和宮様は、其の前に、有栖川の若宮に、お與入れのお約束が、あつたのであるから、夫に就ては、内部で紛糾もあつて、一時は難かしくなつた、而已ならず、公卿や宮様の中にも、夫等の事に拘はらず、論議の上から、反對の人も、大分多かつた。假令、天下の政治は委ねてあつても、徳川は家臣である。其家臣に、皇族が降嫁せられる、といふ事は、皇室の威嚴にも關する、といふて、難かしい議論もあつた。雖然、二代將軍秀忠の姫君が、後水尾天皇に、典侍を勤めて、皇女を擧げた、といふ事もあり、また、靈元天皇の王女、八十宮といふ御方も、徳川將軍と、縁組をなされた先例もあつて、今、皇族の御降嫁になる、といふ事は、必らずしも不倫の事ではない、といふ説も、一面には起つて來た。夫れには、岩倉少將具視は、熱心なる賛成者であつた。此時分の關東と、京都の間の暗闘は、實に甚いものであつたが、長井雅樂が、此間に立つて、幕府を助け、鞍旋の勞を取つた功は、却々に深かつたのである。

之等の關係から、對馬守は、深く長井を信用して、毛利侯を、幕府の味方と爲すべく、長井の力を借りよう、といふ考へも、有て居たのである。其處へ、長井が乗じたのであるから、桂の命の一つや二つは、手もなく助けられたのであつた。志路が、疾くも其處へ、氣が注いで、長井を説かう、としたのは、流石であつた。

四

當時、對馬守の勢力は、實に偉いものであつた。殊に、對馬守は、非常な勤勉家であつたから、始終新しい方面に、仕事を求めて、後から／＼と、仕事を仕て行つた人である。安政の條約に依つて、異人は、どし／＼やつて来る。公使や領事は、條約に基づいて、様々な註文を、幕府へ持込む。夫に對して、一々解決を與へるのであるが、別段、外交の方針が、定つて居る、といふ譯でもないから、小さな問題にも、日が永く掛つて、紛擾た事もあり、然うかと思ふと、大きな問題でも、立所に決して、後になつてから、困つて居る、といふやうな事が、屢々あつた。夫等の事は、一切、對馬守が、捌いて行つたのである。應接の間に、不思議なほど、頓智頓才を、持つて居たので、夫が爲めに、難關を切ぬけて、何うか、斯うか、お茶を濁して居た、といふやうな傾きもあつた。されば、當時の外交家としては、先づ上々の方であつたらう、と思ふ。

今日も、御城勤めを終つて、邸へ歸つて來た。折柄の來客が、例の長井雅樂であつた。廣々とした客間に、只二人は、對座の密談に、耽つて居た。長井は、頻りに和宮様の御降嫁に就て、話して居るのである。對馬守は、一々頷いて、聽いて居たが、

「いや、段々の御配慮、千萬辱ない。併し、京都の模様も、まだ確と、極らぬやうな譯で、夫には誠に苦しんで居るが、お手前の聞く所は、何れまでに、話が進んで居るか、一應承はりたい」

「其儀に就ては、御心配御無用でござらう、と存する。現に、此頃になつて、岩倉卿から、朝廷へ、意見書が出た、といふ事でござるが、密かに聞く所に依れば、岩倉卿の意見としては、此度の御降嫁は、必ず遂行しなければ相成らぬ。密に此事は、幕府の幸ひのみならず、朝廷に於せられても、頗る御便宜の事であらう、と思ふ。倘し、攘夷の事を實行する、と致しても、幕府をして、夫に手を付けさせねばならぬのであつて、今日の如く、京都と、江戸が對立して、互ひに睨み合つて居る、といふやうな次第では、逆も其の事は、行はれぬに依つて、此縁組から、關東と京都の關係も密になり、即ち公武一體となつて、天下の事に當らう、といふ事に相成れば、即ち攘夷の事は、直に決するのである。些々たる情實に拘泥せず、速かに此の御縁組は、お聞届けになつて、然るべきである、といふ、意味の事を、認ためて差出した、といふ事である。岩倉は、同じ公卿の中でも、却々、事理に明らかな、膽力もあり、計畫もある、立派な人である、といふ事を、豫て聞き及んで居るが、此度の御降嫁に就ての意見は、斯ういふ次第である、といふ事を、確かに自分は、聞き及んだ。而て見ると、朝廷にも、事理に明かなものが居つて、内部から、此事を成し遂げさせよう、といふ考へもあるのぢやから、然までの御心配にも及ぶまい、と思ふが、茲に一ツの障りといふのは、和宮様に於て、有栖川宮家と、御婚約が既に決してあつた、といふの一事は、之を今、俄に破る事は、餘程困難であるし、夫等の事にまで、關東より、口を入れる、といふ事は、一層穩かてなからう、と思ふ。此一事は、成行に任せて、見て居るといふより他は、なからうが、之さへ事無く纏まれば、御降嫁の事は、直ちに決するであらう、と存する。其邊の事に就ても、自分は、近く上洛いたして、充分に盡力をいたさう、所存で御座る」

對馬守は、然も嬉しさに、膝をすゝめて、  
「此の事に就て、お手前が、先般よりのお働きは、幕府に於ても、殊に感謝をいたす次第であつて、猶此の上共に、一層の御盡力を願ひたい」

「その儀は仰せまでもなく、自分に於ては、飽迄も盡力いたす、考へて御座る」  
夫で、話は打切りになつて、馳せて、酒肴の用意も出来て、晚餐の饗應に移つた。食事の中にも、頻りに雑談に耽つて、お互に心の合ふて居るのであるから、遠慮なく、さまざまの話を、して居る中に、何時か、浪士取締りの事に、移つて来た。

「浪士取締りの事に就て、何分にも、懸念に堪へないのは、御降嫁の儀について、彼等の背後には、相當の人物が居つて煽動する、といふ事である。今の場合、穩かならぬ舉動でもされては、萬事が、手違ひにも相成らう、と思ふて、夫ばかりが、心配で御座る」  
長井は、にやりと笑つて、

「三百諸侯を押へて、六十餘州の政治を、握つて居る、幕府ともあらうものが、些々たる浪士の取締りに就て苦む、といふのは、餘りに可笑き事で御座る」

「お手前のやうに然う容易く言はれては、如何にも、御道理と敬承する他はござらぬが、併し、浪士の取締りといふ事は、却々に、難かしい事でござつてな」

「幕府が、自身に取締らう、とするから、難かしくも相成る。夫には亦、別に取締るべき方法があらう、と存する。所謂、毒を以て毒を制する、といふのは、其の一法で御座る。其所に、お氣が付かぬ、といふ事は、平生の貴下にも似合ぬ」

「何ッ、毒を以て毒を制すとは、そりや、何ういふ次第か」

長井は、左右を顧みて、答へに躊躇ふ態度であつた。對馬守は、席に侍せる家臣や、侍女を退席させて、徐に膝を進めた。  
「其事に就いて、お考へのほどを、承はりたい」

「手前が、只今申した、毒を以て毒を制す、といふのは、詰り、浪士を押へるには、浪士の望みを負ふて居るものゝ以てせなければならぬ、といふので御座るが、即ち其の人を求むれば、取締りの難い事は御座るまい、と、存じて申したので御座る」

「其の人といふのは、お心當りでもあるのか」

「それや、有る」

「如何なる人で、御座るか」

「弊藩の桂小五郎と、申す者で御座る」

「えッ、桂……」

「うむ」

「齋藤彌九郎の門人であつた、とか言ふ、例の桂で、御座るか」

「左様」

「夫が如何にして、浪士の取締りに、適當の人物である、と、言はつしやるか」

「されば、此者は、弊藩の有備館に、取締りを勤め、曾ては齋藤の塾頭も、致して居つた關係から、各藩の浪士と、極めて昵懇に交はり、殊の外、衆望を収め、多少は、其仲間にて、權威も有て居る。之を押へて、御用を勤めさせる事に致したら、如何で御座るか」  
と、述べ終つて長井は、癡乎と、對馬守の顔を瞞めた。

五

對馬守も、長井の説く所に、一應の道理はある、と思ふたが、夫にしても、此の大役を、桂にさせよう、といふて

自分に説き込む、といふのは、少しく驚いた。自分が、つい此の頃、坂下見附で、水戸の浪士に斬付けられて、其の傷は、まだ治らないのに、自分へ當の敵に如しき、水戸浪士の煽動者たる、桂を勧めるとは、何といふ面當の事をするのか、殊に桂は、今、嫌疑を受けて、奉行の手に、廻されて居るものである。夫を平氣で、長井が、自分に説くは、如何にも、自分が莫迦にされて居るやうな、氣がして、對馬守も、一時は不快を感じたが、併し、長井は、非凡な奴である。此の事を、少しの遠慮もなく、自分に説く、といふ、其の膽力と、見識に至つては、實に敬服の他はない、と思ひ直して見ると、長井の説も、用ひて見たいやうな、氣もして來た。

「如何思召す。手前の考へは、悪うござるか」

「左様さ」

「桂は、貴下を、尾け狙ふ、水戸浪士に、人望のあるもので御座れば、之を其取締りにする、といふ事が、即ち毒を以て毒を制すの理、又、桂も、必ずお役を、大切に勤め終せるであらう、と存ずる」

「お手前の仰せ、一應、御道理とは存するが、併し、桂は、今、奉行の手に、掛つて居るものであれば、如何な名論といへど、之を行ふ事は難からう」

「例令、奉行の手に、罹つて居らうとも、貴下が、之を行はう、とするに、何の難き事があらう」

「併し、夫を行ふとするには、奉行の手を、離れるのを待つ他は、なからう」

「いや、夫を待つまでの事は、ありますまい」

「何故か」

「貴下の御沙汰で、奉行に、其の旨を諭せば、桂は、直ぐ放されるのである。若し左様なれば、桂は、貴下の恩に感じて、否應なしに、お役は勤める事にならう、と存ずる」

對馬守も、満更に愚人ではない。少し殿様離れのした人であるから、早くも長井の、意中を覺つた。原來此事で、今日は來居つたのだな。可矣、然らば、長井に、花を持たせて、桂の命を助け、所謂、毒を以て毒を制するの一方法として、桂に、浪士鎮撫の役を勤めさせよう。夫には、長井といふ保証人も、附いて居る事ではあるし、旁々、此事は、面白い結果を見る事になるであらう、と、早くも其覺悟が付いたから、乃て話は、漸々、進んで來た。遂に長井の説を用ひて、桂の命は、助ける事になつた。夫より幾日かの後に、桂は、疑ひが晴れて、お構ひなしになつた。桂を始め、夫に付従ふ人々は、迎も、今度は難かしい、よし遁がれるにしても、容易な事ではないといふ考へで、居つたにも拘はらず、意外にも、突然、此の免訴に遇ふたので、嬉しいやうな、氣味の悪いやうな、頻りに同志を集めては、其後の策に就て協議を凝して居た。處へ、長井雅樂から、書面が來たので、開いて見ると、御内談申したい事があるに依つて、即刻御入來を待つ、といふ意味の手紙であるから、取敢ず桂は、長井の邸へ、やつて來た。

「御用と仰せられるのは、如何なる事で御座るか」

「いや、其の事は、漸々、お話しをいたす意ぢやが、併し、頃日來は、御苦勞の事であつた。嗚御窮屈な思ひをなされたらう」

「種々御配慮に預かり、庇護を以ちまして、晴天白日の身と相成りまして、有難う存じまする」

「お招き申したのは、他の次第でもないが、此度の事件に就ては、迎も遁れぬ、お手前の運命、夫を無理にも、お助け申したのは、拙者の力に非ずして、實に對馬守殿、御配慮に依つてとござるよ」

「ナ、何と、對馬守殿、御配慮とは……」

「然れば、對馬守殿は、貴殿の恨みを忘れて、天下の御爲を計つたので御座る」

「うむ、そりや、何ういふ意味で御座りますか」

「對馬守殿が、お手前を救ふたのは、お手前の力に依つて、天下を治めるのお心からぢや。といふのは、お手前達の耳にも、入つて居らうが、公武一體の企てが、今將に成就せんとして居る場合に、例の浪士共が、前後の考へもなく、立騒ぐやうな事があつては、其妨げにも相成る。夫に就ては、お手前に、浪士の鎮撫方を御依頼、しよりの所存からぢや」

之を聞いて、桂は、聊か恐縮した。といふものは、志路の考へから、長井を説いて、長井の力に依つて、罪を避れようとしたのは、事實である。夫に就て、長井が、對馬守を説き、對馬守は、其の説に従つて、自分を許したのであるが、其代りに、浪士の取締を頼む、といふのは、巧い急所を押へられたと思ふほど、桂の身に取つて、此の一事は、迷惑の事であつたけれども、今更に、夫を否む、といふ事もならぬ。種々相談の末、桂は、其命を受けて、浪士の鎮撫を引受ける、といふ事になつて、屋敷へ歸るには歸つたが、どうしても、之を眞面目に引受ける、といふ心にはなれなかつた。

### 有備館時代

一

安政の疑獄、井伊大老の遭難、引續いて起つた坂下見附の事變、其他、様々の問題が、起きた爲めに、夫に刺戟されて、諸藩の間にも、動搖が、起きて來た。詰り、二百年も、泰平が續いて、人心が、漸く倦んで來た所へ、外夷が乘込んで來て、條約の問題が、各方面へ、ひどく衝動を與へて、それから、種々の事變が、續々起つて來た。

三百の諸侯にも、却々、時世を、能く見る名君もあつたし、假令、藩主は、平凡な人でも、藩士の中に、立派な人物があつて、平凡な藩主を、刺戟するから、藩論は動いて來る。況して、時勢を達觀するほどの名君が、その上にあるとなれば、尙更の事だ。各藩の内情から見ても、幕府に對する、多少の不平もあれば、動搖の兆はあつたのだが、夫れが爆發しないのは、長く天下を押へて來た、幕府の權勢の、精力であつた。夫れを、早く看破たのが、長州藩の先覺者で、藩士の中には、因循姑息な意見を、有つて居たものも多くあつたらうし、亦永い間の習慣から、幕府の意に慚る、といふやうな事を好まなかつた、卑屈な者も、居たには違ひないが、大體に於て、長州藩士の意氣は、幕府に對抗して、天下の事に、指を染めよう、といふの考へを、有つて居たものが、多くあつた。殊に、攘夷といふが如き、好い問題を捉へて、巧に朝廷の、御威光を利用して、之に依つて、徳川を苦めた、那の鋭い遣方は、後になつて見れば、何でもないやうな事だが、當時の事として見れば、實に此上もない、良策であつた。尤も、當時の藩論は藩

士の中に、少し卓越した人物があつて、其の人が、首として騒げば、自然、其方に化せられて来るものであつて、別に大人物でなくとも、少し秀れた人であれば、何うにか藩論を、引廻す事は、出来るのであつた。  
長州藩には、傑出した家臣があつて、其の數も、却々少なくなかつた。周布政之助は、元來が、毛利の世臣でなく、此の人になつて、始めて抱へられた、所謂、臨時雇に如しき家臣ではあつたが、然し、其の人爲が、優れて居た爲めに、重く用ひられたのである。之は後の話だが、高杉晋作が、徳川家茂を、京都に於て、暗殺しようといふ計畫を、した事があつた。其際にも、他の者には話せないが、假令、藩の役は、勤めて居ても、周布丈けには、一應洩して置いた方が宜らう、といふので、政之助の所へ、やつて来て、將軍暗殺の内情を、精しく話した。之には了得の、政之助も、一度は驚いたが、狼狽して、之れを止めるやうな、そんな凡人ではなかつた。

「そりや面白からう。シツカリやつたら、宜いだらう」

「うむ、確かに仕止める意ぢや」

「然し、將軍を切る刀は、有つて居るか」

「そりや、此所にある」

と、高杉は、膝下にあつた大刀を、執つて示した。周布は、莞爾笑ふて、

「夫で斬るのか」

「左様」

「そりや不可ん」

「何故、可かぬか」

「天下を預かつて居る、將軍を斬らうといふのには、餘りに粗末ぢや」

高杉も、思はず勃然とした。自分の刀が、然も鈍刀でもある如に、斯う言はれては、疝癢の強い人は、泳げる事が能きない、少しく顔の色を變へて、膝を進めた。其の様子を見て、政之助は、

「まア、待たつしやい。將軍を斬るには、之が宜らう」

と、言ひながら、立上つて、纏て取出した一刀は、豫て政之助が、毛利侯より、拜領の名刀であつた。

「まア、之を持つて、斬つて來たら、宜らう」

負けぬ氣の高杉は、周布が、何を言ふか、何れ程の名刀であらう、と將軍を斬るに、刀の區別はない譯だ、と思ひながら、手に取つて見ると驚いた。毛利侯の御紋が、鏤めてある、立派な刀だ。

「やツ、こりや、君公の御定紋が附いて居るな」

「うむ、豫て拜領の一腰ぢや、將軍を斬るには、此位みな物でなければ、不可ん。まア、持つて行かつしやい」

此大膽不敵の態度には、有繋の晋作も驚いて、霄時、其の刀を、眺めて居たが、

「こりや、使へぬ」

「何うしてか」

「仕遂げて了へば差支へないが、萬一仕損じた日には、公侯の御定紋の附いた、刀を以て斬つたとあつては、君公の御迷惑も、然こそと思はれる。そりや、何うするか」

「うむ、成程、大きに道理だ」

乃で立上つて、鑪を持つて来て、火鉢の縁に、刀の柄を載せると、目貫へ鑪を當て、ゴシ／＼と引摺つた。忽ち毛利家の御紋は、目茶々々になつて了つた。

「まア、之を持つて行かつしやい」

晋作は、政之助の大膽なるに驚いた。威勢好く、其の刀を持つて乗出したが、事は、遂に手違ひとなつて、決行し

得なかつた。  
 周布は、夫位（それ）の事は、平氣（へいけい）でやつた人である。其（その）の時代には、何れ（なに）の藩（はん）にしても、殿様（とんさま）から拜領（はいりやう）した物を、大切に取扱（とりあつか）ふ事は、言（い）ふまでもない。況（ま）して、殿様の紋（もん）を、鑓（やり）で摺切（すりきり）るなど、いふことは、例（れい）の少い事（こと）で、周布（すけふ）なればこそ、斯（ごと）うした、思（おも）ひ切（き）つた狂言（きやうげん）も、やれたのである。  
 此政（このま）之助（のすけ）が、藩（はん）の重臣（じゆうしん）を説（と）いて、江戸表（えど）の状況（じやうきやう）視察（しさつ）を名（な）として、來島（きしま）又兵衛（またへいゑ）、井上（いの上）與四郎（よしろう）の兩人（りやうにん）を、出府（しゅふ）させる事（こと）にして、自分（じぶん）も又、引續（ひきつづ）いて之（これ）が爲（ため）めに、出府（しゅふ）する事（こと）になつて、江戸（えど）へ上（の）つた。

一一

桂（か）は、坂下御門（さかしたごもん）の一條（いちじょう）から、一時（いちじ）は危（あや）かつたが、漸（や）うにして、其（その）の難（なん）を通（と）がれて、安心（あんしん）はしたやうなもの、其代（そのしろ）りに、浪士（らうし）鎮撫（ちんぷ）の役（やく）を、申付（まをす）られた事は、随分（ずいぶん）迷惑（めいわく）な話（わ）して、今（いま）までの關係（かんけい）上（じやう）、徳川（とくがわ）の爲（ため）めに、浪士（らうし）の鎮撫（ちんぷ）は、出來（で）可（こ）き筈（はず）がない。雖然（しかん）、長井（ながい）が、折角（せつかく）の苦心（くしん）から、自分（じぶん）を救（すく）はうが爲（ため）めに、然（さ）ういふ事（こと）に、爲（な）て來（き）たものを、今更（いまさら）に斷（こと）る譯（わけ）にもならず、已（や）むを得（え）ず、お受け（うけ）はしたのであつたが、其（その）の事は、未だ誰（たれ）にも明（あ）さず、自分（じぶん）獨（ひとり）りて、苦（く）んで居（ゐ）た。夫（それ）を知（し）つて居（ゐ）るものは、僅（わずか）かに三四名（さんじゆうめい）で、志路（しじろ）は長井（ながい）を働（はたら）かして、桂（か）を助（たす）けよう、とした、發案（はつあん）者の事（こと）であるから、自然（しぜん）、此（この）の事情（じじやう）は、知（し）つて居（ゐ）る譯（わけ）だ。

此際（このとき）に志路（しじろ）の事（こと）も、説（と）いて置（お）きたい。志路（しじろ）の生家（なまが）は、毛利家（まうりけ）の御譜代（ごふだい）で、家祿（かろく）は百石位（ひやくいし）であつたが、家柄（かへ）は、却々（たが）宜（よ）かつた。併（ひ）し、聞多（きんた）は、次男（じなん）に生（う）まれたので、餘り（あま）巾（きん）は利（き）かなかつた。其（その）の時代（じだい）の武家（ぶけ）は、長男（ちやうなん）ばかり大切（たいせつ）にして、其（その）の他（ほか）の子供（こども）は、有（あ）るか無（な）しの扱（あつか）ひを、受（う）けてゐたものだ。昭和（しやうわ）の今日（こんにち）でこそ、次男（じなん）三男（さんなん）といへども、其（その）の家に就（つ）て相當（さうたう）に、權（けん）力を有（あ）つて居（ゐ）て、財産（ざいさん）分割（ぶんかく）の、裁判（さいばん）を起（おこ）しても、相續（さうじき）人の受（う）くべき物（もの）の中（なか）を、幾分（いくぶん）でも、分（わ）けて取（と）るだけ、權（けん）利（り）は、あるといふ事（こと）になつて居（ゐ）るが、昔（むかし）は、そんな譯（わけ）のものではなく、町家（ちやうけ）に於（お）いても、其（その）の通り（どおり）で、泥んや、武家（ぶけ）に於（お）ては、尙更（なほさら）の事（こと）であつた。長男（ちやうなん）は、總（もつと）て其（その）の家（いへ）の主人（しゆじん）に、なる者（もの）である、といふので、非常（ひじょう）に大切（たいせつ）がられても、次男（じなん）以下（いげ）は、餘計（あま）の物（もの）として、取扱（とりあつか）はれるのが常例（じやうれい）であつた。聞多（きんた）も、其（その）の類（るい）に洩（あ）れない、扱（あつか）ひを受けて、志路（しじろ）といふ家（いへ）へ、養子（やうし）にやられたのであつた。夫（それ）ほどに、餘計（あま）者の扱（あつか）ひを、受（う）けて居（ゐ）た、聞多（きんた）も、後年（ごねん）には、侯爵（こうしやく）井上（いの上）馨（か）だから、實（じつ）に面白い。明治（めいし）になつてからの躰（たが）は、人の批評（ひひやう）にも上（あ）つて、略（りやく）其（その）の價値（かぢ）は定（さ）まつて居（ゐ）るが、維新前（いしんぜん）の聞多（きんた）に就（つ）て、その批評（ひひやう）が、未だ定（さ）まつて居（ゐ）ないやうだ。最良（さいりやう）眼（め）なしに見（み）て、維新前（いしんぜん）の聞多（きんた）は、眞（ま）に稱讚（しやうさん）すべき、立派（りつぱ）な武士（ぶし）であつた、と思（おも）ふ。松陰門下（しやういんもんげ）の若侍（わかしやく）の中（なか）では、年（とし）齡（ねい）も、一（いち）番上（ばんじやう）であつたし、分別（ぶんべつ）も、却々（たが）良（よ）かつたので、自然（しぜん）、重（じゆう）きを爲（な）して居（ゐ）た。然（さ）れば、桂（か）の如（ごと）きも、聞多（きんた）に對（たい）しては、同等（どうてい）の交際（かうさい）を、して居（ゐ）たものだ。後年（ごねん）になつてこそ、人物（じんぶつ）の相違（さうゐ）と、維新（いしん）の際（さい）の、功名（こうめい）の大小（たうせう）に依（よ）つて、其（その）の位置（いち）にも、大いなる相違（さうゐ）があつて、桂（か）は、三傑（さんけつ）の一（いち）に數（かず）へられ、聞多（きんた）は、僅（わずか）かに參與（さんい）といふやうな、役（やく）になつたに過（す）なかつたが、夫（それ）でも、外（ほか）の者（もの）と同じやうには、取扱（とりあつか）はれなかつたのである。坂下事件（さかしたじけん）で、已（や）に危（あや）かつたのを、聞多（きんた）の助言（すけいげん）で助（たす）かつたのであるから、其（その）の當時（たうじ）、桂（か）が、聞多（きんた）に對（たい）する、感謝（かんしゃ）の情（じやう）は深（ふか）かつた。

或日（あるひ）、有備館（いびくわん）の一室（いちしつ）で、頻（し）りに讀書（どくしよ）に、耽（た）つて居（ゐ）た、桂（か）を、井上（いの上）が、訪（ま）ねて來（き）た。

「やア、井上（いの上）か」

「うむ、相變（あひかは）らずの勉強（べんきやう）ぢやな」

「何ぢや」

「他の事（ほかのこと）でもないが、國許（くに）から周布（すけふ）が、來島（きしま）と與四郎（よしろう）を、伴（た）れて出（で）て來（き）る、といふ事（こと）ぢやが、夫（それ）に就（つ）て、何か聞（き）き込んだ事（こと）があるかな」  
 桂（か）は頷（うなづ）いて、



「うむ、鳥渡、其の便はあつたが、何ういふ事情で、出て来るのか、深い事情は判らない、足下の方へ、何か言ふて来て居るか」

「拙者の方へは、江戸の状況を探る、といふ事は、表向で、實は、何か他に秘密の企てがあるといふやうな知らせが来て居る。就ては、來島のやうな、強いのが居るのぢやから、餘り無法な事を、されても困ると、思ふから、何とか分別をして、巧手に、此の三人を説かないと、飛んでもない事を仕出來すぢやらう、と思つて、打合せに來たのぢや」

「大きに然うぢや、周布も、那れで却々、分別のあるやうぢやが、逆上て來ると、随分向ふ見ずを、やり兼ねないからな。殊に、來島の如きは、何を仕出來すか、判るものではない。何とか工夫を、する事にしよう」

其日の話は、夫て濟んだが、其後ち、續いて來た、國許の同志からの、便りに依ると、此度上る三人の、公然の役は、江戸の状況視察と、いふのだが、其實は、坂下事件の虜直しをするのである、といふ評判があり、又、夫を確實であるやうに、傳へて居る者が多い、といふ事を、追々に報知て來た。豫て危険だと、思つて居たが、然ういふ便りが、二度も三度もある以上は、滿更根のない事でもなからう。此上は、打捨て置く譯にはならぬ。兎に角、何とかして、夫を押へなければならぬが、併し、江戸へ、乗込んで來てから、何うの斯うの、といふのは、却つて良くないから、寧ろ、途中で押へて、夫となく、江戸の状況を、詳しく語つて、今は、左様な事を、爲すべき場合でない、といふ事を、説いた方が宜い、といふ事に決して、乃て、三人が、江戸へ到着すべき、日取を調べて、彌々其際に、品川まで出張て、之を説く事になつた。

二二

併し、夫に就ては、責任ある立會人を、作つて置かう、といふ考へもあつて、誰彼と詮索をしたが、どうも、相當

の者が、見當らなかつた。無論、同じ藩士では、都合が悪し、いろ／＼考へた末、不圖、思ひ付いたのは、齋藤塾の渡邊昇、豫て自分が推擧して、塾頭の後釜に、坐らせて來た、此の昇こそ、適任者である、といふ事に、考へ付いて、渡邊を説いて納得させ、之を伴ふて、鈴ヶ森まで出張て、周布等の來るのを、待受けて居た。

斯ういふ事情に、なつて居る、といふ事は、少しも知らぬ、三人は、道を急いで、鈴ヶ森まで、やつて來ると、圖らずも桂が、待受けて居たので、之には流石に驚いた。未だ見た事のない、骨格の逞しい、立派な武士が、一人付いて居る。何か仔細が、あるらしく考へたので、桂の摩くがまゝに、鮫津の川崎屋に入つた。勞れ休めの、湯浴も、終つて、彌々膳に向つた。其時に、桂が、諄々として、江戸表の状況を説き、坂下事件以來、幕府の警戒は嚴重にして、殆んど何事にも、手を出し得ぬ、状況になつた、而已ならず、自分も其、其事件の響きを受けて、今は幕府の深く注意するところ、となつて、一擧手、一投足、切べて自由にならぬといふ事までも、説いて聞かせた。

然るに、來島又兵衛は、頻りに時勢を憤慨し、江戸詰の藩士が、腑甲斐なきを罵りして、「自分が、斯く出府する以上は、他人の力を借らず、一人にても、必ず立派な事を、して見せる。坂下見附の、失敗の如きは、水戸浪士の力が足りなかつたから、那アいふ事になつたのだ。俺が、若し一人居たならば、決して逃す氣遣ひはなかつた」といふやうな、氣焰を吐いて、元來が、非常に強い人であるから、其位な言を吐いても、差支へない譯だが、然し、然ういふやうな調子で、大事を起された日には、それこそ堪らない。桂は、頻りに言葉を巧にして、來島の心を和げよう、と努めて、殆んど徹夜して話し込んだ。周布は、沈黙して、聽いて居るばかり、只、與四郎が、時々、口を入れる位なものであつた。東が白んで、來た爲めに、盃を納めて、一同は、之から江戸へ、乗込んで來た。

桂の考へては、充分に説いた意で、能く三人に、自分の考へが、會得されたものである、と思ふて居た、處が、他の者は、兎に角、來島一人は、桂の説が、餘り面白くなく感じた。今までの、桂の意見と、餘り異ひ過ぎて、如何にも意氣地のない、腰拔の議論のやうに、聽き取れたので、是には、何か仔細もあらうが、都住居の永くなつた爲めに

幾分か心が鈍つたのであらう、と想像して、前夜の事を考へて見ると、始めて紹介された、大村藩士の渡邊昇が、一晩の間、呑んで論じて居る間に、一言半句も差挟まず、只黙々として、側に居るばかりであつた。其の調子が立派な覺悟のある、武士らしく思はれた。殊に、桂が、同道して来て、一言も言はなかつたのは、幾分桂の意見に對して、不服もあつたのであらうと、萬事を、自分の方に、都合よく解釋を下して、又兵衛は、氣の短い人であるから、之から一人て、九段坂上の齋藤塾へ、乗込んで来た。

桂が、去つて以來の、齋藤塾は、相變らずの繁昌で、桂に變つて居る、渡邊の評判も、又た悪くはなかつた。尤も技倆は強し、人物も好つたから、普通に、竹刀を持つて、人の頭を叩く、所謂、劍術家なるものとは、大きに趣きを異にして居るので、門生の崇敬も深かつた。

「はッ、申上げます」  
「何んぢや」  
「毛利藩士の來島又兵衛といふ、お方が、お訪ねて御座いまするが、何う致しませう」  
「おう、さうか、之れへ通してくれ」

昨夜、別れたばかりの又兵衛が、まだ初対面で、氣心も知れない、自分を、何で訪ねて来たので、渡邊は、不審を懐きながら、面會する事になつた。案内に連れて、入つて来た、來島は、一應の挨拶を済まして、膝を進めた。

「さて、渡邊氏、昨夜、初めての御面會で、御互の心も、まだ真に知り得た、といふ次第では御座らぬが、然し、一見して、お手前は、尋常ならぬ武士と考へる。若し、拙者の見た目が異へば、拙者の不明であつて、誰も怨む所は御座らぬが、足下を、眞の武士として、御相談を申上げたい、事がある。何と、御承知下さるまいか」  
「之は御言葉にて、恐れ入る。數ならぬ拙者風情を、然るまでに、思召して下さる、御厚意に對しては、決して違背は、

仕らぬ所存、而して、如何なる御用命か、承はりたい」  
「早速の御承諾で、辱ない。餘の儀でもござらぬが、對馬守を、那の儘に、打捨て置いては、我々同志の者の力が、如何にも柔弱なる事を、幕府方に、知らせる道理で、心外此の上もない。先づ取敢ず、對馬守を倒す、といふ事が、第一で御座るに依つて、お手前に、是非御同意を願ふて、お手前の門下の中に、相當の人物も御座らば、お手前の力を以て、我が同志の列に加へ、共に事を爲す、といふやうな事に致したい、と思ふが、如何でござる」

四

有繋の渡邊も、來島の來意には、驚いた。自分も、随分亂暴であるが、來島の向ふ見ずは、又特別で、是程の大事を、深い交際もなき、自分に對して、少しの臆面もなく、相談をかけるのであるから、在外に、輕卒な人物として、頗る輕んじたのである。成程、桂が、心配して、態々、品川迄出張つて、途中に於て、説いたのも無理はない、と、心には、然う思つても、豈夫、其の通りに、いふ事ならぬから、程宜くいふて、斷るに限る、と考へた。

「御説は、一々御道理で御座れど、今の場合、御同意申す、といふ事は、チト困るばかりでなく、只今、仰せの門生と仰せられるは、當齋藤塾の門生でござらう。之は自分の門生ではなく、齋藤先生より、預かりの人々で、自分で自由にはならぬ。假令、自由になつた所で、大概、竹刀取つて、打つた、打たれたの、争ひをするに過ぎず、棒振に如しき輩で、天下の大機に、通じて居る譯もなく、相談するまでも御座らぬ」

と、何の愛嬌もなく、すらくと斷つたので、來島も、案外の思ひをして、原來、此の渡邊といふ奴、何となく豪傑の風がある、と思ふたのは、自分の見誤りであつたか、夫にしても、桂が、斯ういふ者を、信じて居るのは、怪しからぬ事で、實に意外千萬だ、と、頗る失望の體で、來島は、再會を期して、歸つて了つた。  
茲に、意外の間違が能た、といふのは、渡邊と來島が、話して居たのは、素より秘密の事であつて、其の席上に、

出て居つたものは、一人もなかつたのであるが、何しろ、火のやうになつて居る、來島が、渡邊に注意をされながら、大きな聲で、話込んで居た爲めに、門生の中の一人が、之を洩れ聞いて、非常に怒つた。門生といふても、一般の道場に、出入する門生とは、大分趣きが異つて居て、渡邊に、稽古をして貰つても、其の實は、齋藤の門生である、といふ心があるし、夫に多少、天下の事に、志のある者も居たから、渡邊が、來島に答へた、言葉の中に、竹刀を持つて、互ひに打合ふだけの者で、實際の役には立たぬといふやうな、意味の事を、洩れ聞いた、此の連中が、何うしても承知をしない。自分共が、非常な悔りを受けたのである、といふて、相談の上で、渡邊に談判をする、といふ事になつた。渡邊の答辯に依つては、其の場を去らず、斬つて了はう、といふ意氣込で、どや／＼と、渡邊の部屋へ、入つて來た。

「是は、大分お揃ひで、何御用ぢやな」

毎もならば、愛想よく、直ぐ答へをするのだが、今日は、怒つて居るから、皆難かしい顔をして、何の答へもなく、荒々しく、其座に着いた。渡邊は、變に思つて、一同の態度を、見て見ると、其内の一人が、膝を進めて、

「改めてお尋ねを致すが、貴殿には、今日迄、我々一同、御指南に預かつた、といへば、師弟の如き關係は御座るが、併し夫は、劍術の上にて於ての、關係で御座つて、決して我々の心の底までもお任せをいたして、御指南下され、といふた覺えは御座らぬ。然るに、毛利家の、來島氏に對して、貴殿が、我々を目するに、何の役にも立たぬ、といふやうな事を仰せられたといふのは、如何なる次第で御座るか、相當の御説明を伺ひたい、と思ふて、一同揃ひで、罷り出たので御座る」

と言はれて、渡邊も、心の中は、原來失策た。來島が、大聲で自分に、迫つた爲めに、度々制したのだけれども、遂に夫が、室外に洩れて、誰かに立聞きされたものか、他の事とは異つて、之ほどの大事を、他人に聞かれる、といふや

のは、身の詰りであるが、仰し、未だ／＼此の連中に聞かれた、といふのは僥倖であつた。幕府に、心を寄せる者にも、立聞きされたならば、自分は勿論、來島も、何ういふ事に、なるか判らなかつたのである。何れにもせよ、然るべく宥めて、置くに限ると、早くも、胸に定めて、

「之れは意外の事を承はる。決して自分に於ては、お手合方を、左様に蔑んだ意では御座らぬ」

「貴殿は、左様に仰せられても、我々を以て、竹刀を持つ他に、物の役に立たぬといふたのは、蔑んだものではござらぬか。武士の面目は、之に依つて、傷けられて居る。貴殿は、其の一言を、何う思ふて居られるか」

「夫は、聞きやうに依つて、何れともなるので、詰り自分は、來島が、餘りに過激な、議論を唱へるに依つて、それを押へる答辯として、右様な答へを致したのであるが、決してお手合方を、蔑んで申した、といふ次第では、御座らぬ」

「假令、夫にもせよ、他に言ひやうもあるに、我々を輕んじて、右様な事を言はれる、といふのは、甚だ其の意を得ぬ」

「さア、事が、面倒になつて來た。一同は、顔の色を變へて、渡邊の答の、如何に依つては、血の雨も降らしかねまじき、有様であるから、渡邊も、策に窮して、

「然らば斯様いたさう。事件は、長州藩に、關係した事で、來島は、前の熟頭たる、桂氏とも、豫て深交のある人であるに依つて、お手前方と、拙者と、同行を致して、有備館に、桂氏を訪ねて、此事の曲直を明らかにして、貰はうではあるまいか。御互に、此の場に於て、理窟を言ふて居た所で、納まりが付くものではなからう、と存するが、御一同のお考へは、如何でござるか」

斯う言はれて見ると、一同も、此上に渡邊を咎める、といふ事も、能ない而已ならず、桂は、先の熟頭として、自分達が、非常に崇敬して、今日でも、夫が爲めに、有備館に出入するやうに、なつて居るのであるから、渡邊と共に、

有備館に、桂を、訪ねる事になつた。

五

今日は、稽古休みで、桂も、閑散の身であつた。久し振で、齋藤塾へでも、行つて見ようか、と思つて居る所へ、渡邊昇等が、やつて来た、といふから、幸ひに、之を座敷へ、通して見れば、その他のものも自分の昵懇にして居る連中が、揃ふて来たのであつた。

「やア、是は能うおいでた。お揃ひで、何か稀らしい話しても、あつてか」

「左様」

と、渡邊が、口を切つて、後をいはない。他の者も、互に顔を見合せて、眼ばかり光らして居る態度が、何となく訝しいから、桂は、何か衝突して、俺の所へ、其の捫着の臂を、持込んだのだな、と、流石は才物の桂が、夫と悟つた。彼是する中に、酒肴の用意が出来て、盃の献酬が始まつた。桂は、ニコ／＼し乍ら、

「何か、お手前方に、内輪揉めが起つて、おいでたのか」

「實は、桂氏、斯ういふ次第ぢや」

と、之から渡邊が、例の始末を話した。一同も、代る／＼に進んで、渡邊の不都合を訴へる、といふ譯で、黙々聽いて居た。桂は、聊か困つた。原因を糺せば、來島の過ちから、斯ういふ事が出来たのだ。然し、俺は知らぬ、ともいへないから、種々に、言葉を盡して、一同を宥めた。渡邊は、心から一同を、侮辱する譯もなく、只一時の急を、遁れる爲めに、然ういふ事を言ふたのであつて、心から言ふたのでなければ、敢て深く咎める迄もなからう、と思ふといふやうな意味で、諄々と、説き付けた。一同の心も、幾分か和いて来たので、桂は、渡邊の方へ、膝を向け直して、

「何れにもせよ。お手前が、然ういふ事を、蔭口にも言ふのが穩かでない、と思ふ。一同の立腹せられるのも無理はない。一言謝罪をせられたら、宜らうと思ふ」

渡邊も、事が面倒になりさうであるし、殊に、此んな事で謝罪をしたとて、別段、自分の面目に、關る次第でもないのだから、疾くも夫と、覺悟をして、

「自分の至らぬ所から、斯様な間違を仕出來して、何とも相濟まぬ。御一同へ改めて、昇より申し入れる。來島氏に對して、申した言は、自分の心からでは御座らぬが、然し、假令、如何なる場合にもせよ、彼様な事を、口外いたして、それが爲めに、御一同の御立腹に預つて、何とも恐縮仕る。今後は、深く注意致して、右様の事の無いやうに、努めますに依つて、此度はお許しを願ひたい」

荷も熟頭ともあらう人に、斯う言はれて見ると、怒つた者も、今更に、體裁が悪くなつた。

「いや、然う先生から、仰せ下されば、我々も、面目が立つた、といふものだ。長上へ對しての御無禮は、何卒お許しを願ひたい。」

互に禮を知つて、斯ういふ風に相譲り合ふたから、苦情は納まつた。桂も、大きに喜んで、さアといふて、之から呑み出した。一同は、日の暮れになつて、歸つて了つた。

後は、桂と渡邊、其内に、伊藤や井上も、やつて来て、献酬へつ、呑んで居る中に、時刻は、漸々経つ、今の時計で言ふと、既う十二時過、昇は、べろ／＼に、酔ばらつて了つて、桂が、泊つて行け、といふのを無理に振切つて、毛利の邸を出た。昇は、齋藤塾の取締りはして居るが、未だ大村の邸から、通つて居たので、酔ては居るが、本性違はず、邸へ歸らなければならぬ、といふ心があるから、強て歸りかけたのであつた。

雖然、酔は、充分に廻つて、ふら／＼する足許を、踏締め／＼、邸へ歸つて来たのは、既う一時頃であらうか。無論、門限の後であるから、門番は、幾ら叩いても、開けてくれない。酔ふては居るし、晝間の事が、幾分かムシヤク

シヤして居たから、門の扉も破れよ、とばかりに打叩いた。

「何誰ですか、然う甚くお叩きになつては困りますが、何誰ですか」

「エーイ、えーいッ、ぶつ、せ、せ、拙者だ」

「拙者とは何誰ですか」

「渡邊昇だ」

「渡邊さんですか、門限でございますから、お開け申す譯に、なりませぬ」

「莫迦な事を言へ、他の者ではないぞ、昇が、歸つたのだ。早く開ける」

「開けられませぬ」

「よし開けるな、開けんでも、入つて見せる」

石に足を掛けて、背丈を伸して、傍の扉に、手が掛つたか、と思ふと、身體を浮して、驀然と、扉を乗越へた。武術で鍛へて居るから、身體は軽い。門番は、之を見て驚いた。

「貴下は、亂暴をなさるか」

「亂暴とは何だ。藩士が歸つたのに、門を開けぬ、といふ法があるか」

「夫ならば何故、貴下は、御規則をお守りになりませぬか、御重役の方々に、私共が、申譯が御座りませぬ」

「黙れ、重役とは誰だ。重役も糞もあるか、日本に過たる者が二ツあり、駿河の富士に、大村の渡邊昇、といふ事を知らぬか、馬鹿ッ」

「へえ」

「重役などは、十把一束だ。昇の前に來たら、竹刀の先で、劊飛ばしてくるわ、ワアハ、、、」

傍若無人の事をいふて、自分の屋敷へ、歸つて了つた。

翌日になつて、此事が、重役の耳に入り、酔た餘りの勢ひで、門を越えた、といふ事は、大目に見る、といふ限りもあるが、太平樂をならべて、重役を罵つた、といふ一事は、打捨て置く譯にはならぬ。兎もあれ、謹慎を命じて、處分は、何れ追つて、といふ事になつた。其時分の、武家の作法からすれば、可成り、罪は重いのであつた。

六

桂は、渡邊と門人の、紛擾が済んで、快よく語り、快よく呑んで、其の晩は寢て、翌日は、藩用の爲めに忙はしく渡邊の事を、考へる暇もなかつた。三日四日と、經つ中に、渡邊の消息が、更にならない。一時は納まつても、桂にして見ると、多少の懸念もあつた。乃で、齋藤の塾へ使をやつて、状況を聞かせると、其の後、渡邊は、出て來ぬ、といふ。判然は別れないが、藩の規則を破つて、謹慎をさせられて居る、といふ事を、使が聞いて、歸つて來た。之は聞き捨てならぬから、早速、大村藩の方へ、人を遣はして、状況を探らせると、其の噂の通りであつた。而已ならず藩の重役を、罵つた爲めに、嚴罰に處せられる、といふ事も知れたので、之は彌々捨て置けない。桂は、大村の藩邸へ、やつて來た。渡邊に會はうとすると、同人は謹慎中であるから、面會をさせる事はならぬ、といふのであつた。據どころなく、藩の執政を勤めて居た、大村舍人といふ人がある。曾て面識のある人であるから、之へ面會を申込んだ。舍人は、桂と聞いて、座敷へ通した。一應の挨拶も済んで、桂は、膝を進めた。

「さて、お伺ひ致したのは、餘の儀でも御座らぬが、渡邊昇の一身に就て、承はり度いので御座るが、全體、何ういふ過失をしたのか、お漏し下さい」

舍人は、苦々しい顔をして、

「いや、其の儀に就ては、實に拙者も、取扱ひ難うて、困つて居る所で、御座る」

「は、ア、何ういふ事で御座るか」  
「實は斯様な次第で御座る」と、  
先夜の事を、落もなく話した。

「他の藩士の取締上、打捨て置く事はならぬ。男の所爲は、勿論、泥酔の上の事として、許すべき場合もあるが、左様致しては、他の者の取締りが付かず、嫌でも、嚴罰に處する他はなからう、と存する」

「成程、夫は意外な話ぢや。渡邊の平生にも、似合ぬ事。併し、畢竟するに、其の過ちを爲したのも、原因はといへば、拙者から起つた事で、何とも申譯ない。お許し下さる譯には、相成るまいか」

「さア、夫は……」

「斯様申しては、些申し過るかは知りませぬが、失禮ながら、江戸に於て、三本の指を折られる、齋藤塾の取締を、許された程の腕前で、九州に、數多くの武士もあらうが、渡邊ほどの腕前は、二人とはなからう。此一事より考へても、大村藩の譽は、一通りではない。假令、多少の過ちがあつたればとて、其の點から考へて、御許しのならぬといふ次第も御座るまい。況して、平生に於ては、御承知の如く、行ひ正しきもので、只一夜、泥酔の餘り、言ふた事として見れば、然まで責むるには及ぶまい、と存する。併し、取締上、已む事を得ぬとならば、成可く軽く處罰をして、一身に關はらぬやう、お計ひを、願ひたい。之は切にお願ひ致す」

舍人は、頻りに拒んだが、桂が、折角に言ふ事でもあるし、殊に、當時の桂は、毛利藩の若侍の、取締りをして天下に聞えた、劍客でもあり、旁以て、無情なく斷る、といふ事もならず、舍人も、遂に我を折つて、  
「夫までの御配慮では、甚だ恐れ入る。處分に就ては、考へ直しませう」

話も、之までに進めば、其先を押すのは、却て先方の氣を、損する事にもならう。と其所は、世才に長けた桂であるから、程よく話を打ち切り、歸つて来た。

此結果として、渡邊は、百五十日の閉門を、申付かる事になつた。閉門も、半年近くなつては、窮屈な事であるが、併し、其時分の閉門は、存外に樂なもので、重役の同情があれば、表門を、閉めて置いて、裏門から、顔を隠して、夜窺そり出る位の事は、融通の付いたものだ。切腹を連れて、輕罪で濟んだのは、男の爲めには、此上もない僥倖であつた。夫も、桂の骨折であつた、といふ事を、後に聞いて、渡邊は、鬼の眼に涙、心から桂の親切に、泣いたのである。

七

渡邊の事は、巧く落着が決いたが、却て自分の事は、奈何ともする事が、出来なかつた。巧に浪士を操縦して、幕府に當らう、といふ考へを、有つて居た、桂が、其の浪士を鎮撫する役目を、幕府から命ぜられて見ると、今まで、爲て来た事と、全然、反對の方に、動くやうになるのであるから、若し之が公になれば、密に浪士の望みを、失ふ而已ならず、毛利の桂といふ奴は、怪しからぬものだ。首鼠兩端を持して、今は、幕府の傀儡となつた。武士の風上にも、置けない奴だ、といふやうな事になつて、再び浮む瀬のない、境遇になる事は、必然である。然ればとて、坂下事件の難を遁れた、其の代償として授けられた、此の役である以上、無氣に斷る事も出来ず、只何となく受けて、實際に於ては、少しも働いて居なかつたが、併し、何日か一度は、此の事に就て、板挟みの境遇に立つ事は、豫め知れて居る。何とかして、此苦境から遁れる、工夫はないものか、と、そればかり考へて居た。

然るに、幸ひな事が起つた。相州宮田の警備隊を、取締つて居たものが、藩命に依つて、引揚げる事になつて、其後へ、桂が据ゑられる事に、内定したといふ事を、重役から、聞込んだので、之は勿論、否むべき事ではないし、又折も折とて、此場合に、宮田詰を申付けられたのは、桂として、此位あ幸福な事は、なかつたのだ。浪士鎮撫などいふ、嫌な事をせずとも、宮田に居れば、氣安く日を送る事が、出来る。其内には、局面も、變つて來るし、何とて

切抜け道はあらう。重役の方では、長井雅樂の働きて、桂を助け、桂は、夫が爲に、浪士鎮撫の内命を受けた、といふ事は、一向知らなかつたから、平氣で、此の役を、申付けたのであつた。さア、然うなると、桂の身としては、一日も早く、公然の御沙汰を受けたい、といふ考へて、却て自分の方から、催促をしても、極めて貰ひたい、といふ位であつた。藩の方でも喜んで、夫と決する事になつた。慙ういふ都合に、なつた事は、取り敢ず、長井に丈けは、話をして置く必要がある。桂は、長井を、訪ねて此事を打明けた。

『其の御沙汰は、何時下つたので、御座つたか』

『實は昨日より相談を受けて、今日只今、御沙汰を受けたやうな譯で、前以一應、貴殿へ、お話をしようと思へたが、斯う迅速に來るとは、思はなかつたので、兎もあれ、藩命を拒むといふ事にはならぬから、お受けはして來たが、夫に就ては、先般のお約束も、暫らくは果す事が能まい、と思ふに依つて、惡からず思召して、頂きたい』

長井も暫時は、考へて居たが、斯うなつては、仕様がなかつた。幕府の爲めに働く、といふ事は、藩の事で、毛利の家來が、藩命を拒む事は、絶対に能ないのである。宮田を警戒をする、といふ事も、仍且、幕府の御用の一つであるから、話しやうに依つては、對馬守も、格別に、反感を懷くやうな事もなからう、と、有緊に長井は、事理の判る男であつたから、諄い事は言はなかつた。對馬守に對する、申し譯は、此際何とでもなる、といふ考へて、桂が、宮田へ行く事は、長井も至極同意である、といふ事になつて、別れた。

其の事に關係のあつた、伊藤、井上、野村などいふ連中は、口をこそ、出して言はなかつたが、實は、桂の浪士鎮撫の一條には、頗る心配をして居たのであるが、幸ひにして、宮田詰を命ぜられた、といふのは、甚だ好都合である

と考へて、桂の爲めに、小宴を張つて、其の前途を、祝した位であつた。

此時分の、藩に於ては、中村九郎兵衛と、井上小文吾の二人を、京都の藩邸に置いて、朝廷へ對する、應接の任に、當て置いたのであるが、どうも、充分の働きが出来ない。殊に、藩用金匱にやる、といふのであるから、萬事に不都合であつた。

合であつた。誰か代る可き人物を、京都へ詰させて、朝廷の方を、手一杯に、引受けさせる者は無からうか、といふ事になつて、漸々と、相談の末、桂が宜からう、といふ事になつた。

於是、宮田の方へは、他の者を、廻す事にして、一度江戸の藩邸へ桂を呼び返し、更に有備館の取締を解いて、直ちに京都へ上るべき事を命じた。實は、桂自身に於て、自分の舞臺は、京都にある、といふ事を、疾に認めて居たのであるから、此際に於ての京都詰は、自分の考へに、シツクリ筈まつたやうな譯で、桂の喜びは、一通りではなかつた。之が文久二年六月の事、桂の京都に於ける、活動は、之から起るのである。

### 長井雅樂と急激派

安政の大疑獄は、空前絶後の事である、と言つても宜らう。全體、徳川幕府と、朝廷の間に於て、斯ういふ約束があつた。京都に於て起きた、政治上の問題に就ては、幕府から、手入をしない。幕府の方で起きた、政治の問題に就ては、朝廷より、手入をなさぬ、といふ事になつて、居たのだ。従つて政治犯とか、國事犯とかいふやうな、性質の者に就ては、双方、手控へて居た。然るに、井伊大老は然うした約束が、あるにも拘はらず、間部下總守を、京都へ急行させて、少しでも、藩府へ反抗する、といふやうな氣のあるものは、片端から引捕へて、獄に投じ、甚だしきに至つては、堂上方の家臣まで、捕縛したといふやうな亂暴を働いた。現に、近衛家の老女村岡とか、梁川星巖の妻紅蘭とか、いふやうな女子までに、手を掛けて、甚い調べをした。勤王派を、鎮壓する意をやつたのであるが、却て之が害になつて、勤王派の、幕府に對する、反抗心は、一層高くなつた。事にふれ、物に觸れて、段々、力を得て来る。従つて、幕府に不平のあるものは、京都へ集まる、といふやうな事になつて、今や京都は、政變の中心點に、なつたやうな傾きがあつて、浪士の出入は、日を追ふて、烈しくなつて來た。

其所へ、桂が、乗込んだのであるから、少し啖ふに立働けば、どうしても、實際の勢力は、桂の手に握られるやうな

廻り合せになつて居たのだ。斯うした機會は、廻つて來たのであるが、桂の如く、才識絶倫の人であつたればこそ、充分に仕事も出來たのであらう。

當時の長州藩は、何ういふ狀況に、なつて居たか、といへば、第一が、財政の裕であつた、といふ事が、最も都合で、朝廷のお求めに應じて、何ういふ御用でも足せる、立場であつた。第二には、人物に富んで居た、といふ事が、何に付けても、都合が良かった。人物といふた所で、六十餘州を自由にする、といふやうな、大人物は、勿論少なかつた。桂にしても、漸々、豪くなつたのである。其時分には、未だ豪い、といつた所で、藩に於ての人物で、天下の人としての、桂とはいへなかつた。其の他の人にしても、皆然ういふ事情であるが、然し夫は、豪い人物の王子であつたから、仍且、つまらない奴が、うぢく動くよりは、然ういふのが、一人動く、却て非常な響きを有つ譯で、長州藩の、京都に於ける勢力は、時々刻々に、伸びて行くばかりであつた。殊に、桂は、現今の言葉で、いふ精力主義の人で、少しも間斷なく、活動して居た、といふ事が、甚だ宜かつたのである。

時に、江戸の藩邸から、便りがあつて、毛利敬親侯が、先般の勅命に基いて、彌々上京の途に就かれたが、世間を憚つて、木曾街道から微行せられる、といふ事を、通知して來た。夫に就ては、桂も、深く其の内情は知らなかつたが、勅命に依つて、上京する、といふ以上は、其の間に、必ず面白い關係が、あるに違ひない。従て、京都の事情を、精しく知らずに、入京する事は、今後の方針を、立るについても不利であるから、兎に角、敬親侯を、途中に迎へて、京都の狀況だけは、申述べて置きたい、と桂は、深く、考へて、美濃國太田宿に乘込んで來て、敬親侯がお入來になるのを、待受けて居た。

敬親侯に於ては、斯様な事は、少しも御存じがなく、日を重ねて、太田宿へ、おいでになつたのは、恰度、正午頃であつた。晝飯が済んで、一休みの後、御出立といふ事になつた。宿外れまで、おいでになると、右側の小さい、農家の前に、平伏をして居る、一人の武士があつて、此の邊りには、見掛けぬ風體の者であるから、敬親侯は、癡乎と



其方を御覽になつた。途端に、其の武士が、顔を上げると、之は又、意外千萬な、思ひも付かぬ、自分の家來桂小五郎であるから、敬親侯は、足を停た。左右に、お付申して居た、益田彈正、浦毅負、山田衛門等の人も、之には、一驚を喫して、等しく足を停める。

「彈正」

「はッ」

「那所に居るは、小五郎ではないか」

「御意に御座りまする」

「如何なる次第で、此邊に居るのか」

「拙者に於ても、更に其の次第は存じませぬ。一應、問ひ糺しまして、申上げまする」

彈正は、列を離れて、小五郎の前に來た。事情を聞いて、直ぐ引返して、敬親侯へ申上げたので、敬親侯は、非常な喜びで、桂の控へて居る前の、農家へ入つて、事情を聴く事になつた。

一一

敬親侯が、桂へ、拜謁を賜るに就て、お立寄りになつた、農家といふのは、水呑百姓といふ程でもないが、併し餘り富んで居る、農家ではなかつた。恰度、家族は、正午休みで、野良から、歸つて來た時であるが、此様粗末な家に毛利様が、入つて來る、といふ事は、夢にも思はなかつた。亦、この御方が、毛利様である、といふ事も知らなかつた。だが、御供の中の一人が、先に駈込んで、此旨を、私語たから、初めて知つて、吃驚した位である。さて、然うなつて見た所で、別にお遊へ申す、といふ程の支度で、出來る譯でもなく、只恐れ入つて、平伏して居る。敬親侯は、

聽て上り端に、腰を下されて、桂を、お招きになつた。其時に、桂が、申述べた意見は、斯うであつた。

「此度の御上洛は、勅命に依つて、と有りまするが、如何なる勅命か、其邊の事は、自分共の、窺ひ知る所では御座いませぬが、無論、天下の問題たる攘夷に就て、大切な御沙汰が下つたものと、想像を致すので御座いまするが、夫に就ては、確と其以前に、お考へもお定めになつて、萬一、此想像の如き、御沙汰が下つた時分には、何と御答へ申すか、といふ事を、豫め定めて、然る後、御參内を遊ばす可きものと、存する。今、京都の狀態より申しますれば、攘夷の朝命が、一度下れば、何人と雖、拒む事は能ぬ、而已ならず、幕府が、開國條約に、調印をした、といふ事は、朝廷の御内意を伺はず、爲したる事であるに依つて、朝廷に於ても、殊の外の御立腹で、如何に幕府が手を盡すとも、條約の勅許は、決してあるべき筈がない。結局、お許しがあるとしても、此押合で、幾年の間は、過ぎ行く事であらう、と思ふ。又、幕府が、朝廷へ對する、御奉行振、甚だ不臣を極めたもので、聽て此事は、攘夷開港の論に基づいて、起つて來るに、違ひない。従つて、勤王の説と、攘夷の論と、相並んで進むのは、火を賭るよりも明かである。朝廷を助ける者は、嫌でも、開國條約を、打壞す事を唱へなければならぬから、於て、是、佐幕開港、勤王攘夷と、一派に別れて、相争ふ事になるのであるが、我藩は、夫に就て何れの道を取るか、といふ事が、此の場合に於て、最も大切な事柄であつて、自分の、愚考する所を以てすれば、無論、我藩は、勤王攘夷の大義を以て進んで行くに限る。苟も其他に道を求める、といふ事は、宜しくない。重役にも考へはあらうが、君公に於せられても、充分の御思慮の上、御入京相成つて、然るべくと考へまする」

京都に於ける各藩、又は浪士の事情なども、細々と上申した。敬親侯は、江戸を、出發の時分から、様々な想像を描いて居たが、其の多くは異つて居て、今、桂の上申に依つて、大に啓發する處があつた。於て、益田彈正を、桂に附けて、一と足先に、京都へ乗込まして、猶怠らず、朝廷の模様等を、探る事に、努めさせたのである。

敬親侯の入京は、長州藩に取つて、此上もない大切な事であつた。他日、長州藩が、維新の大業に、參劔する事の

出来たばかりでなく、その先鞭をつけ得たのは、全く此の入京の結果で、假令、其間に、多少の失敗は、あつたにもせよ、結局は、然うなつたのであるから、此際に、敬親侯が、桂に對して、其の功を賞して、間もなく、政務座役に取立てた、といふ事は、誠に其當を得た事であつた。  
從來、京都の藩邸には、兼重讓藏、山田右衛門、中村九郎兵衛の三人が、政務座役であつたが、桂が、破格の登庸で、都合四人になつた。雖然、桂が加はつてからは、専ら桂が、一人で働いたのであつた。大體に於て、長州藩の勤王論は、各藩に比べて、頗る力はあつたが、その頃は、未だ孤立にひとしきものであつた。  
けれども、獨り長井雅樂が、其間に立つて、頻りに幕府を助ける事に、苦心をして居たので、夫が爲めに、長井に對する、桂一派の反感は、非常なものであつた。桂は、坂下事件から、長井と關係が、深くなつて居るし、思慮分別のあつた人であるから、長井が、佐幕の意見を、有つて居たから、といふて、夫が爲めに、妄りに長井を、排斥するといふが如き事はしないが、然し、元氣が溢れて、思慮の足りぬ連中は、只無暗に、長井に憎んで、殆んど長井は、藩の賊として觸廻り、長井排斥の聲は、漸々高くなつて來た。薩藩を初め、其他、毛利と、行動を共にするだらうと想像して居た藩でも、多くは、いざとなると、佐幕であつたといふ事でも、勤王派を、刺撃する事が強く、長州藩に於ても、多少は佐藩派があつたので、夫等は、長井の徳薄から、出た者の如くに解釋をされて、果は、長井を倒さなければならぬ、といふやうな、一派も出て來たのである。

三二

長井が、佐幕派として憎まれたのは、實に其態度が曖昧にして、議論の穩かであつた、といふばかりでなく、實際に於ても、公武一體の議論を、唱へた爲めに、憎しみが甚かつたのである。公武一體と、いふ事が、屢々行惱んで、和宮様御降嫁の事が、幾度か破れんとして、離れて居たのが、幸うじて歸まつた。夫が爲めに、幕府の得た利益は一

通りでなく、従つて、其の間にあつて、大に盡力をした、長井の功は、幕府に於ても、充分に認めて居るので、長井に對する信用が、一層厚くなつて來て、幕府は、長井に對して、非常な敬意を、拂ふやうになつた。之等の關係から勤王派が、長井を憎む事は、非常なものであつたが、併し、長井といふ人は、片々たる小才子とは異つて、天下の事に就ても、また藩の方針などについても、一見識を有つて居た人であるから、却々、普通の脅迫位で、意見を挫るやうな人ではなかつた。當時の事情を、書いたものを見るに、偏頗の筆を振つて、長井を、悪様に書いてあるものが多し。此時代に於て、長井が、公武一體の議論を唱へて、和宮様御降嫁に盡力をした事が、假に正しくないものとして、夫が爲に、長井といふ人物迄に、偏頗の筆を揮ふのは、善くならうと思ふ。人物は人物として、公平に評論をなす可きである。然るに、長井は、極めて詰らない、人物であるが如くに、吹聴されて居るのは、甚だ其意を得ない。後には、藩命に依つて、切腹を切らせたが、夫だけの事を以て、長井は、詰らない人だ、とは言へないのである。却て、藩の輿論に逆らうて、詰腹を切らせられる迄、奮闘をしたといふ一事を見ても、永井の剛愎にして、一見識を備へて居た事は、想像し得るのみならず、この人物の半面も、窺はれるではないか。古老の實見談に依つて見ても、長井が、東海道を、上下する時の威勢は、實にすばらしいもので、何れの宿へも、必ず大きな立札を出して、筆太に、毛利藩長井雅樂宿といふ、文字を認めて、看板を高く掲げさせたといふ事であるが、御側用人位の人物が、容易にする事ではなく、宿場々々でも、長井の泊り、となると、人足も多少、濕ふた位で、何の宿場でも、評判が可かつたさうだ。斯うした派手な事を、やつたからといふて、夫が偉い、といふ譯でもないが、長井に見識があつて、普通の大名の用人とは異ふ、といふ事は、斯うした場合にも、現はれて居るのである。  
(長井に關しては、日本及日本人へ、井上劍花坊氏が、徹底的に書いた事がある、いづれ一冊として、出版の時も來るであらうが、現在に於ては、此以外に、長井の爲人な、知り得る資料は、絶対に無いのである)  
大阪の長州邸に、留守居役をして居たのは、宍戸九郎兵衛であつた。極めて性急な、一本調子の人で、勤王論を唱

へて居た。此頃、頻りに人の風評に、長州藩の評判が悪く、殊に、和宮様の御降嫁に就て、長州藩が、働いた如くに評判されて、悪様に言はれるので、甚だ心外に堪へなかつた。折柄、長井雅樂が、上洛すると聞いたから、既う耐忍が出来ない。只一人で、馬に乗つて、京都へ、駆け付けて来て、直に長井を訪ねた。長井は、交りのある宍戸が来たから、何の氣もなく、之を迎へると、宍戸は、顔の色を變へ、言葉は激して、頻りに長井が、幕府の爲に努めるといふ點を論じて、果は、聞き苦しいまで、罵詈訾の言葉を發するので、長井は、徐に之を制して、

『お手前のやうに、左様言はれては、一々辯解する、といふ事も、甚だ迷惑である。決して、自分に於ては、お手前の言ふが如く、幕府の御用を、達して居るものではない。只此際に於て、無謀なる攘夷論を唱へ、極端なる勤王論に依つて、徳川幕府に反抗しよう、といふのは、天下の靜謐を攪亂するものであつて、決して喜ぶべき事でない、と考へたればこそ、公武一體の論に、同意をして、和宮様御降嫁に就ても、盡力をいたした次第である。只丈だけの事を以て、自分が理由もなく、徳川幕府の爲に、努めるやうに思はれては、甚だ迷惑千萬であつて、深くお考へを願ひたい、と思ふ』

『然らば、お手前は、決して幕府の御用を、勤めて居るのではなく、天下の爲と心得て、幕府を助ける、と、斯う言はつしやるのか』

『無論の事、此の雅樂に、私の心はない』

『然し、我藩論が、勤王攘夷と決したる場合には、如何なされるか』

『假令、左様相成つたにしても、悪いと思へば、御同意を申す事は、出来ない』

『君命ならば、何となさる』

『さア、君命とあれば、自分に於ても、又考へを直さなければならぬが、併し、君命とあつても、宜しくないとと思ふ事ならば、一應は御諫言申上げる。それに従ふにしても、夫から後の事である。只善惡に拘はらず、君命ならば従ふ』

ふ、といふ事は、致さぬ意でござる』

此押問答の間に、九郎兵衛が、不圖、床の間を見ると、會津藩からの贈物が積んであつた。之を見て、九郎兵衛は膝を進めた。

『最早お手前と論じ立てをする必要はない、と思ふ。床の間にある、會津藩よりの贈物、こりや、何うした仔細で御座る』

長井は、冷やかな笑ひを洩らして、

『斯ういふ事にまで、立入つて御詮議立は、甚だ迷惑をいたす。未だ我藩より、公然、幕府に對して、敵對の事を明かにした譯でもなく、只意見が異ふ、といふまでの事であるのに、徳川の親藩たる、會津藩より、贈物を受けたからといふて、其所まで立入つて、お咎めをされるは、甚だ迷惑千萬ぢや』

長井は、努めて穩かに、辯解の勞を取つて、宍戸を、程よく歸さう、とするのだが、却々、長井の言ふ事を肯かず散々、諍そつた末に、宍戸は、

『御手前の如き、腸の腐つた武士と、最早、此上の諍ひは仕らぬ。只今日限り、絶交を致すに依つて、左様承知あれ』

『甚だ迷惑ではあるが、絶交するといふのならば、致し方がない。如何にも、承知いたしました』

長井も、據所なく斯う答へた。宍戸は、顔の色を變へ、席を蹴立つて、歸つて了つた。

四

宍戸から、長井の事を聞いて、藩士の中でも、極端な議論を、唱へて居る連中は、非常な腹立て、その中には、長井を斬つて了へ、といふて、騒ぐ者もあつた。併し、桂が、巧に押へて、然ういふ事のないやうにはしたが、夫が爲

に、今度は、桂が、疑はれる事になつて、漸々、事は面倒になつて、行くばかりである。而已ならず、他藩の連中や、浪士から見ると、何となく毛利は、首鼠兩端を、持して居るやうにも思はれ、敬親侯が参内して、攘夷の密勅を受け、といふ事は、既う隠れもない事實であるが、之と同時に、長井の一派が、幕府の爲に、公武の間を斡旋する、といふ事も、明かな事である。而て見ると、どうしても、毛利は、佐幕勤王の、使ひ分けをして居るやうにしか、見えないので、何となく毛利に對する、世評が宜しくない。桂は、長井に對して、坂下事件の一條からの關係があり、又妹婿の來原との、關係もあるし、旁々、此際、長井に對して、直接に手をつける、といふ事が出来なかつた。折柄、江戸の藩邸より、周布政之助が、上京して來た。桂の爲には、此上もない好機會になつた。長井が、曾て九條關白に、差出した意見書が、公武一體の事に、間接の建白であるから、其執筆者が、周布である、といふ事實を捉へて、乃で、嚴しく周布に談じた。周布も、之には些か閉口して、其取扱ひ方を、桂に頼むまでになつた。其の事が、敬親侯の、お耳に入つて、周布は、國語を命ぜられ、同時に、長井も、歸國の君命を、被る事になつた。此の一條から、桂の名聲は噴々として、管に藩中ばかりでなく、他藩の間にも、高くなつて來た。従つて、敬親侯の御寵愛も、日に厚く、今は百事、桂に相談しなければ、事を決しない、とまでに、進んで來た。或日、桂は、御前勤めの際、竊かに言上致したい事がある、といふて、左右の人拂ひを、願つた。敬親侯は、左右の近親を遠ざけて、桂と御對談をなさる、といふのだ。其時に、桂は進んで、

「我藩に於ては、已に朝廷の御信用も厚く、密勅の如きも、他藩に先んじて、お下げ渡しになる、といふやうな事情で、諸藩の間に、信用も厚い。此場合に、猶進んで、我が藩の勢力を造らなければ、再び此機會は得られまい、と思ふ。夫に就ては、當時、在京中の諸藩の志士を、一堂に集めて、君公より、親しくお言葉お下し賜はつたならば、夫等の人の奮發も一段とついで、我が藩の信用は、彌が上にも、厚くならうかと存じまするが、此の儀は、如何で御座いますか」

敬親侯は、暫らく考へて居たが、

「其の儀は、至極の良策、と考へるが、併し、諸藩の浪士を會合させる事は、公儀に於ても、堅く禁ぜられて居るに依て、良策ではあるが、其事は行はれまいか、と思ふ。況てや、予が、自ら其席に列して、彼是申す、といふ事は、公儀へ對して、些と憚る次第であるが、其の點は、どうあらうか」

「いや、其の儀に就ては、御心配御座りませうまい。と、申しまするものは、改めて君公の、お名前を以て、會合を爲さしめるのではなく、私の一存を以ちまして、浪士を説き、各々の心得を以て、集まりまする場所へ、御前が、お光來遊ばした、といふ事に就ては、格別、公儀のお咎めもなからう、と存じまするし、萬一、夫があると致しても、私に於て、お引受けを致して、公儀の申譯は、必ず相立てます。是非とも、此の儀を御採用、願ひたく存じます」

於、是、敬親侯も、深く考へた末、桂のいふ通り、斷行する事になつた。當時、本願寺の所有に、屬して居た、翠江館といふのがあつた。其所に於て、會合を催す事になつて、桂から、夫々へ觸を廻した。集まつて來たものは、水府藩士で梅澤準次郎、梶源次右衛門、金子覺之進、大故事藏、林五郎四郎、川股才助、西宮和三郎、赤澤銀藏、下野準次郎、住谷七之允、高橋孝藏、岡部藤助、大野謙助、林長左衛門、土州藩士で、平井收次郎、武市半平太、肥後の藩士では、住江甚兵衛、宮部鼎藏、佐々淳藏、山田十郎、川上彦齋、石州津和野の藩士福羽文三郎、對州の藩士多田莊藏、鈴木辰右衛門等の人々であつた。

五

舊幕時代に、一番喧しかつたのは、浪士を集めて、大名が同席する、といふ事であつた。それを、桂が、敬親侯に勧めて行らせたのは、實に大膽な行動であつた。假し、桂には、充分の考へがあつたにもせよ、思へば危険な事を行

たものである。翠江館へ集まつた、浪士の中で、一二の人物に付いて、言ふて置きたいのは、第一が住谷七之允と、いふ人である。此人の父は、虎之助といつて、水府藩でも、有名な人であつたが、慶應三年六月十三日に、京都の松原河原、本國寺の傍らに於て、土州藩士の山本旗郎、といふ者の爲めに暗殺されて、敢なき最期を遂げた。夫て、七之允が憤慨して、多年苦心の後、父の仇は、山本であるといふ事を、探り知つて、弟の忠次郎と共に、明治三年の二月二十四日、東京の神田旅籠町に於て、首尾能く、復讐を遂げて、直に其場から、彈正臺へ、自首して出たので、一應取調の上、兄弟共に、水戸藩へ預けられて、按察使の渡邊昇や、刑法判事の中島錫胤が、保官になつて、七月十日に、刑部省から申渡しがあつた。序に其申渡書を、紹介して置かう。

水戸藩 住谷七之允  
同 住谷忠次郎

其方共、父寅之助儀、先年、京都松原河原に於て、暗殺せられ候に付、復仇之儀、藩廳へ相届、探索及候處、高知藩山本旗郎、仕業之證跡を得、同人を討果候段、引合之者共、一同申合、符合に付、無難。

庚午 七月三日

刑部省  
之が明治になつてからの、最後の仇討であつた。此の七之允は、最近迄存命して、永い間、裁判官をした上に、退職の後、栃木縣の栃木町に於て、辯護士を開業して、住谷毅と、稱して居た。土州の平井收次郎は、明治になつてから、贈位の御沙汰に接したほどの、熱烈な勤王派の志士であつたが、維新の際に、切腹して了つた。此人の養子になつたのが、憲政黨内閣の時分に、警視總監を勤めた、西山志澄といふ人である。土州の勤王家としては、却々の先輩であつた。武市半平太は、先頃も、其の末亡人が、皇后陛下に、拜謁を賜はつたほどで、土州藩士中の勤王家としては、最も過激の議論を、有つて居た人で、容堂侯の、參政職を務めて居た、吉田元吉といふ人を殺して、夫が爲めに、罪を得て、遂に切腹をして、相果てた人である。宮部卿は、後に池田屋事件で斬死をしたが、肥後の勤王家と

しては、有名な人であつた。山田十郎は、後に信道となつた人で、農商務大臣まで、やつたから、大抵な人は、知つて居る。川上彦齋は、暗殺の名人で、此人が、自から手に掛けた者ばかり、殆んど三十幾人といふ數で、現に有名な、佐久間象山の如きも、彦齋の刃に罹つて、瘞れたのである。彦齋は、明治三年に、政府の爲めに、斬られて了つたが、維新の際には、暗殺を以て、商賣のやうに心得た者も在つて、例の新撰組は、殆んど暗殺請負の、會社の如きものであつた。個人としては、土州の宮川助五郎とか、此川上とかいふ連中が、最も世に聞えた、暗殺請負人であつた。思へば面白い事である。石州津和野の福羽は、明治になつてからの、美静といふ人で、歌が、大層上手であつた。然し、此の人は、風采が、甚だ昂らず、甚い尙儀であつたから、見た所は、誠に醜かつた。雖然、津和野藩から出た、勤王家としては、此人を、第一に推さねばならぬ。一々説明をして行くと、夫々に履歴はあるが、まあ、重立つたものはこれだけで、斯うした連中を集めて、翠江館一夜の宴會が開かれた。折柄、敬親侯は、本願寺へ參詣に來られた序で、といふ名目の下に、此の席に臨んで、浪士に對して、一々盃を下された。而已ならず、大いに激勵して、王事に勤めるやうに、といふやうな、事を言ふて歸られたので、さア、京都に於ける、毛利の評判は、非常な事になつた。夫も、是も、皆な桂の盡力であつて、浪士の方から見れば、桂のあつた爲に、長防二州の藩主たる、毛利侯と隣組で、對談も能たのだ、と、其の喜びは、自然と、桂の人望になつて、桂は、勤王浪士の元締とも、いふ可き地位になつた。桂の計畫は、斯ういふ風に、着々、成功して行つた。

然るに、一つの事件が起きて、夫が爲めに、桂は、一段と男振を上げた。それは、對州藩が、全く毛利の支藩なるが如く、切て毛利と、行動を一つにする、といふやうな關係が、生じて來た、といふ物語である。

### 對州藩の懐柔

一

對州の宗家に、意外の事件が起きて、夫に桂が、關係した顛末を演べよう。  
 宗家の先祖は、太政入道清盛の四男、新中納言知盛の子が、父、知盛の戦死した當時、戦亂の災禍を遁がれて、九州へ落ち込み、幾多の苦心をした末に、對島へ渡つて、宗家の基礎を築いたのである。  
 對島は、渺たる海中の、一孤島であるが、直ぐ前に、朝鮮の釜山を、控へて居て、天氣の好い日には、釜山の海岸に、人の動いて居るのが見える、といふ位に、僅に距離を隔て、相對して居るのだ。従つて、夙くから、往來交通して、今日の言葉でいふ、貿易といふやうな事は、遠い昔から、行はれて居た。全體、斯うした小さい、島國の人は、何うしても氣が荒い上に、動もすれば、外國の人に、接し易い位置に居るから、一般に、内地の人とは、その氣風も異つて居る。

然し、徳川の天下が、十三代續いて、二百餘年の泰平を保つ間に、江戸へも語るし、京都へも上つて、諸侯との交際も、大分烈しくなつて、藩士は、無論の事だが、島の者にも、内地の風俗や、習慣が移つて來た。幕末時代の、對州人は、すべての調子が、異つて居た。島の收穫は、固より知れたものであるが、他の大名に、見る事の出来ない、貿易の上から、來る收穫が、容易なものではなかつた。假に、十萬石の諸侯と、同じ格式位は、之に依つて、保たれたのである。  
 當時、江戸詰の家老に、佐須伊織と、いふ者があつた。此人は學問も、相當にあつたし、武士の心得べき事は、一通り辨へて居たが、何分にも、因循な性質として、大きな失策もない代りに、對州藩の家老として、何事か起きた時分には、牙えた取捌きをする、といふ事も、出来なかつた。固より泰平の世に、何んな智恵を、揮ふた所で、宗家の勢力を、内地に振ふる事は、出来ないに極つて居るが、併し、世の中が、騒擾くなつて來て居た、嘉永安政から、文久に跨る頃には、泳ぎやうに依つては、宗家の立場は、相當に働き得る筈であつたが、今言ふた通り、肝腎の佐須が、因循姑息の人であつて、宗家の現状を、維持さへすれば宜いといふだけで、極めて小さい考への人であつたから、力めて時事の問題には、參與らないやうにして居たので、宗家の力は、更に延びなかつた。  
 恰度、佐須が、京都へ、上つて來た事があつて、夫が何の用で來たか、といふ事が、判然判らない爲に、有志の間にも疑問になつて、人が集まれば、其の噂ばかりであつた。或日、桂が、福羽文三郎を招いて、窃と、入智恵をした。夫は、何ういふことであるか、といふと、福羽は、前にもいふた通り、石州津和野の藩士で、尙僕でこそあつたが、却々に元氣で、讀書の力もあり、議論に、巧な人であつたから、桂が、夫を使つて、宗家を動かさう、としたのであつた。

對州は、海中の一孤島ではあるし、彌々、攘夷が行はれて、盛んに外夷と、争ふ事になれば、一番先に、外夷のお見舞を受けるのは、對州である。従つて、攘夷問題に、關係の深い諸侯としては、宗家が第一であらう。然うした利害の、關係の深い宗家であるから、先づ之を説き込んで、攘夷の味方にする、といふ必要があるし、又、對州藩に於ても、之に應じて、毛利のやうな勢力がある、藩の後援を得る、といふ事は必ず考へて居るだらうから、福羽に説かせたならば、無論、攘夷派に傾いて來るに違ひない、と見込んだのであつて、攘夷派とは言ふても、實は、毛利派に引付けようとするのであつた。

福羽は、機會を得て、佐須に、面會をした時、諄々として、攘夷の趣意を説き、勤王の大義をほのめかして、同意を求めた。然るに、佐須は、首を掉つて、誘ひに應じなかつた。福羽が、口を酸くして、説き付けよう、とすると、佐須は閉口して、幾分の疍癢紛れから、

「福羽さん、お手前の言はれる事は、吾々のやうな、海中に離れて居る、小さい島國の人間が、口外すべき事でないと思ふ。攘夷論などが、行はれた日には、第一番に、槍玉に上るのは、我が藩であつて、何うしても、敵艦の來襲は、先づ我が宗家が、一番に受けなければならぬ。左様相成らば、瞬をする、間に、我が宗家は、潰れて了ふ。左様な、馬鹿氣た事をする、といふ事は、出來ないではないか」といふ意味の主張で、福羽の相談を、斥けて了つた。

一一

佐須の議論は、餘りに卑屈な、怪しからぬ説とは思つたが、今の場合、福羽は、強て之を争ふのは、却て得策でない、といふ考へて、遂に議論は、程よく切上げて、歸つて來たが、心中、甚だ悦ばなかつたので、桂に此事を話して對州藩の態度を笑つて、之を引付ける事は、それで、沙汰済みになつた。

福羽は、佐須の言葉が、癪に障つたので、夫からは、會ふ人毎に、佐須の言ふた事を傳へて、頻りに對州藩の、肺腑甲斐なき事を、嘲けた。夫が漸々に、廣まつて來て、何日しか、藩士の耳にも、入るやうになつた藩士の中には、熱烈な勤王論の人もあれば、又、攘夷派もあつたから、然うした側の人々が、之を聞いては、打捨て置けぬ、といふ説を唱へるものが多くなつて來た。中央の問題や、議論には、餘り關係のない人でも、佐須の答辯は、いかにも意氣地のない事である。同じ斷わるにしても、何とか口實があつたであらう、之れでは全然、對州の藩士は、腰抜けばかり揃つて居るやうに、思はれても、辭解の辭がない。苟も家老の重職を、帶て居る、佐須の言としては、打捨て置く事

は、出來ぬ、宗義智以來、三百年も續いて居る、對州藩を、侮辱したものであると、憤慨して、莽りに佐須を、攻撃して居たが、遂には佐須に面談して、充分に、之を攻めた上、對州藩の面目を、保つ事をしなければならぬ、といふ事になり、四十一人の同盟が成立つて、乃て一同が、藩邸へ乗込んで來て、佐須に、面會する事になつた。

佐須は、餘り人数が多いから、面倒ぢやに依つて、逃げようと思つたが、遂に逃げられずして、已むを得ず、面會したのであつた。先づ談判委員ともいふ可き、役廻りになつたものから、詰問をはじめた。

「聞く所に依れば、津和野藩士、福羽文三郎殿に對して、我が藩の面目に、關するが如き、卑屈の事をいはれたといふことであるが、果して、さういふ事が、あつたのでござるか」

「如何にも、然う答へたに、違ひない」

「何故に、然ういふ事を、仰せられたか」

「自分は、然ういふやうに考へたから、答へたのぢや」

「こりや怪しからぬ。お手前に於ては、左様思はれても、我々藩士に於ては、甚だ迷惑千萬な事である。お手前の仰せに依れば、異國に來襲をされる事が、恐ろしいから、攘夷の説に、參與の事は出來ぬ、といふ意味に聞きとれる、朝廷の思召が、既に攘夷に決して、夫が爲に、今や諸藩の間にも、様々の議論が、湧いて居る。此の場合に外夷が押し來るのが恐ろしいとか、或は、戦へば必ず負る、といふやうな卑怯な詞を以て、他藩の人に答へた、といふ事は、吾々の如き者ならば格別、苟且にも、對州藩の御家老ともあらう、お手前が、然ういふ事を言はつしやる、とは、不謹慎も甚だしい。お手前は、これを、何と考へられるか」

「之は甚だ迷惑千萬な。然ういふ意味から申したのではなく、詰り、我が藩の位置から考へても、又、藩の力から申しても、福羽氏が、言ふて來られたやうな事に、關係いたすのは、宜しくないと考へたゆゑに、お斷りする口實と

して、申した迄の事で、今に至つて、左様に攻められるのは、甚だ迷惑千萬の次第である』  
『いや、そりや、異つて居る。福羽氏に、お断りをした次第を、言ふて居るのではない。對州藩の家臣には、人間らしい者がないやうに、又、戦さを始めれば、直にでも負るやうな事をいはれて、お断りをしたと、いふのは、我々藩士の面目、宗家の不名譽、此上もない、といふ考へから、斯く一同揃ふて、お手前の精神を、伺ひに來たのである』

漸々、懸合が、荒くなつて來て、言葉も激しくなれば、情も昂ぶつて來るから、自然、不穩當な態度も、見えて來た。斯うなると理窟よりは、感情の争ひで、佐須も、之は面倒だ、と思つて、

『お手前が、如何にお攻めになつても、自分は、自ら信じた事を、いふた迄の事であつて、夫が、若し悪いとならば、藩主より、お咎めがあつて然るべきである。お手前の方、お懸合を受ける理由は、更にないのであるから、此上の議論は、御免蒙る。殊に拙者は、藩用も多端であるから、之にて失禮いたす』

と、言ひながら立上つた。一人の若侍は佐須の袖を控へて、

『先づ待たつしやい。何れとも、話の決せざる内に、我々を茲に捨て置いて、貴殿ばかりが立去る、といふ事は、無禮で御座らう』

『別に無禮とは、考へ申さぬ』

『なに、無禮ではないと』

『左様』

茲に至つて、若侍の血は、沸くやうになつて來た。勤忍袋が切れて、押へた袖の手先を拂はう、とした、佐須の手を押へて、グツと、前へ引いた。

『之は怪しからぬ、剛暴な』

『何が、剛暴だ』  
といひながら、力に任せて、前に引いたから、踰々と、踰跟いて來るのを、誰か知らぬが、足をすくつた。ばつたりと、佐須は倒れた。忽ち一同が總立になつて、手取り、足取り、其場に引据ゑて、佐須が、差して居た、小刀を引抜き、暴れる佐須を押へ付けて、その手に、小刀を持たせ、四十一人が、寄つて集つて、詰腹を切らせた。佐須の息が絶えるのを見て、一同は、鬨の聲を上げて、引揚げて了つた。

如何に、憤激の結果とは、言ひながら、苟も、家老の重職に居るものを、藩士が、多人數の力を借りて、詰腹を切らせた、といふやうな事は、餘り例のない事だ。假令、立派な理窟はあるにしても、甚だ穩かの事ではない、と思ふが、といふて、之を表沙汰にする、といふ事も出來ないので、之に就ては、宗家も、非常な苦心をしたが、幸ひに事が、京都であつたので、辛うじて、秘密の中に、濟ませて了つた。

然るに、幕府に於ては、絶えて油断なく、諸侯の動靜に、注意をして居たので、大概の事は、筒抜けに知れて來る宗家に對しても、又注意を怠らず、頻りに其内情を、探つて居た、といふものは、對州藩が、まだ全く、勤王派になつて居ないのだが、動もすれば、夫に傾きさうな状態があるので、注意を怠らなかつたのである。

處が、此の頃、藩の内情が内揺して、三四日といふものは、藩士の出入が激しく、何か異状が、あつたやうに見えたので、窺に、邸内へ、人を忍ばせて、内情を、探つて見ると、之は又、意外千萬な、藩士の中に於て、勤王攘夷の議論を、唱へて居る者共が、寄つて集つて、佐幕派の家老、佐須伊織を、殺した、といふのであるから、是は、捨て置く事が、出來ぬとあつて、嚴重な處置を取らなつたが、打てば響くの譬で、此事が、疾くも桂の方へ、知れて來た。原因はといへば、桂が福羽を煽動した所から、起きて來た事件で、殊に、之を此儘に、捨て置いて、宗家が處



分される事になる、と、延いて、勤王派の一頓挫にもなるから、折から滞京中であつた、敬親侯に見え、窃に、此事を申上げて、此際に於ては手輕に事を濟ませて、對州藩に、何事もないうちにしてやらぬ、と、勤王派に、響きを起すばかりでなく、長州藩の勢力にも、關係する事である、といふて、敬親侯を説いた。其の結果として、敬親侯は、幕府の役人に向つて、穩便の計らひをするやうに、運動をしたので、然しも一時は、評判の事件も、之が爲めに、消えて了つた。

宗家に於ても、之を公表にされては、藩の威信にも關し、宗家の恥辱にもなるのであるから、毛利家の助言を幸ひに、宗家からも、様々に揉消し運動を、やつたので、此事は、始末書位で、納まりが附いたのである。

夫に就ても、桂の働きは、何時か評判になつて、例ながら、桂といふ者は、何事にも注意して、能く世話をして呉れる、といふので、益々評判が好くなつて來た。

「はッ、申上げます」

「何ぢや」

「對州藩の扇源右衛門と、申します御方が、御目に掛りたい、といふて、參つて居りますが」

「うむ、扇、好し、此方へ、御案内しろ」

桂は思はず、笑を洩した。原來、例の一條に就て、會ひに來た、と見える。此上は、既う對州藩も、我が藥籠の中に、入つたも同じである、と、私かに喜んで、待つ所へ案内されて、源右衛門が、通つた。一應の挨拶が終つて、源右衛門は、膝を進めた。

「今日、御伺ひいたしたのは、餘の儀では御座りませぬが、是非、貴下を、煩はしたい事が御座つて、お願ひに出てましたので御座ります」

「は、ア、不才の吾等、何のお役にも立つまいが、事柄に依つては、助力をさせよう」

「第一に、お願ひ致したいのは、自今、我藩に對して、公邊の事に就ては、後見の役を、お勤め下さる譯には、なりませんまいか」

「えッ、拙者が、貴藩の後見を……」

「左様、公邊へ對する事は、大小となく御相談に、お伺ひ致す事に仕るが、御示教下さるまいか」

對州藩に於て、佐須伊織の事件を、表面に處分されたらば、宗家の興廢にも關するほどの事であるのを、桂の盡力に依つて、無事に、纏まりが附いたので、夫等の點から考へて、桂は、才智も、勢力も、俱に備はつて居る、といふ事が判つたので、何事に付けても、對州藩としては、毛利に倚るのが、得策である。夫には、桂を、後見にして、毛利藩と對州藩を、結び付けて置けば、將來の爲にも、好都合である、と、疾くも考へたのであつた。對州藩に於ては、智者と言はれた、源右衛門は、剛巧な者である。桂も、之が爲めに利用される、といふ事は、直ぐ判つたのだが、利用されても、また利用する、といふ事もあるので、其事は、遂に承諾した。源右衛門は、更に膝を進めて、

「就いては、お言葉に甘えて、お願ひをいたしたいのは、弊藩より先年來、幕府に對して、十萬石の食料、其の他軍艦等の費用について、特別の給與を、請求致して御座るが、幕府は、夫に應じて呉れる筈であるにも拘はらず、未だに實行されないのは、弊藩として、非常に困難を、感じて居る事である、に依つて、貴下の御盡力に依り、幕府へ、然るべく御周旋の儀を、願上げたい」

「宜しい、承知いたしました。其儀に就ては、自分の力には、及ばぬ事であるに依つて、君公へ申上げて、君公より、幕府へ催促を、いたす事にいたさう」

源右衛門は桂が、快諾して呉れたので、大層喜んで、猶將來の事も頼み、其日は、歸つて行つた。何うして、斯ういふ事を、桂が、容易く引受けたか、亦、源右衛門が言ふた、十萬石云々の事は、何ういふ意味合

の事であるか、夫は詰り、對州藩が、表向の收穫が、少しにも拘はらず、海岸防禦の件に付て、幕府の命の通りに、切てを備へる事にするには、却々、無駄な費用がかかる。今日の言葉でいへば、即ち海陸軍の防禦費である。夫を補助して貰ひたい、といふ意味の話なので、桂は、其の話の事情は、能く知つて居るのであるから、直に承諾をしたのであつた。敬親侯へ、此の事を申上げると、敬親侯に於ても、御承知に相成つて、追て、幕府へ、申し次ぐ、といふ事に、なつたので、對州藩一同の喜びは、一通りではなく、猶其の後も、屢々、往復して居る中に、萬一、幕府が、前の約束を、遂行しなかつた時は、現金で、五六萬兩は、必ず幕府より、支出させる事にする、といふ事を、毛利侯が、受合つてくれた。之等の事情から、對州藩は、今や、毛利の下風に立ちて、全然、毛利と行動を共にする、といふ事になつた。於是、毛利藩から推舉して、勤王列藩の名簿に、對州藩を、加へる事になつて、嵯峨大納言の手を経て、攘夷の密勅を、朝廷から、下さるゝ事になつた。對州藩としては、之以上の名譽は、恐らくなからう。

### 島津久光の上洛

幕府の末路に於て、文久年間が、京都と江戸の出來事が、最も多い年であつたが、一年の間に、前後二度までも、勅使が下向したほどである。

當時の事情を、少しく説明して置きたい、と思ふが、是は、長洲藩の飛躍と、桂の立働きを、知る上に於て、殊に必要なる事であり、且は、薩藩との關係を、知らうとするには、先づ一般の事情から、述べて行くのが、順序であらう。明治になつてからの、薩長二藩は、猶腐れ縁が、四十年も續いたほどであるが、内部へ入ると、双方で、嫉妬褊執互に排擠の手段が、有ん限り、盡されて居るのだから、實に可怪なものであつたが、その原因は、文久の當時から、既に芽んで居たのであつた。

稀世の名君たる、島津齊彬が、愈よ病が、革まつた時、遺言して、異母弟久光の子を以て、自分の亡き後は、島津の當主に、直すやうにと、いふ事であつたから、齊彬の死後、その通り實行された。其處で、久光は、今の言葉でいふ、親權があるから、自然、伴が藩主になつたので、後見といふ格式は、表面の事で、實際に於ては、藩主の如くになつた。子供の年齒が幼ないのであるから、薩藩の實權は、久光の手に歸してしまつた。

斯くて、久光は、藩主に代つて、愈よ上洛する事になつた。朝廷の方からも、久光の上洛を促したので、此事は決

したのであつたが、其際に、流罪中であつた、西郷吉之助は赦されて、歸つて來た。  
 薩藩に於て、齊彬を亡ぶたのは、非常な損失であつた。齊彬は、三百諸侯中の名君であつた。若し、此人が、もう少し生延て居られたら、或は、毛利に先んじて、大に中央へ勢力を、張つたかも知れぬ。  
 幕府としては、毛利に對して、餘り好感を、有つて居なかつたが、島津に對しては、それほどでもなく、多少は、煙たく思つて居たが、齊彬の人格は、よく親藩の間にも知られて、越前の松平慶永の如きは、非常に、齊彬を、信じて居た位で、水戸の齊昭も、齊彬には、ひどく惚れ込んで居た。  
 福井藩は、純な親藩ではないが、慶永は、田安家からの養子であつたから、先づ親藩の如き、關係にはなつて居たのだ。  
 (慶永は、春嶽の事で、齊昭は、烈公である)

其他、阿部伊勢守、伊達宗城、山内豊信等の諸侯も、齊彬には、深く傾倒して居たのであるから、幕府の方でも、齊彬には、信用を、拂つて居た事、いふ迄もなかつた。

齊彬は、勤王の志、厚き人ではあつたが、毛利の如く、倒幕の野心は、あまり深くなかつた。出來得る事なら、幕府の内部に、改革を加へて、もつと、朝廷との關係を善くさせたい、と考へて居たのであるから、齊彬が、京都や江戸に、勢力を張れば、いかに毛利でも、那れ迄に、京都へ、進出する事は、出來なかつたであらう。盈れば缺るの譬の通り、やがては、幕府の衰運も、巡り來るべきものであつたらうが、毛利の思ふやうに、其力は、延びなかつたに違ひない。

殊に、家臣を、よく鑑る人であつたから、西郷、大久保、小松の如き、名臣を、巧く使ひましたらうし、また、島津將曹のやうな、齊彬の相續に、反對したもの迄も、終には引付けて、自由に、その手腕を、揮はせる事も、必ず行つた、と思ふ。

然るに、齊彬は、安政五年の夏、時疫に罹つて、早世をしてしつたから、久光の子、忠義が、順養子として、島津家の主人となり、藩の全權は、却て久光の手に歸してしまつたのである。  
 是等の事情については、此全集の西郷と大久保の編を、照合して見れば、よく解る、と思ふが、いづれにしても、齊彬の死は、薩藩の爲に、決して利益ではなかつた。

小松は、智慧の深い人であつたが、どちらかといへば、退嬰主義の方で、西郷や大久保の如く、進んで、倒幕に、全力を傾ける、といつた遺方は、爲し得ないのであつた。

けれども、當時の政情に面して、薩藩を、有利の立場に置きたいといふ、考は、充分に有つて居たのであるから、たとへ、自分の心には副ないでも、倒幕でなければ不可と、見て取れば、敢てそれも辭さぬ、といふ程度の人であつた。殊に、西郷と大久保に對しては、よく理解して居たから、那れ迄に、進んで行つたのである。西郷の流罪赦免について、小松の盡力は、頗る效があつたのである。

齊彬の心事を、よく知つて居て、その通りに、進んで行つたのは、西郷であるが、時勢の推移と、幕府の内情を、見て、倒幕の道を進るやうになつてからは、西郷の遺方は、全く違つて來たのである。

が併し、久光に、敬意を、有たなかつた事は、終始一貫で、久光も、西郷を、餘り重用したくなかつたのは、改め

ていふ迄もない、と思ふが、その間に立つて、よく調和の役を勤めたものは、大久保であつた。  
 小松を動かして、西郷赦免に働かせたのは、大久保であつた。西郷を、中央へ、送り出して、後顧の憂なからしめたのも、大久保であつた。此一事から見れば、西郷と大久保は、異體同心であつた、ともいへる。  
 西郷の赦免に、小松が、よく盡力したのは、大久保の勧めばかりでなく、もう一つの事情があつた。

小松と大久保が、いかに藩中の傑物であつても、京都や江戸へ出たら、手も足も、出なかつたのである。つまりは薩藩の傑物であつて、天下の傑物ではなかつた。大久保の如きは、智と断に於て、西郷に、すぐれては居たが、各藩の有志と、何等の交渉もなく、浪人の中に出て、巧みに操縦して行く、といふ事は、大久保の性格が、それに適して居なかつた。  
殊に、當時の身分は、未だ卑くして、いづれの諸侯にも、直接に面會して、時事を論ずるの、資格もなければ、自由も有つて居なかつたのである。  
その點になると、西郷は、各藩の有志に知られて、浪人の間にも、可成りに信頼されて居たから、中央へ乗出して働く場合には、頗る便宜を、有つて居たのみならず、尾州の慶勝侯や、越前の慶永侯にも、よく知られて居たから、非常に、好都合であつた。

一一

齊彬の養女、篤子姫が、將軍の家定に、いよく興入する、といふ時には、齊彬の名代として、江戸まで、附いて行つた。

表面は、近衛家の養女として、興入をしたのであるが、西郷は、國元から附いて行つて、萬事の準備は、西郷の手に依つて、爲されたのであつた。

京都に居て、嫁入道具を、買集める事も、すべて、西郷が、自身でやつたのであるが、近衛家の老女、村岡が、それを見て、

「西郷さま、あなたは、實に偉い御方ぢや」と、いはれて、西郷は、苦笑し乍ら、

「どぎや譯で、己どんな、偉いのでござすか」

「あなたは、女子の事なぞは、少しも御承知ない、と思つて居りましたが、このたびの御買物を見ますと、無益の物は、一つも御座いませんから、それで感心いたしました」

「ははア、それで、偉いのでござすか」

「殿方といふものは、女子の持物などについて、本統に、氣のつくものではありません。殊に、御婚禮に、入用の道具は、女子でも、よく判るものは、少ないのであります。あなたが、御買集めになりました、諸道具を見ますと、何一つ不用なものはなく、いづれも、必要なものばかりでありますから、わたくしは、實に驚き入つたのでござすます」

「己どんは、調度掛でござすからな」

「たとへ、調度掛を、遊ばして居る御方でも、これだけ、解つて居るものは、ありません」

「こや、きつかお賞に預かい申して、恐縮でござす」

「わたくしも、あなたのやうな、兄さまを、有つて居りましたら、さぞ幸福の事だらう、と思ひました」

「ハツハ、、、」

西郷が、頓狂な笑聲に、村岡も、誘はれて笑ひ出した。

木戸のやうな、才氣のある人が、斯うした事に、明るいといふのは、誰にしても、當然と思ふであらうが、西郷の如き人に、斯かる逸話のある事は、實に不思議の至りである。一見、茫洋として居る、どこといふて捉まへ所もない、大きな型の人物にも、斯うした細心の所があつた、といふのは、驚き入る外はない。

此婚禮について、村岡は、近衛左大臣の名代として、西郷と共に、江戸へ出た。萬事は、西郷を、相談對手にして、興入の儀は、無事にすませた。

西郷の身分は卑く、藩に於ける、役柄も高くはなかつたが、齊彬の名代といふので、幕府の方でも、疎かには扱はれず、家定將軍にも、内謁した位であるから、其他の大きい役人や、諸侯にも面會し得たのであるが、尾州侯に知られたのは、此時の事であつた。越前侯には、その前から、齊彬が、よく話して居たから、西郷が、どういふ人か、といふ事は、よく知られて居た。水戸の隠居、烈公には、藤田東湖を通じて、多少、知られて居たばかりでなく、齊彬の御供をして、小石川の御邸で、逢ふて居る。西郷編にも、述べてある通り、西郷には、初めて逢ふて、すぐ感心させられる人が多く、坂本龍馬にしても、中岡慎太郎にしても、將た、小河一敏にしても、元田永孚にしても、みな初對面で、すつかり敬服して居るのだから、大きい諸侯なぞも、それと同じ事であつたに違ひない。他日、西郷が、齊彬に死別しても、斯うした事情から、既に各方面の知己が多く、江戸や京都を、往來して居るうちに、浪人や有志とも交り、その方面にも、少なからず信者を、有つて居たから、此一事は、小松や大久保の、遠く及ばざる所であつた。久光が、いくら西郷を、好いて居らぬにしても、初めての上下に、西郷を要するとあつては、赦免の嘆願を、肯く外はなかつた。

三二

西郷が、島から赦されて、歸つて來ると、すぐ久光の怒りにふれた。西郷には、どうしても久光の上洛が、良い事である、とは思へなかつたのである。當時の京洛は、戦亂の巷よりも、至難しくなつて居たから、さうした所へ、事情に迂い、殊には、氣隨氣儘の久光が、出てゆくといふ事を、あまり有利とは、考へて居なかつたのだ。久光侯は、地ごるぢやからな」といつて、嘲笑

したのは、此時の事であつた。地ごるといふのは、薩摩の方で、早くいへば、田舎者といふ事である。

久光に拜謁した時も『あなた、京都へ、出て行かれて、全體、何をなさるつもりですか』

と、いつたので、久光は、激怒して、席を立つた。島から赦されて來て、すぐ失敗なんぞは、西郷らしくて、頗る面白い。

併し、久光の怒りは、小松と大久保が、頻りに取做して、西郷に、過言の謝罪をさせたから、それで済んだが、久光の心中、頗る平かならぬ所はあつたのだ。

下之關へ、先乗りした事は、豫め許しを、得て居たが、下之關から、大阪へ先乗りする事は、久光の許しを得ず、決行したのであつた。

久光は、いよ／＼怒つてしまつた。一度は勘辨しても、二度、三度と、自分を無視するが如き、態度を以て、勝手な事をされては、久光の疍積玉は、破裂せざるを得なかつた。西郷に對する、上意打の御沙汰は、此時に下つたのである。

その頃の、君命を待まずして、隨意の行動を、執る事は、絶対に、許されなかつた。下之關迄は、既に許されてあつたが、それから先へ、行く事は、未だ許されてなかつた。西郷は、君命を待たず、大阪へ行つた事になるのだから、久光は、激怒したのである。

然らば、西郷は、どういふ事情で、斯うした行動に出たか、それには、一と通りの筋はあつたのだ。大阪の蔵屋敷に居る、過激派の壯士が、久光の上洛を幸ひとして、不穩の企てを、して居る事が、くはしく判つたので、西郷は、これを鎮撫する爲に、久光の到着を、待つ暇なく、大阪へ、急行したのであつた。

従つて、その事情からすれば、薩藩の爲を考へ、久光の上洛に、大なる過失を爲せてはならぬ、と思つて、それが爲に、急ぎ上阪したのであるから、決して、久光が、怒る可き筋合の事ではなかつた。

けれども、長い慣習から見れば、君臣の禮儀を破り、久光を、輕んじたといふ事にもなるので、久光の怒りも、ひど

かつた譯である。

久光の左右には、小松や大久保の如き、物事に理解ある人も居たが、別に、佐幕で、癡固まつたものも居たので、それ等の人は、平生から、西郷を善く見て居なかつたので、斯うした場合には、久光へ對して、西郷の行動を、悪ざまにいふ事は、普通の人情としては、當然の事であつた。

小松が、いかに詫ても、大久保が、どう辯疏しても、久光の怒りは、決して解けるものでなく、上意打の命も、下つた次第である。上意打といふのは、見當り次第、斬つてしまへ、といふのであるから、此御沙汰が下れば、大概なものはお助からなかつた。

久光の一行が、兵庫へ着いてから、大久保は、西郷の來たのを幸ひ、築島の海岸へ、誘ひ出して、鞆刺ようとしたのが、此時であつた。

西郷は、自分丈け、死ぬ覺悟をして、大久保には、生き残つて忠義を盡し、久光の上洛を、無事にすませるやう、懇々頼み込んだ。此一條は、西郷編に、詳しく述べてあるから、全く省略して置くが、兩者の交情は、それほどに深いものであつた。

同時に、小松の諫言が、うまく利いて、西郷は、死を免かれ、また、流罪處分になつた。

西郷が、島へ送られたから、過激派は、伏見へ進出して、初めの計畫通り、事を擧げよう、とした。その背後には、長州藩の有志が、策動して居たのである。その他に、中山家の田中河内介も居た。

性急の久光は、初めて此事を聞くと、奈良原喜八郎等を遣はして、之れを押付けよう、とした。之れが爲に、争鬭が起つて、寺田屋に、血の雨を降らせた。

事が治つて、河内介は、薩摩へ送られる途中、大久保の差金で、慘殺してしまつた。河内介を、鹿兒島へ入れると、藩の動搖を起すものと見て、この手段を取つたのである。

久光を初め、左右のものは、此時に、長州藩に對する、感情が、甚だ良くなかつた。事件の背後には、相當の策應をして居ながら、いよく事が知れて、薩藩士の同志討が、寺田屋にあつた時から、長州藩の人々は、知らぬ顔の半兵衛を、極めて居た、といふのが、ひどく癪に、觸つたのである。

勅使護衛で、江戸へ下る時、毛利に、出し抜かれた、といふのは、その後の事で、先づ寺田屋事件から、長州藩に對して、強い反感を、有つやうになつたのである。

有馬新七を初めとして、有力の志士が、數名死んで居るほどの事件を、何の挨拶なく、看過して居た、といふのが、疝癪の虫にさはつたのであらう。

久光上洛の土産は、此一事と、西郷を、三たび島流しにした、といふ事の外には、大した事は、なかつたといふても、可い位である。

生麥事件

一

幕府を倒して、王政の古に復さう、といふ意見は、薩藩が先であるとか、長州藩が先であるとか、互に其の先後を、争ふて居るが、其の實を言ふと、何方が先であつたか判らない、といふのが、眞正だらう。然し、長州藩には、薩藩にあつたやうな、熱烈な佐幕派といふものが、無かつた。第一毛利侯父子が、幕府に對しては、關ヶ原以來怨みを有て居て、假令、討幕といふやうな、烈しい議論は有たないまでも、幕府を助けて、何うしやうといふやうな、弱い音は吹かなかつた。薩藩は、夫と全く異つて、齊彬にしても、幕府の改革を圖つて、皇室に對する、御奉公を大切にさせる、といふまでの程度には、進んで居たが、其以上、進んで幕府を倒す、といふ考へは、有つて居なかつたらしい。久光に至つては、元來が、佐幕派の老臣に擔ぎ上げられた、人であるから、自然、佐幕の臭氣は、充分にあつたのである。王事に竭す志が篤い、といふので、天盃を賜はつたり、兒島高德に、酷似た忠節である、といふので、三郎と云ふ、名を賜はつたりしたので、無上の勤王家の如く見えるが、實は、當時の状態において、朝廷が、島津を激勵する爲めに、遊ばした仕向け、と見るのが、至當であらう。此の一事を以て、島津を、純然たる勤王家である、といふ事は誤解である。討幕論を、公然普及したものは、平野國臣と、眞木和泉の二人が、一番に早かつた。其の聲は、あまり大きくなかつたから、天下に響きは、有たなかつた。けれども、此二人の爲めに激勵されて、討幕の決心

を強めた者は、多くあつた。熱烈なる討幕論者は、將に此二人であつた。長州藩が、眞木和泉に、重きを置いて、之を厚く待遇した、といふ點から、考へて見ると、長州藩に、討幕の意見が、夙から萌んで居た、といふ事だけは、信ずる事が出来る。

時に、攘夷の議論が、漸々熾んになつて、來て、何うしても、幕府をして、開國條約を破棄して、攘夷を行はせよ、といふ意見が多く、遂に朝意は、夫が爲めに決して、大原三位重徳卿が關東へ勅使として、下向する事になつた。國體の上から見て、朝廷よりの御沙汰であれば、一も二もなく、幕府は、従ふべきであるが、實際は、却々然うてはなかつた。又、勅使に對する、崇敬の念が、甚だ薄かつた。幕府の我儘は、殆んど頂點に、達して居た。其の中へ、勅使として下る人は、非常な決心がなければならぬ。大原重徳は、學問に淺くはあつたが、辯舌が善く、剛愎な人であつたから、特に此人を選んで、關東へ下す事になつたのである。其の入費などは、勿論、毛利が、竊に朝廷に獻納して、暗にお助け申上げた。大原卿は、夜を日に繼ぎ、大急ぎで、江戸表へ、乗り込んで來た。

幕府に於ては、此勅使下向に就て、酒井所司代から内容の報告もあつたし、今の場合に於て、此勅使を受ける、といふ事は、甚だ迷惑な次第であるから、成可く中止させよう、といふ意で、隨分、皮肉な運動もしたのだが、其の效を奏さなかつた。而已ならず、大原勅使は、非常な決心を以て、出發をした、といふ事も、判つて居るし、亦、其の勅命の如きも、却々強い御沙汰が、含まれて居る、といふ事も、判つて居るから、江戸に於ての騒擾は、大變な事であつた。

大原が、江戸へ着したのは、文久二年の六月の七日であつた。薩長の二藩主は、勅使補佐の、内命を受けて、久光は、東海道から、敬親は、中仙道から、之も急いで、出府をしたのであつた。幕府に於て、大原三位に對する、御馳走係は、江州大溝に於て二萬石、分部若狭守が、當る事になつた。辰の口の傳奏邸は、非常な支度で、大原勅使を迎へた。

島津と毛利は、ひとしく勅使補佐の、勅命を受けたのであるから、江戸に、下向するについても、充分の打合せを爲す可き筈であるのに、敬親は、久光に先立つて、中仙道から、急行してしまつた。それについては、何の相談もなかつた、といふ所から、久光はいふ迄もなく、薩藩の連中は、頗る不快に思つた。薩長の反感は、これが原因を、したのである。

二

初め、勅使を、關東へ下す、といふに就て、岩倉少將具視卿を以て、其の役に當てよう、と、したのであるが、其の事が評判になると、建仁寺の天章が建議して、岩倉卿の如き、達識名辯の御方は、一日も、京都を離れてはならぬ。勅使を下向せしめるのも、大切な事ではあるが、京都に、一人の大人物を留めて、萬一の場合に備へる、といふ事は、最も必要である、といふ、建白をした。夫が爲めに、岩倉の下る事は、中止になつて、其代りに、大原重徳卿は、此の勅使として、最も適任であり、その力量もある、と認められて、大命を、被つた次第である。

然れば、大原卿は、自分が勅使と、なつたのは、然らした事情からであるから、一生懸命に、其役を勤める決心になつた。幕府の方でも、夫が能く判つて居たから、此時には、餘程、注意を深くして、勅使受けの役は、脇阪中務大輔が命ぜられた。當時、將軍家茂の相談役ともいふべき、位置にあつた、越前の松平春岳は、勅使の到着する前に、病氣引籠りの届けを出して、缺勤して了つた。夫は、勅使の内意が、能く判つて居たから、迎も、自分が出た所で、今度の勅使は、幕府の意見と、折合の付くものでない、といふ事を見越して、僞病をつかつた譯である。

大原三位が、齎らした、勅命は何であるか、といふと、第一が、將軍家茂をして、至急に上洛せしめて、攘夷の事を決せしめよう、といふのであつて、第二が、海を控へて居る、大きな諸侯、即ち奥州の伊達、九州の島津、四國の山内、北國の前田、中國の毛利、之を沿海の五大藩と稱へて、之に幕府の參政、國防の大任を委ねる、といふのであつた。夫から、將軍の後見として、一橋慶喜を推す事、松平春岳を總裁として、慶喜と共に、將軍を補佐する、といふ事、此三ヶ條を、齎らして來た、といふ事は、能く判つて居るのだから、春岳は、僞病をつかつて、引籠つて了つたのである。

大原勅使は、六月七日に、傳奏邸へ入つて、直に十日に、登城をして、將軍と、對顔の式は、無事に行はれた。其の時に、三ヶ條の勅命を傳へたのである。更に十三日に登城して、關老の脇阪中務大輔と、板倉周防守の二人に面會して、勅命の御受けを促がしたが、關老は、今俄かに、御即答は成り難たい、といふ趣きで、曖昧の間に、其の日を過ぎた。十八日となつて、又、登城の上、老中へ迫つた。大原卿の切込み方が嚴しいので、遂に松平春岳は、總裁職のお受けを、する事になつた。尤も、夫に就ては、島津久光が、靈岸島の越前邸へ、屢々、足を運んで、春岳と、膝詰の談判で説付けた、といふ内情もあつて、春岳の事は、夫て決したのであつたが、一橋慶喜は、未だ後見たる事を、承知しなかつた。

這慶調子で、愚圖々々、日を送つて居るので、大原卿も、此の状態に憤慨して、迎も、普通の手段では、勅令の御受け、爲すまいと見た。自分は、岩倉卿に代つて來たのであるから、之を決する事が出来ないで、歸るやうな事があれば、再び御所へ出て、一同に顔を合せる事も、出來ないと考へた。於是、大決心を以て、此の事を決めよう、といふ事になつた。其月の二十九日に、最後の登城を試みたが、其の前夜に、大切な書類を、残らず焼き捨て、後の事を、雑掌の堀内典膳と、いふ者に托して、明日の登城は、自分の生死の、岐れる所である、といふ意を洩して、久光に、其の意を通じた。島津家からは、護衛の爲として、藩士の内から、何れも武藝に達した、立派な者ばかり選んで、御供を爲せる事になつた。此の勢ひを以て、登城したのであるから、其日の談判は、實に猛烈なものであつて、一週間違へば、幕府を、違勅の罪に問ふて、自分は、傳奏邸に死するの、覺悟であつた。之が爲めに、幕府も恐れ入つて、三ヶ條ともに、お受をして了つた。



無理押付けてはあつたが、勅使の事が終つたから、七月一日、再び將軍に對顔して、營中に於て、非常な饗應を受け、殘務を片付けて、彌々江戸を離れたのが、其月の二十一日であつた。

三

前回到述べた、勅命の三ヶ條といふのは、第一に、將軍をして上落せしめる、といふ事は毛利藩から言出したもので、兎に角、將軍を、京都へ引出して了はなければ、容易に事の運びは、決かねと見て、桂が、毛利侯に申上げて、更に朝廷へ建白したものであつた。沿海の五大藩をして、五大老と稱けて、徳川の爲に、參政國防の重任を盡させる、といふ事にしたのは、朝廷からの御發意であつた。一橋慶喜と、越前侯を、總裁といふ一事は、島津の獻策であつた。其の三ヶ條が、全部行はれた、といふのであるから、此時の勅使は、實に大成功といつて、然るべきであつた。大原三位の決心が強く、談判は猛烈であつたから、決つたには違ひないが、併し、其内部に於ては、島津の奮闘が、非常に烈しかったので、遂に松平春岳を動し、其結果が、餘程響いたのである。毛利も、多少は働いたが、此の時は、殆んど島津の舞臺といふても、然るべきであつた。

勅使の事が終つて、島津の一行は、彌々京都へ歸る、といふ事になつて、東海道を上つて來た。はや、品川も過ぎ、鈴ヶ森を経て、大森、蒲田、生麥に、行列が掛つた時、馬に乗つた、異人が三人、傍の茶店から、出て來ると、馬を飛ばして、先供を横切らうとした。

その時分に、大名の行列を乗切らう、といふやうな事は、大膽な話して、非常に難かしかつたものである。國を異にして、事情も知らないから、とは言ひながら、而も、騎馬で、行列を横切る、といふのは、些無法であつた。殊に夫が、日本人でもある事か、異人である、といふに至つては、事無くして、治まる可き筈はない。元來が、攘夷の思想で、固まつて居る、薩摩武士が、之を無事に、見通す事のあらうか。お先供の頭をして居た、奈良原喜左衛門が、

バラ／＼と駈出した。他の者も、奈良原が、駈出したので、其方を見ると、飛鳥の如く、跳り掛つた、喜左衛門は、ヤツといふ聲と共に、一人を、抜討に切つて落した。之を見て驚ろいた、二人が、馬を煽つて逃げようとするのを、跳掛つて一人斬つたうちに、殘る一人は、必死になつて、馬を駈させた。喜左衛門は、持つて居た、大刀を投げ付けたが、之は届かなかつた。其の儘に、行列は、生麥を過ぎて、其の日は、神奈川へ入つた。

難を遁れた、異人は、横濱へ歸つて、此旨を、領事に訴へたので、さあ騒擾になつた。斬られた二人は、英吉利の海軍士官であつた。當時の神奈川奉行、淺野伊賀守へ、懸合に及んだ。伊賀守は、事情を聞いて、大に驚き、神奈川の本陣に、泊つて居る、島津を訪ふて、懸合つて見たが、此の時の談判は、破る面白かつた。

伊賀守の求める處は、細かな事は後として、取敢ず今日、英人を斬つた者を引渡してくれろ、といふのであつた。然るに、島津の答へは、家來の中に、其の下手人がないから、渡す事は出來ない、といふのだ。伊賀守が、不審に思つて、

『然らば、お供の中に、其の下手人は、居らなかつたのですか』  
と訊ねると、島津は、澄ました顔で、

『恰度、那れへ掛つて來ると、道の左り側の、大木の根方の處に、蹲踞つて居る、浪人體の武士があつた。自分が、駕の中から、其者を見ると、以前に家來であつて、輕輩の岡野新助と、いふ者が控へて居つた。今は、扶持放れになつて、自分の家來ではないが、昔の主従の關係から、恰度、其所へ自分が、通り掛つたに依つて、可憐さの餘りに、控へて居たものであらう、と思ふ。其者が、行列を亂さうとした、異人に斬つて掛つた事は、確かに認めた。併し夫は、以前の家來で、現在は家來でないから、其儘見過して、此の神奈川の宿へ乗込んだのであるから、岡野は、何れに居るか、といふ事は、判らぬ位で、連も引渡す事は出來ない』  
と、いふて、一向に對手にならう、としなかつた。隨分、馬鹿にした話だが、然し、對手が、島津であるから、伊賀

守も、之以上に踏込んで、何うするといふ事も、出来なかつた。島津は、翌朝、其儘に立つて了つたので、その後始末は、餘程、幕府に於ても、苦んだのである。英吉利公使の方から、嚴重な懸合が来て、第一が、此の下手人を、極刑に處してくれろ、といふ事。第二が、死者の遺族に對して、相當の償金を求める、といふ事。徳川幕府から、英吉利政府へ對して、謝罪状を出す、といふ事。斯ういふやうな事を申込まれて、幕府は、此の時位、困つた事は、なかつたのである。此事變があつてから、攘夷派の意氣は、頓に昂つた。夫までは、關東に於て、攘夷派の意氣は、京都ほどではなかつたのが、此の際に、非常な勢ひを得たのである。有名な國學者、堀次郎が、番町で暗殺されたのも、其の當時であつたが、此の境を斬つたのは、伊藤俊輔であつた。

四

生麥の異人殺を述べた關係から、其結局が、何う爲つたか、といふ事も、掻摘んで述べよう。此事件は、昭和の今日になるまで、人口に膾炙して、却々、有名な事件である、而已ならず、近年になつて、英人を斬つた場所に、記念碑を、建てた位で有るから、之は一應の説明をして、當時の攘夷と言ふ事の、半面を窺ふ、史料にしたい、と思ふ。此英人を斬つたのが、後年の男爵、奈良原繁即ち、當時の喜八郎である、といふやうに、一般に弘まつて居るが、夫れは誤つて傳へられたのであつて、喜八郎の兄、喜左衛門が、斬つたと云ふのが、事實である、此人は、非常に擊劍の達人で、殊に、据物斬の名人であつた。然れば、英人を斬つた時にも、瞬きを爲る間に、二人を倒した、といふやうな、早技であつた。斯した事は、國の自慢になる、といふ譯ではないが、併し、當時の武士氣質の上から云へば、立派な手の中だ、と言ふて、稱賛に價するだらう。

其事の有つた翌年、即ち文久三年二月下旬になつて、英國の代理公使、ジョンミールと云ふ人が、軍艦を率ゐて、談判の爲に、やつて來た。漸々手續を終つて、幕府へ、正式の懸合が初まつたので、幕府も其の儘に捨ては置けない。當時の係が、外國奉行の阿部豊後守であつて、何しろ事件が、却々面倒なのであるから、翻譯係を、残らず集めて、ミールの持つて來た、書面を翻譯する事になつた。翻譯と言ふた所、現今のやうに、外國の書物が、充分に讀める、といふ人が、有つたのではなく、只僅に蘭書を學んで、夫れから拾ひ讀みして、辛じて英文を讀み得る、といふ位の程度であるから、此翻譯に就ても、却々の苦心であつた。専ら筆を執つたのは、森山多吉郎、田邊太一、福地源一郎の三人であつた。

森山は、當時に於て、有名な翻譯係で、先づ此人が、幕府の人としては、一番であつた。田邊と云ふ人は、號を蓮舟と言ふて、今の文學博士、三宅雄次郎の妻、花園女史の父である。福地は、長崎の出身で、年は一番に若かつたが、非常な奇才で、明治になつてから、一度は、新聞界の霸王と、まで稱された。例の櫻痴居士が、夫である。

原文は、廿枚許りの、長い物であつたが、其要求する所は、第一が、日本政府に於て、此事件に對し、謝罪使を、英國へ派遣する、といふ事。第二が、將來、英國人の生命財産に對する、充分の保護をする、といふ事。第三が、被害者に對する、賠償金十萬鎊を、提供すること。第四が、下手人を、嚴罰に處する事。第五が、島津家より、一萬鎊の金を出す事。以上の五ヶ條が、英國政府の要求であつた。第一から第三までは、幕府の責任として、承諾を求めが、第四第五の二ヶ條は、日本政府に於て、計らひ難ければ、英國政府より、島津家へ、直接談判に及ぶ、と云ふ事で、今後廿日間を期して、確答せよ、といふ事。此談判の條件は、幕府の爲には、非常なる問題であつて、容易に之を決する、といふ事は能ない。翻譯した條件書と、談判の要領を書寫て、直に閣老が、脇阪の邸へ集まつて、相談をはじめた。

此時、外國係の、若い役人の中に、一議論持上つた。と云ふのは、此事件に就ての責任は、全く幕府に歸するものであつて、今更に、之を如何に辯解した、とて、英國政府が、承認するものでないから、此要求に従ふのが、至當である。又、第四第五の條件に就て、島津家へ、直接談判をする、といふのであるが、然ういふ事は、爲せる譯には、

當時の係が、外國奉行の阿部豊後守であつて、何しろ事件が、却々面倒なのであるから、翻譯係を、残らず集めて、ミールの持つて來た、書面を翻譯する事になつた。翻譯と言ふた所、現今のやうに、外國の書物が、充分に讀める、といふ人が、有つたのではなく、只僅に蘭書を學んで、夫れから拾ひ讀みして、辛じて英文を讀み得る、といふ位の程度であるから、此翻譯に就ても、却々の苦心であつた。専ら筆を執つたのは、森山多吉郎、田邊太一、福地源一郎の三人であつた。

森山は、當時に於て、有名な翻譯係で、先づ此人が、幕府の人としては、一番であつた。田邊と云ふ人は、號を蓮舟と言ふて、今の文學博士、三宅雄次郎の妻、花園女史の父である。福地は、長崎の出身で、年は一番に若かつたが、非常な奇才で、明治になつてから、一度は、新聞界の霸王と、まで稱された。例の櫻痴居士が、夫である。

原文は、廿枚許りの、長い物であつたが、其要求する所は、第一が、日本政府に於て、此事件に對し、謝罪使を、英國へ派遣する、といふ事。第二が、將來、英國人の生命財産に對する、充分の保護をする、といふ事。第三が、被害者に對する、賠償金十萬鎊を、提供すること。第四が、下手人を、嚴罰に處する事。第五が、島津家より、一萬鎊の金を出す事。以上の五ヶ條が、英國政府の要求であつた。第一から第三までは、幕府の責任として、承諾を求めが、第四第五の二ヶ條は、日本政府に於て、計らひ難ければ、英國政府より、島津家へ、直接談判に及ぶ、と云ふ事で、今後廿日間を期して、確答せよ、といふ事。此談判の條件は、幕府の爲には、非常なる問題であつて、容易に之を決する、といふ事は能ない。翻譯した條件書と、談判の要領を書寫て、直に閣老が、脇阪の邸へ集まつて、相談をはじめた。

此時、外國係の、若い役人の中に、一議論持上つた。と云ふのは、此事件に就ての責任は、全く幕府に歸するものであつて、今更に、之を如何に辯解した、とて、英國政府が、承認するものでないから、此要求に従ふのが、至當である。又、第四第五の條件に就て、島津家へ、直接談判をする、といふのであるが、然ういふ事は、爲せる譯には、

なるまい。若夫を許す、といふ事になると、幕府の威信に、關する事になつて、將來、外國と、我が諸侯の間に、何事か起つた時分に、幕府が、夫に向つて、喙を容れる事が出来ない、といふやうな事に、なるだらうから、島津家に對する、要求の二ヶ條に對しても、幕府が、宜しく之を決定すべきである、といふ建白を、する事になつた。今日の灰穀とは、大分異ふが、併し、其の頃でも、外國の書物を讀んで、幾分か、世界の事情に、通じて居る連中であるから、斯うした建白もしたのであるが、併し、幕府は、逡巡して、却々處決する事が、能なかつた。日が延びるから、ミール代理公使の方からは、嚴重の懸合がある。老中會議は、容易に決らない、といふ次第で、其當時の混雜は、非常なものであつた。

五

其混雜の時に、幕府から出した、布告の一節に、斯ういふ事があつた。  
 應接の様様に依りては、兵端を開くべくやも、固り難く、自然、右様の事變に至り候時は、假令御兵備御手薄にて、御勝算は無之とも、已むを得ざる儀に付、死力を盡して、防戦の覺悟有之べく云々。  
 實際に於て、戦ふ氣力は無いまでも、斯ういふ布告を、出した位であつたから、下々の騷擾は、却々甚かつた。旗本や、御家人などは、其妻子を、夫々親戚に預けて、何時でも、幕府の沙汰に依つて戦ふ、と言ふまでの決心をした程で、江戸市中の混雜は、實に非常であつた。古老の説に聞くと、氣の早い者は、上總房州邊りの親戚や、知己を便つて、立退いた者もある位で、家財等を、拾賣に賣拂つて、金に爲る、といふやうな者もあつた。金を儲けたのは、此のどさくさ紛れに、度胸のあつた道具屋と、脚の達者な人足であつた。極上等の疊が、一枚百文に賣れなかつた、と言ふのだから、以つて、當時の混雜の狀は、察する事が能る。  
 殊に、其當時は、將軍の家茂が、上洛をして居て、留守居の老中、井上河内守と、松平豊前守の二人が、専ら其事

に與つて居たのであるから、却々、此の問題の處置を付ける、といふ事は、困難であつた。ミール代理公使からは、漸々期限が延びるので、嚴しい懸合が始まる。幕閣は、益々窮して、今は進退谷まる、といふ有様であつた。所へ、小笠原圖書頭が、京都から、引返して來て、臨時に、會議を開く事になつて、彌々英國の請求に、應ずる事になつた。小笠原が、歸つて來た、といふのは、將軍の意嚮を、齎して來たに違ひない。於是、神奈川奉行の淺野伊賀守から、ミール代理公使に對して、第一第二第三の三ヶ條は、其請求に應ず、といふ返答に及ぶ。第四第五の二ヶ條は、英國政府より、島津家へ、直接に談判をして呉れる、といふ旨を答へた。乃て、先づ幕府と、英國との間に於ての談判は、一段落を、告げた譯になる。

然るに、此事を、幕閣で決めると、例の外國係をして居る、若し連中が、却々承知をしない。英國政府をして、幕府を、措て、島津へ、懸合を開く事を許す、と言ふやうな事は、外國の政府をして、日本の内事に、干渉を爲せる端を啓くのと、同一事であつて、將來の弊は、怖るべきものがある。幕府は、三百諸侯を率ゐて、六十餘州の政治を預かつて居るのであるから、島津に限つて、此度の事件を、英國政府から、直接に懸合せる、と言ふ事は、甚だ宜しくないといふ、はげしく議論を、する者もあつて、遂に之れを、一篇の書面として、又々、老中の手許へ、意見を上申した。雖然、夫は何の効もなく、事は決して了つた。今日から考へれば、實に馬鹿々々しい事ではあるが、當時の老中等の意見は、英國政府に、島津家へ、直接の懸合をさせて、薩藩の勢力を、殺ぐ事が出来れば、却て幕府の利益になるといふやうな、愚な意見を、有つて居た爲めに、折角の外國係の意見も、用ひられなかつたのである。英人の力に依つて、薩藩の勢力を殺ぐ等と、云ふ事を考へた、一事を以ても、幕府の威信は、已に地に墮て居た、といふ事は判る。

幕府の答を得たから、ミール代理公使は、直に薩藩へ、談判を爲すべく、文久三年六月二十八日、水師提督ウイル

モツトの、指揮の下に、七隻の軍艦を以て、鹿兒島灣へと、乗込んで来た。漸々、懸合に及んだけれども、薩藩の答辯は、前回に述べた通り、下手人が不明である、といふの答へを、飽までも、固持して、下手人を出さず、といふ事を承知しなかつた。殊に、攘夷は、朝廷の御沙汰であるに依つて、吾々の奉ずる所であるから、假令、藩士が、爲した所であつても、償金の求めなどに、應ずる理由は無い、と言ふて、其請求は、勿付けて了つた。最早、平和の間に、解決を見る事は、出来ないと言ふ事になつたから、七月二日、英國の軍艦から、砲戦を開始する事になつて、茲に激しい戦闘は開かれた。

六

此時の戦闘に就ては、随分、奇談が多くあつた。大砲の数が、少いと、敵に侮られる、と言ふので、水瓶や樽のやうな物を、黒く塗つて、海岸の堤際に、ズーツと列べて、速くから見れば、大砲が、列んで居るやうに見せた。然るに、敵艦には、望遠鏡の備へがあつて、遠く之を見ると、大砲ではなく、樽や瓶の様な物であるから、日本の兵器は實に不思議な物である、と思つた、と傳へられてある。

時しも、夏の事、炎熱、炳くが如く、彼我共に、此暑さで苦しんだのであつたが、逆も、砲撃では及ばない、といふので、當時の若い連中が、素裸體で、長い刀を一本宛、腰に打込んで、小舟の中に躲れ、其の上に、西瓜を山のやうに積んで、之を戦闘の間を見て、敵艦へ賣りに行く。若し先方が、夫を買ふ爲めに、階子を卸したら、西瓜の下から若侍が、跳り出して、敵艦へ切込もう、と言ふ事に、計畫したものがあつて、漸次、敵艦へ近付いて行くと、敵は、小銃を亂發して、積上げてある西瓜を、海の中へ、撃ち落とした。之を烈しくやられたので、西瓜の下から、人間が出て、只大きな聲で、罵り喚いて歸つて来た、といふやうな、面白い事もあつた。現在の東郷元帥が、未だ十六の時分、天保山の岬の、臺場の上に、備付けてあつた大砲の上に乗つて、旗を振りながら、踊つたと言ふ。小僧

乍らも、此の勇敢なる態度には、味方の先輩が感心をして、東郷の名前が、薩藩士の間知られた、と言ふやうな事もあつた。

斯ういふ事情で、小兒が軍艦を、するやうな事で、幾日かを送つて居たが、其内に、敵艦が港内、深く入つて来て、激しく破裂弾を撃出した爲に、遂に火を起して、鹿兒島の市街は、八分通り焼拂はれた。之には追の猪武者共も閉口して了つた。之れを見ると、敵は、陸戦隊を組織して、どしどし上陸をして来たまでは、宜かつたが、上陸すると、忽ちに彼所此所の物蔭から、素裸體に、腹巻一つで、藩士が抜刀、或は手槍を携へて、切込んで来た。遠く離れての砲撃ならば格別、陸上にあつての、白兵戦と来たら、日本固有の武術と、膽氣を以て、壓する事が能るのだ。之で、敵は非常な敗北を遂げてしまつた。又、其旗艦が、櫻島の袴腰の前に、鎧を掛けて居たのを見て、櫻島に潜伏して居た、決死隊が、袴腰の上に大砲を引揚げて、眼下に瞰下して、旗艦へ、砲撃を加へた。其の下からは、小船に乗つて斬込む、と言ふやうな、猛烈な戦闘を開いたので、敵艦は、非常な狼狽をなし、殊に、水師提督のウイモツトは、此一戦に、討死をしたから、這々の體で、軍艦は、沖合へ逃出した。時に、其鎧を引揚げる間もなく、鎧網を打切つて引揚げたのである。かくて此戦は、一段落となつた。

水師提督を失ふた、敵艦は、意氣沮喪した上に、薩藩の戦闘力が、存外に強く、損害を被むるばかりであつて、此の先、戦ひを續ける事の、不利益である、と言ふ見込を付けたので、横濱へ、軍艦を、皆引揚げて了つた。而うして更に幕府へ、談判を開いたので、さア、幕府は大狼狽した。英吉利人の力に依つて、薩藩を、酷い目に遭はせようとしたのが、却て斯ういふ始末であるから、今は、意氣地無くも、幕府が仲介の勞を取つて、島津家に、示談の運びを付けるといふ、滑稽劇が演ぜられて、薩藩の使者も、横濱へ出て来る。漸次、懸合の末が、下手人は、眞實判らないのだから、已む事を得ない、といふ事になつた。其一ヶ條はグニヤノの中に終り、一萬磅を金を出す、といふ事は承知したが、現在は、薩藩が、疲弊して居るから、一時、幕府が立替へて出し、薩藩は、追つて幕府へ支拂ふ、とい